

江戸名所圖會

四

W245

20



鈴森八幡宮 鳥石

鑑懸松

八景坂

磯副松

行慶寺

荒南塚

戸越八幡宮

木原山 相模 桃雲寺

蓮華寺

女塚

長榮山 本門寺

樓門

題目堂

寶冠 同慶寺

中延八幡宮

美福寺

馬込八幡宮

風東寺 峰の薬師堂

光明寺の池

猪木村 光明寺

貴船明神社

蒲田梅林

矢口村 彰田明神社

圓頓寺

蒲田八幡宮

古川 薬師堂

六郷八幡宮

大森 同慶寺

行方 禅心 忠明 蓮宅地

高畑村 光明寺

妙安寺

長照寺

長照寺

六郷渡

羽田 舟子 天社

河邊 新 良 天社

河邊 高 重 宅地

堀内 山王宮

洲 河 系 桃 林

尾 除 大 師 堂

池上 氏 祈 藏 蜂 籠 屋

末 廣 松

成 龍 院

石 觀 音 堂

同 居 住 旧 址

燒 々 森

直 躬 丸 湯 御 早 膳 塚

宋 参 寺

養 光 寺

依 々 水 明 神 社

市 場 觀 音 堂

鶴 見 川

末 吉 不 動 堂

成 願 寺

慈 眼 堂

白 旗 八 幡 宮

松 隱 寺

義 言 入 道 墓

神 奈 川 禪 院

林 滿 院

浦 島 古 事 同 慶 寺

浦 島 塚

上 忍 川

北 条 上 杉 合 戦 場

洲 邊 明 神 祠

慈 野 権 現 社

洲 邊 明 神 祠

慈 野 権 現 社

洲 邊 明 神 祠

宗真寺

雲松院

折本淡島明神社

本覚寺切通

版綱権現社

姥島

帷子里

左神宮

蒔田城跡

青木明神社

神明宮

金澤 同敷

金沢 同敷  
金沢 同敷  
金沢 同敷

観音山

小机城跡

本覚寺

袖ヶ浦

本牧十二天宮

帷子川

品野坂

兼蓮寺

くさき寺

杉田梅園

独見堂

美如石

慈光権現山

泉谷寺

多目周防宅地

陽光院

富士法間洞

吾妻好神社

程ヶ谷新町

古町街道

二位禪尼堂

同海流と製子園

擲筆松

稱名寺

慶雲寺

師忌慈光権現宮

西向寺

道灌山

洲乾系姓天洞

杉山神社

神戸川

界木

任右明神社

二玉門

二玉門

二玉門

二玉門  
二玉門  
二玉門

金澤文庫舊址

薬王寺

浦の郷

野島の渡

照天松

圓通寺

法仁寺舊跡

六浦川

光傳寺

岩根権現社

烏帽子島

名産甲香

河折ヶ谷

薬師堂

善應寺

洲崎

瀬戸明神社

金龍院

上行寺

光光寺

界地藏

雀ヶ浦

夏島

兼好法師閑居舊址

天然寺

野島

瀬戸

泥半菴

岩松寺

油堤

三艘浦

中島岩根付岩

猿島

新華寺

瀬戸橋

瀬戸辨財天

日高上人加持水

六浦

侍従川

太寧寺

榎戸湊

裸島

萬松山東海禪寺 呂川北馬場よりあり花洛大徳寺派の禪宗

江戸觸頭の一員より當寺ハ輪番中より年々八月より交代せ

寛永十五年戊寅 台命を奉じて澤庵和尚開創す

所の禪園 塔頭十七

佛殿 釋尊の像を安んず 額 祈禱堂 天倫筆 二重家根額

世尊寺殿 同筆 山門樓上より觀音を安んず 額 潮音閣 大明院宮

公辨法親王真跡 中門額 東海禪寺 天倫筆

鐘樓 本堂の右よりあり 要津橋 南の方より 千歳杉 同所橋あり

門へ杉道の右よりあり 鏡水の項 大樹命 世尊寺殿 釣玄室 池の北の汀よりあり

十境の一に宝曆の頃暴風吹折りて今ハ其幹 千歳杉と云とも是也 浴鳳池 大樹命

山下清泉流出即引之開一池於室之北面云云 釣玄室 二十年仲秋の頃澤庵和尚

此所より法門あり一則十境の一なり 東海和尚年賦云寛永二十年癸未仲秋之夕

台駕入東海既月於山亭台願治治而出山亭猶兼月明倚池上小亭亦侍傍云云 萬年石 池中東の方

其時遠州彦小堀政一命せられしをせらるる所なり

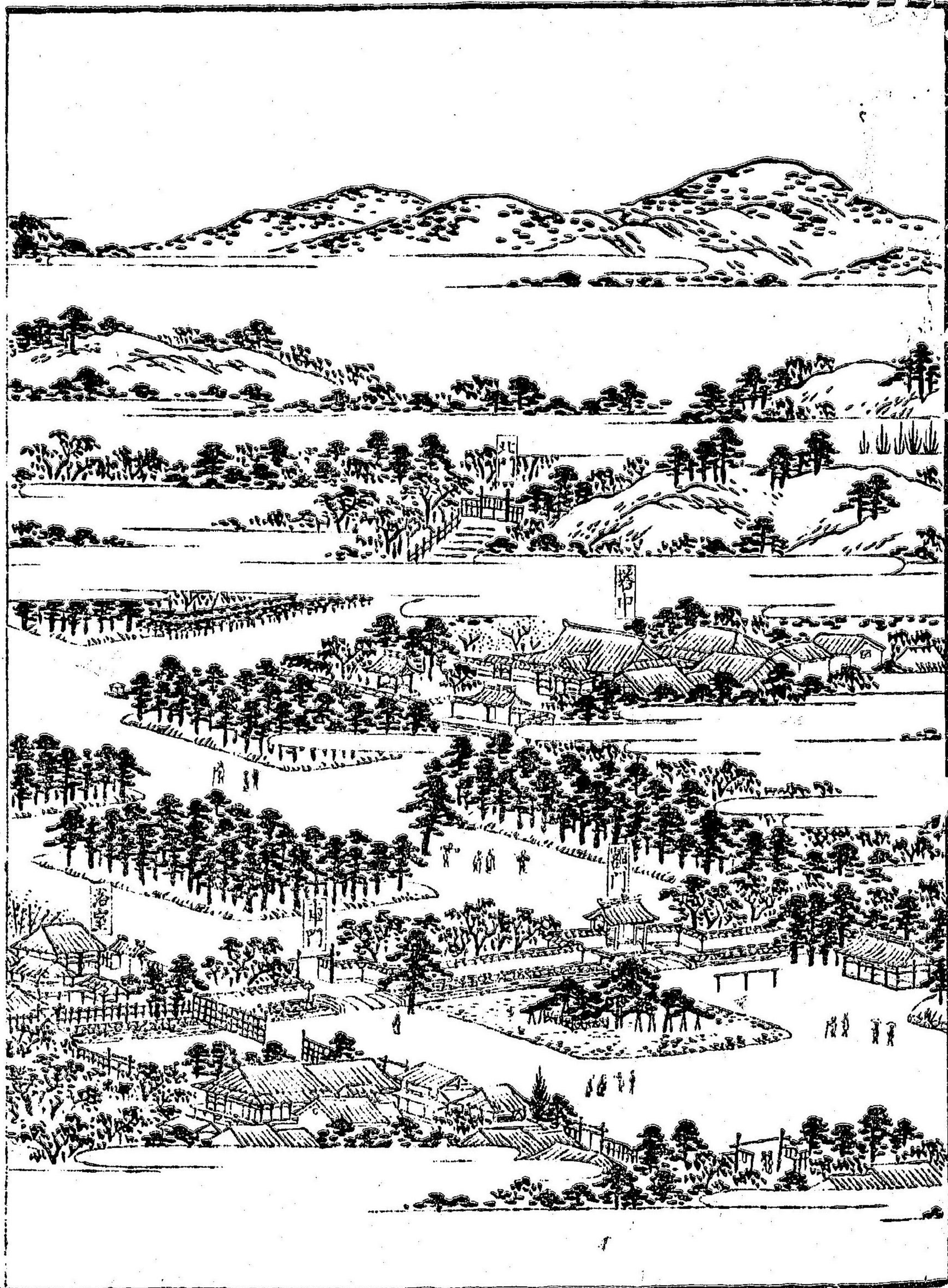
午頂天王社  
東海禪寺



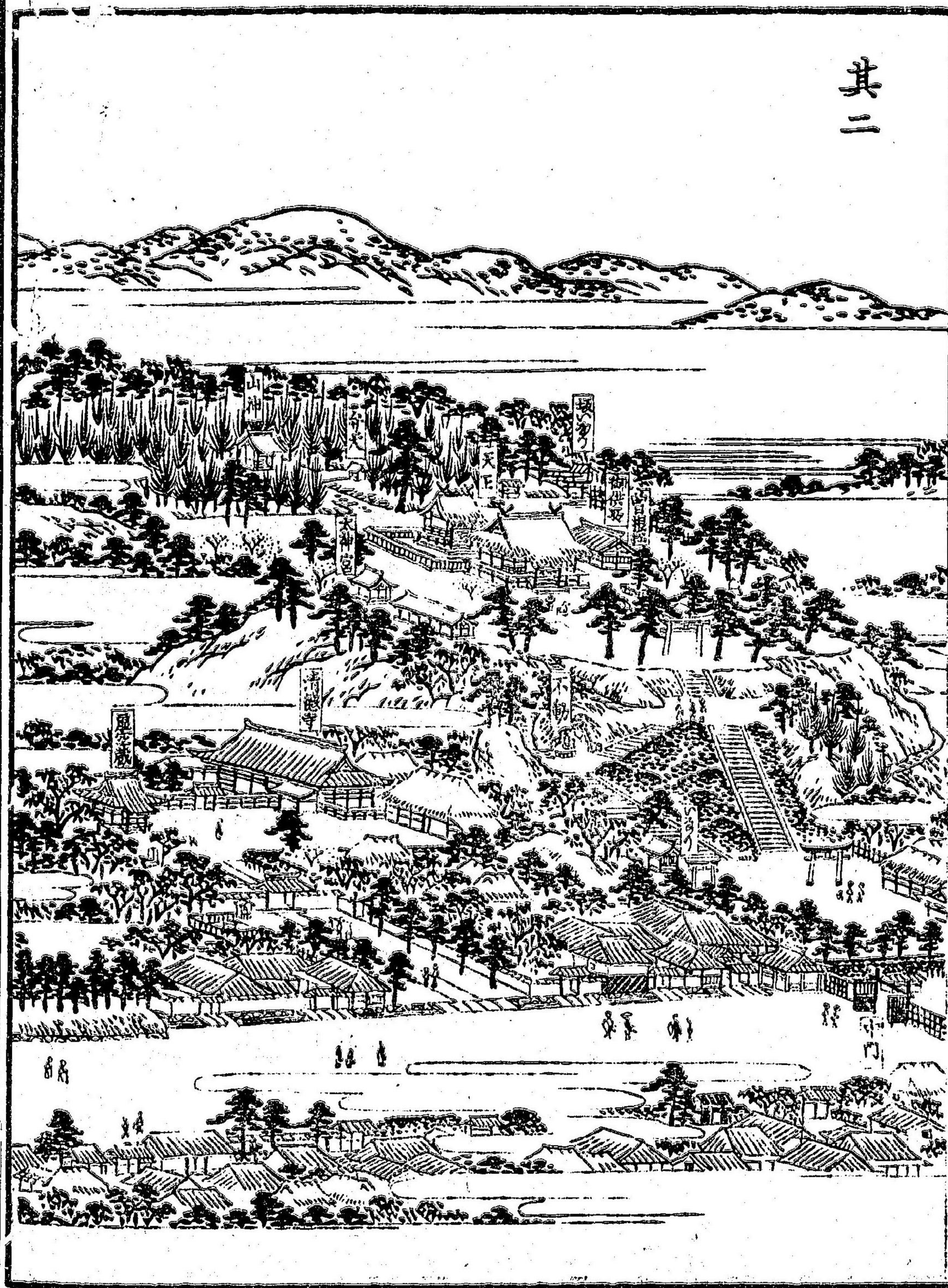
法寶堂

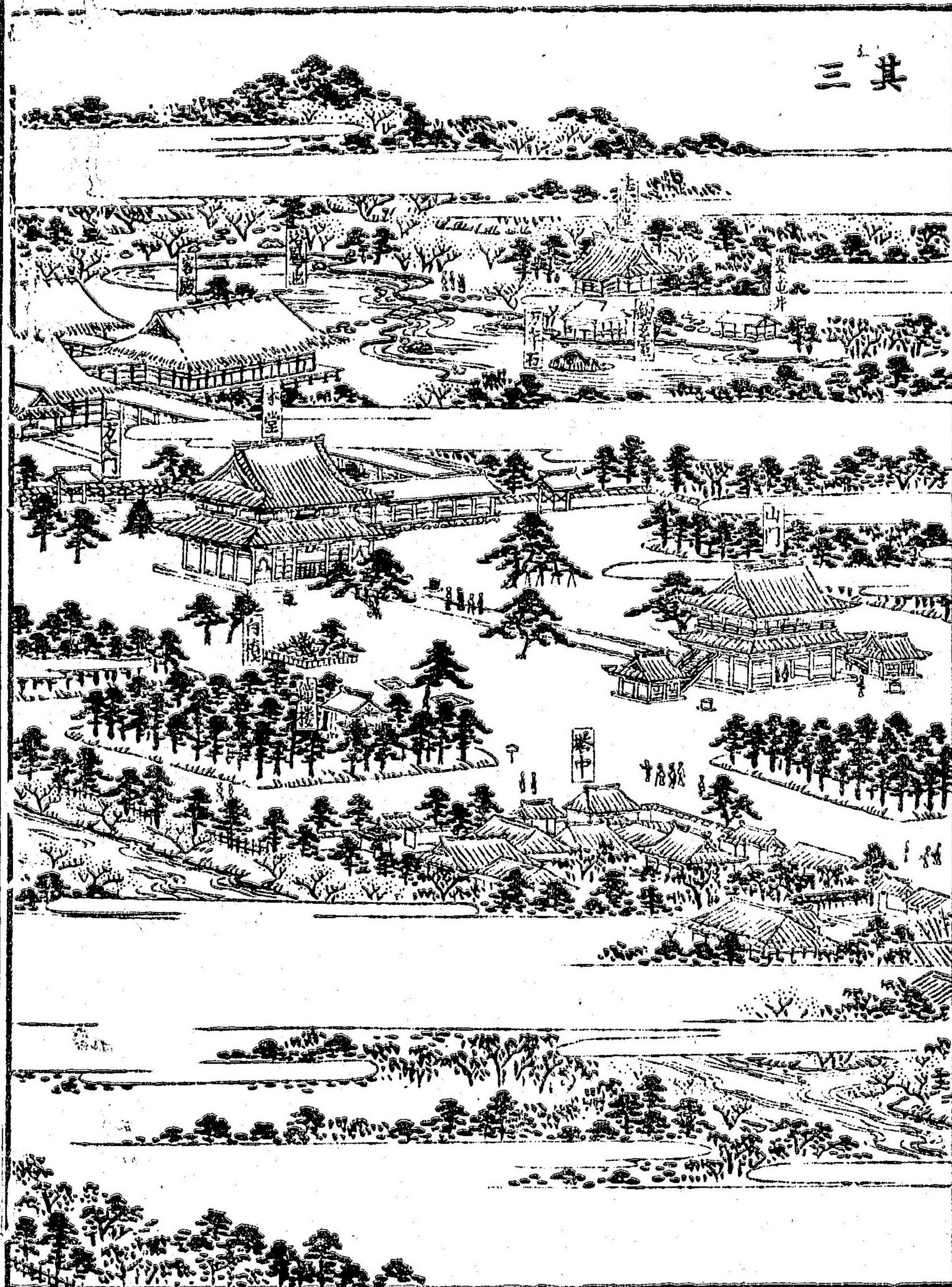
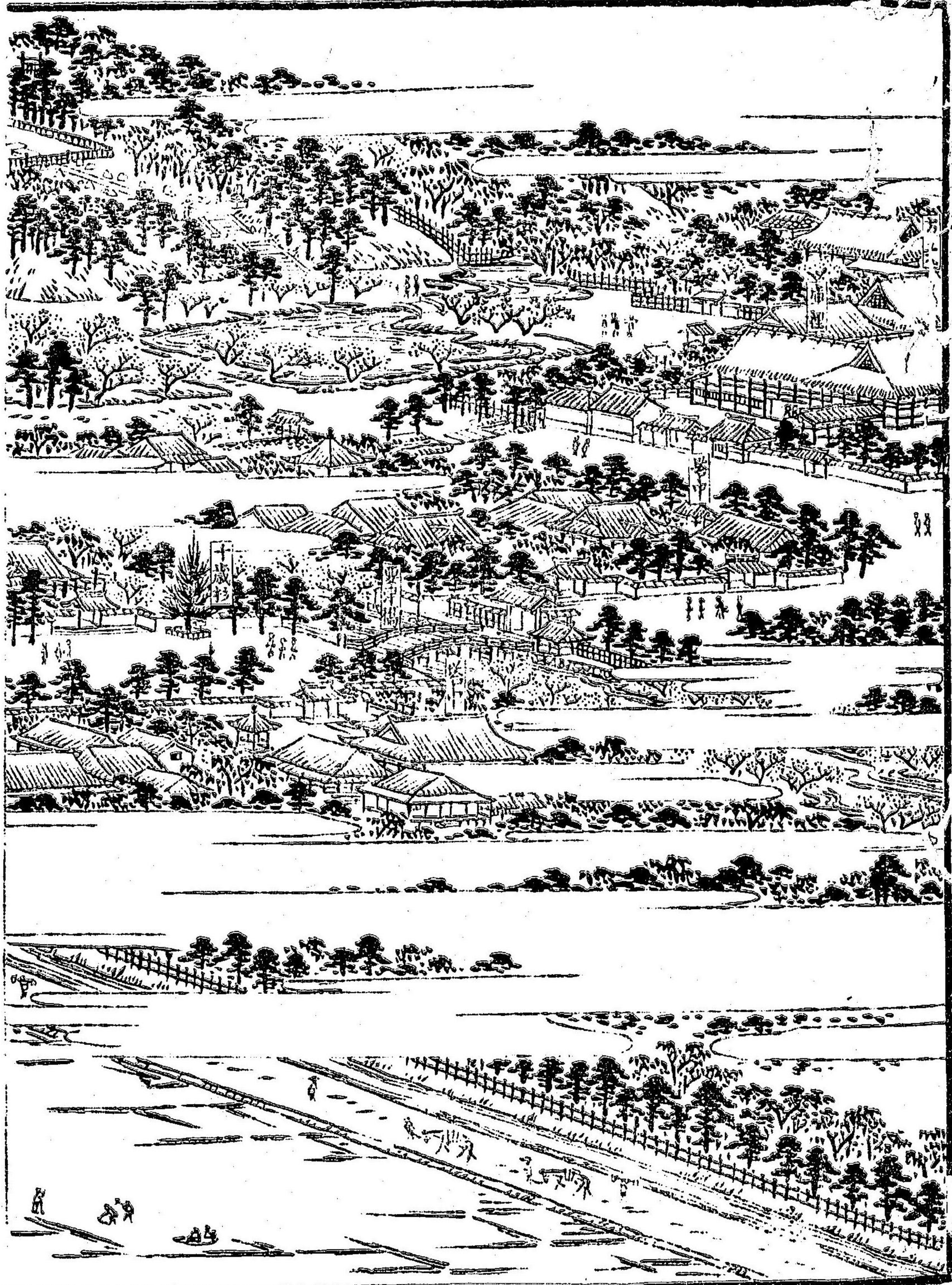
あり切経を収蔵せしむる池より北に  
あり當寺十境の其一なり  
茂院内佛廟下等の杉並上り  
加書院内佛廟下等の杉並上り  
物花野探幽の筆なり

萬年石之見記  
左見之無移  
石見乎或奇  
之骨乎或由  
裡痴兀而合德  
貴也似得恬淡  
極各以所守靜  
名相半也思聞  
酌一即起小焉  
君下佳言曰向  
况於石乎鳴  
下發光而陟  
且千限凡者  
千始無窮  
以累此則  
則我華頂  
其幾萬萬  
以命如世  
以春迎驚  
以釣其則以千千且下君酌名極貴裡之翁石左萬  
春命幾累此始而發况於佳一半以似得兀骨石見府石  
迎如萬華無千限光於石言即也所守恬淡合或或無移  
驚世頂窮則凡而石言曰起時思靜淡合德於由奇  
豈矣萬為窮數陟乎曰起小聞焉也無容覽醒形  
可村八石萬者變鳴不向小聞焉也無容覽醒形  
輕語十之以始改呼疑石焉也無容覽醒形  
以文壽萬一其石是三遠於之是之兮惟台茲  
和銘猶量筭而觀乎萬呼江此趣世白李狀座寬  
氣曰在以則窮益哉年萬守諸相而之額惠不於永  
住一麓石不十為石年政子君有求乎詔端此葵  
山園者之知始萬乎也石一雖命谷奇共之險池未  
老無重耶壽幾十之哉大石侍有侍神者不石提沼三  
納盡於以量十而言入度三茶所臣不未然乎立下月  
澤藏九世比百窮也于之点燼思曰死曾唯皆若池十  
庵鼎計千百未一頭下非此之知突不由有四月  
宗以萬則萬始必言矣無石體此兀然醉島日  
影秋年復君億百可台以所不如石而彼兮島偶  
敬送石不壽兆則以覽定君懼可至之在防粟有  
書復知山年窮十一天有樹無虛所草風里幽



其二

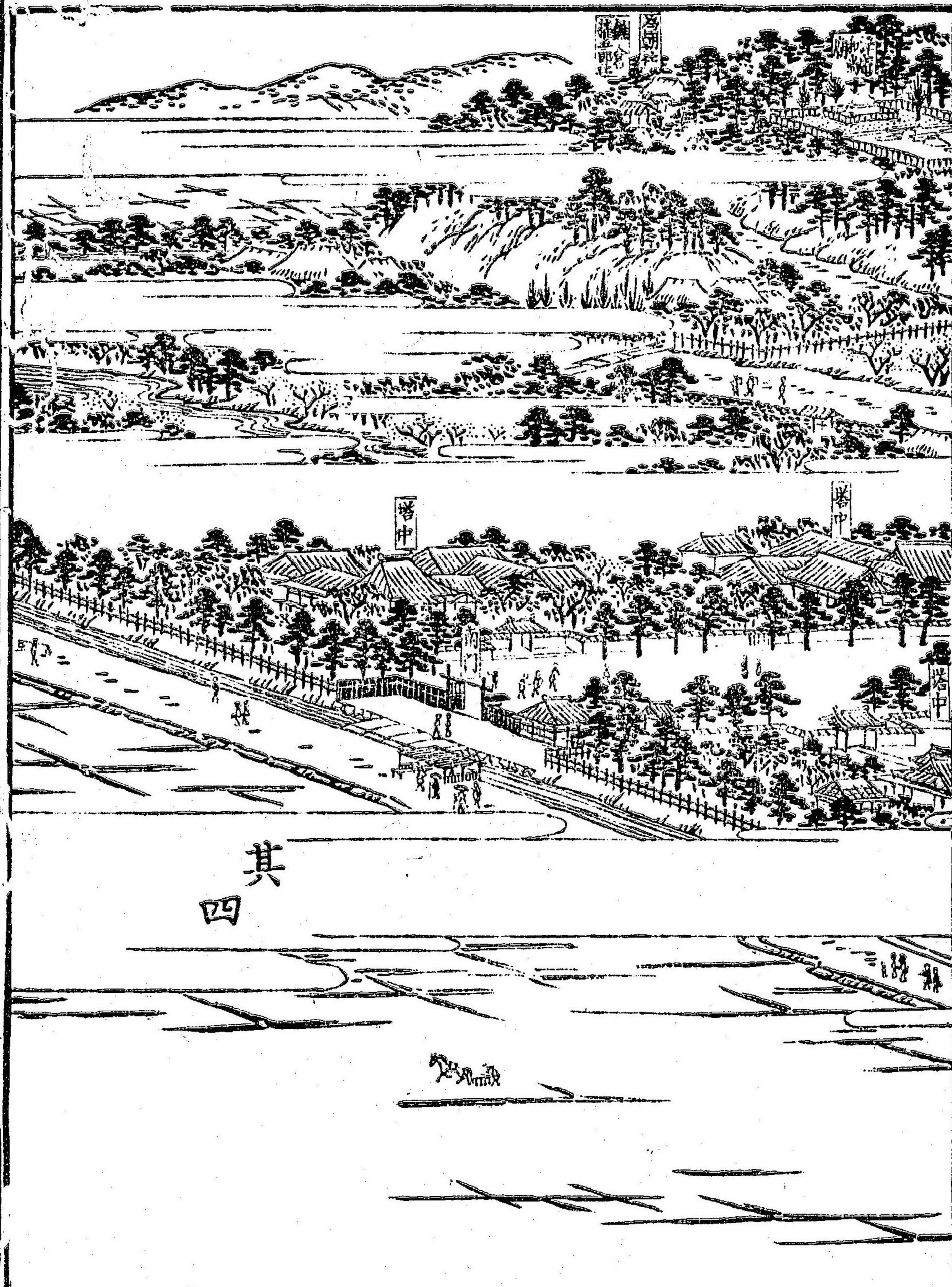






開山者南浦明和尚正塔並序南遊棹入大徹終國偏歷諸  
 昔時虛堂本朝而啟迪其法者以洪大計精興之  
 老印歸于一師其餘人嗣師入者十有五法以盡方今  
 正室燈國證明而後也二師燈相續明起不盡自謂  
 其大色得山林爾閣降燈也師於西馬出石縣平  
 耀于朝延其化者澤庵初禪生於西堂於法  
 挑其炳照其暮翁天正初禪生於西堂於法  
 也晚將東海其化者澤庵初禪生於西堂於法  
 氏少受僧業於邑之宗鏡禪師先於西堂於法  
 諱曰秀喜業於邑之宗鏡禪師先於西堂於法  
 典每聞先師之語有而宗鏡禪師先於西堂於法  
 德禪師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 大德師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 寺師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 國師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 師師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 朝師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 汎朝師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法

開山者南浦明和尚正塔並序南遊棹入大徹終國偏歷諸  
 昔時虛堂本朝而啟迪其法者以洪大計精興之  
 老印歸于一師其餘人嗣師入者十有五法以盡方今  
 正室燈國證明而後也二師燈相續明起不盡自謂  
 其大色得山林爾閣降燈也師於西馬出石縣平  
 耀于朝延其化者澤庵初禪生於西堂於法  
 挑其炳照其暮翁天正初禪生於西堂於法  
 也晚將東海其化者澤庵初禪生於西堂於法  
 氏少受僧業於邑之宗鏡禪師先於西堂於法  
 諱曰秀喜業於邑之宗鏡禪師先於西堂於法  
 典每聞先師之語有而宗鏡禪師先於西堂於法  
 德禪師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 大德師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 寺師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 國師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 師師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 朝師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法  
 汎朝師董甫仲公宗鏡禪師先於西堂於法



弟命身月月号受疾如寺復之入寺暮黑号河大問卓鈞然飢下生  
子也於十不而道預一其舊鞏山曰下不無 上法庵命師在痛涯  
武門東一痊烟俗知點可規固草東於日國 皇學曰召知寬按河  
野人海日一 予緣墨知之識木海金而師皇召曉檢還其永淵飲  
氏在之也日 購盡書也 新生落城下号情入通東二行已軒歸  
安泉西世曉朝來遺于正 筑輝成南謚也大 優晉翁止已折山  
齋南北壽天奏僧誠贊保鈞之師之品天願悅 濕寓師係師脚陰  
翁者岡七棧莫著云詞乙命久奉日川應下師仙耐止抵數有鋪之  
往祥唯十筆入衣癡於因益昌 賦創大 奏院望焉武不事內故  
年雲種有書木契全其夏是辛 賀草現論我講愈 陵變昇燕里  
昇樹松三慶牌飯身上令依已鈞頌苑國旨山原高 於容玉麻構  
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刹師 第人戊暮城色室臺一  
行名其臘字本平後為師之降賦登使有 二輪寅下外士翁粟把  
實曰上五泊寺日山壽劃所使和札師功上世辨秋微民申同豆形  
求寂不十然之矣莫空一顧本歌厥住于皇徽國師師村 駁給於  
銘然樹有而祖且編同圓也寺一後持曩允翁啟之於一 于日宗  
其囊塔九遊堂莫經年相有出首 山祖之唯起東營牛幕窮食鏡  
塔背益瘞實云為設仲相功世祈 曰若坐有如師中鳴下卿而主  
因參假下十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸 時之降遐無山  
指學遺全二彌謚莫示親本法基與松也寶師江 時地 微有之

勝赤慈邑在寅禪峰延驩緯寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之  
梁靖城之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典  
抱涼視南門造問其為如古二板師春室護子能平匠所鏡之就籍  
回時聲再巷大道去開見人年着昔聞師同麼殺素馬契按機明附  
廈寓邑建乙仙詰留山點風而繼衆師之邑子佛作鏡悟同辨堂師  
光南若南卯之且知祖佛味入臨陽勤酬有失者略壽技邑縱古初  
猶京泡宗南拾馳其也同亡院德春辨對宗笑快入像印南橫鏡雲  
有之如不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂麾索證宗應禪英  
時芳有亟雁軒謝重翻有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉  
橋林時不鬱師之陽法宗還寺年慶異而為不突而鏡号師如一公  
城菴在徐攸禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉日執響凍玉  
州藪泉尋之坐丑殿慶者于德八丁謨轉考起云降毫澤侍實滴甫  
薪光南復災之一下之剝泉一月未云珠齋大父魔書菴巾透公琮  
之匿天舊師暇新信讚建南香主師真回緇平攘宗曰賦瓶網住公  
妙耀下觀告編南尹之一泉為龍年跨也侶天羊活鹿松日金邑以  
勝有邑師邑大宗公于巷南古興三竈此殊下隱機而夜夜麟之法  
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器  
守入變名相年鐘夕南日素供南有也鏡圓領底由描其究頭春期  
空泊幽利收譜樓入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師  
寂瀨遠若於叔甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛肩師知青師招

未果亦效故賚之不己講習道義於乃師者莫若余也  
於翁正汎然故賚之不己講習道義於乃師者莫若余也  
虛堂正汎然故賚之不己講習道義於乃師者莫若余也  
真子孫世孫古大鏡燈大日現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
經過十室海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
師播四其室海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
道矩疊中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
一圓相湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
淵而才明矣湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
語機峭峻矣湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
橫射山峻矣湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
姑日無礙然湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
塔去無礙然湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
無日無礙然湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
天覆北載來湧中規海觀空相輝現東聊記蔓之鳴者遂鳥之銘曰通  
右泉興國南禪寺寂然塔僧錄司最岳元良和尚所  
大平興國南禪寺寂然塔僧錄司最岳元良和尚所  
寶層三年癸酉冬十二月十一日騰寫以立於萬壽  
山東海禪寺慈蔭塔下現住開田義問併拜書

開澤庵和尚影像一幅  
正保二年乙酉師歲七十三畫工  
讚語の南の海合の蔵せり  
影像一幅  
正保二年乙酉師歲七十三畫工  
讚語の南の海合の蔵せり

無名子旨予曰邀得和尚之真辰見則一圓相龍也  
野點一十餘九即書曰昔日仰之真辰見則一圓相龍也  
海志錄九十書曰昔日仰之真辰見則一圓相龍也  
坐其此圓相包女地無外窮元無瑕劃一圓相龍也  
家似豆此圓相包女地無外窮元無瑕劃一圓相龍也  
修籬此圓相包女地無外窮元無瑕劃一圓相龍也  
些方薩此圓相包女地無外窮元無瑕劃一圓相龍也  
法王不募前全體顯諸人難我羅漢物是太列無相如  
彌勒不募前全體顯諸人難我羅漢物是太列無相如  
杜多却增聲前全體顯諸人難我羅漢物是太列無相如  
呼衣蒲重子聲前全體顯諸人難我羅漢物是太列無相如  
酢衣蒲重子聲前全體顯諸人難我羅漢物是太列無相如  
添我氣下請看聞課湯阿闍世王難我羅漢物是太列無相如  
爹我氣下請看聞課湯阿闍世王難我羅漢物是太列無相如  
生我氣下請看聞課湯阿闍世王難我羅漢物是太列無相如  
萬般野喜奈勢縛羅我羅漢物是太列無相如  
所捨已野喜奈勢縛羅我羅漢物是太列無相如  
前絕無已野喜奈勢縛羅我羅漢物是太列無相如  
將來等差底中若者落邊邪佛祖傳錄方語照檢  
正保來等差底中若者落邊邪佛祖傳錄方語照檢

海屋添壽九十一天下  
あゝ人の影と戀  
前住大徳見東海比丘某老七十三

山林院  
林泉  
縣居大人  
墓  
南郭先生



縣居大人墓

塔中山林院の後山より當院過去帳に玄珠陸真淵後龍居士  
とあり 明和六年己丑十月晦日歳七十三や七身まうり 後兼堂  
巻よ詳

南郭先生之墓

南郭先生之墓 同 柳塔よりあり一家の墳墓並に建り先生姓ハ服部氏津八  
島七黨の一や 曾祖父某越中國高島は徳父の諱を元根とす 京師より移  
母ハ山本氏なり 天和三年癸亥生る 歳十四 江戸に來り 祖株先生ハ業ヲ受凌三年  
柳澤侯は仕入凌十八年致仕 宝曆九年己卯夏六月廿二日卒 以壽七十七とあり  
墓碑の銘文ハさふ畧と其碑陰ハ從四位下侍後源賴順 臣高元碩 謹書とあり  
鎌倉權五郎景政靈祠 同所春兩庵の後の山よあり 東山 津庵和尚寛永六年  
己巳より同九年壬申に至り 逆羽州上の山に葬せられ  
項の草薙春兩庵と移され せり

此寺ハ品川の勝區中々門前の緑水を潺湲とく品川乃

流海口を通も屋凌青山崔嵬とく祇植の祠松間ハ聳ゆ

茂林脩竹風帆沙鳥の勝覽筆の乃ふりあり 以殊更方

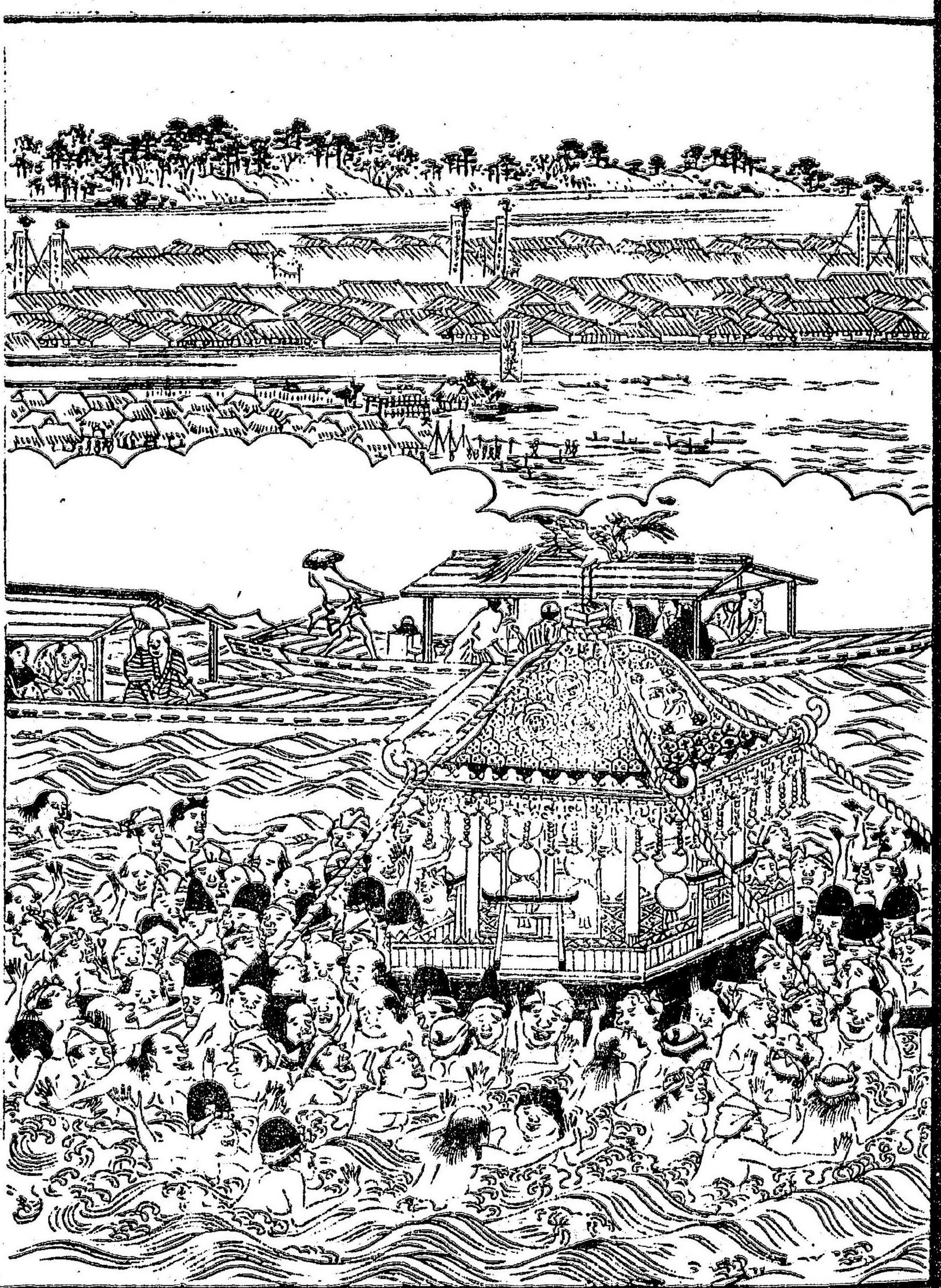
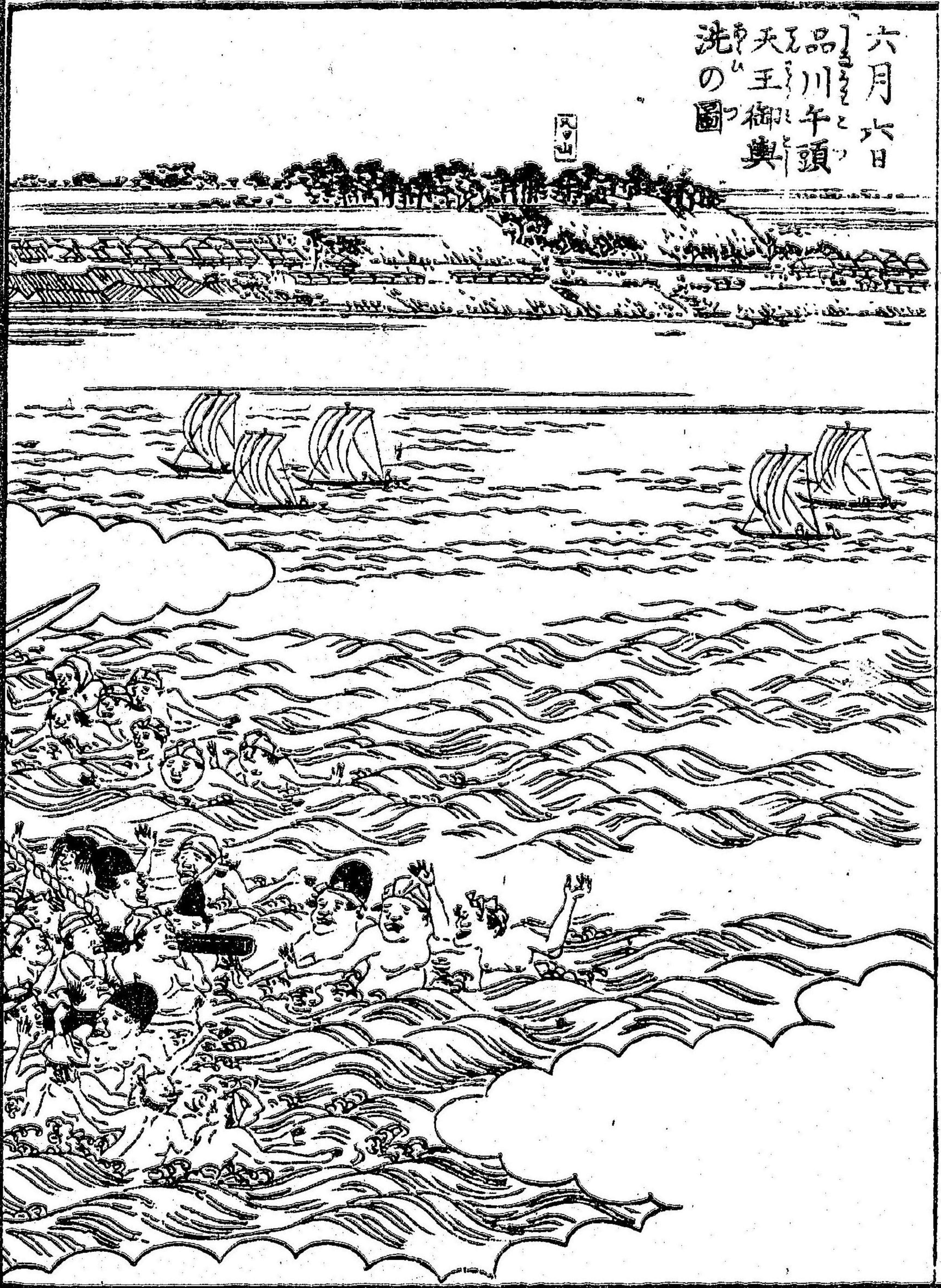
文の林泉を小堀遠州侯の差図中々庭作の規範とん都て

滿地青松丹楓枝葉と交へ晚秋の奇觀錦繡と晒りや常に

寂々寥々として 實ハ禪心とをなすの 一巨藍とく

六月六日  
品川午頭  
天王御興  
洗の圖

天  
山



牛頭天王社 東海寺柵門の外左の山に上りあり相殿は神明

宮を勧請せ北品川の産土神なり東海寺の鎮守とせ

官造の宮社なり社領等あり神主は小泉氏也

中太田道真品川の城は勸清も所なり洲崎明神或は品川明神ともいふなり  
祭礼ハ例歳六月七日は修行を南品川の産土神ハ貴地なり當社ハ由緒わかれ  
少々祭礼の日ハ両社の神輿南北の驛中橋の上ゆく行進又左右へ立ち立りて  
此橋を終合の橋と号く同十九日ま品川驛中往還の中央は旅所の假家と  
儲けく神輿と

坂指荷 同社の右の方には興あり小坂を降る坂此名ありを靈験ありとて詣入常は徳を崇信す

枅本神詠之碑 同所本社の前石階の上左の崖は臨むとあり石面は明石の  
浦の神詠と彫舟なり神祇部兼雄辨の真筆なり

御殿山 同所北の山積なり慶長元和の間此地は省耕の沙殿

あり一処ハ沙殿山の跡あり土人相傳へく此地を太田道真居住の  
旧趾なりとのみ此所ハ海に臨むる丘山ふして數十歩の芝生しり

珠更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植ふせあり春時爛漫  
ありとて尤莊觀より弥生は花盛ゆを雲とより人雪と乱まて

花香ハ遠く浦風ハ吹送るそ磯菜摘海人の袂と襲ふ樽の

前ハ酔を進むる春風ハ枝を鳴さる鶯の轉るも大平と奏

とる小似たり 寛永十七年九月十六日大樹此地ハ沙遊撰ありせられ  
少殿ゆく澤庵和尚ハ和歌一首と詠とて旨命せしと

夕ぐれと情とよむ木の月ありそやさしの霞は月 澤庵

月のおぼろの沙杯はうつろふまね一首と 上意あり前の日雨の降る  
も其日ハ止く空晴るるありしやハ

澤庵の頃撫を多く植ふむ晩秋の紅葉も又一奇觀なり

鑄鐘松 増上寺の鯨鐘を鑄る地あり其地の  
印は植ふる松なり北の方島の中ハ存せり

問答河岸 又御船雁木もいへる新宿の東の海岸なる相傳ふ

寛永の頃 大樹東海寺へ至らせあり頃沙塚も此時

澤庵和尚沙後を見送るなり此所迫来り 沙問答あり

しつかりと故ハ此唱ありしなり

花  
山  
者





磯の清水

磯の清水 伊殿山の麓清水横町と云ふあり 往古ハ此辺もこの

磯辺なりしと云ふは此井清泉や〜早魁も個々なり

と云ふは 誠人云く 背砂利を堀

品川驛 江府の喉口中〜東海道五十三驛の昔なり 日本橋

より二里南北と分つ 東海寺の南は傍々貴船の社の側を流る川を堺

旅舎教百戸軒端と連ね常々賑々〜往來の旅客絡繹と

〜絶也

梅花無盡藏曰 品川 注云隔五十町有江戸城多

法華宗云云 蓮紅二十五層兼一層 問宗旨答法華僧

同書曰 長亨丁未小春 子細者來滿口水

之途 城壁也 瀆而見六七小舟 及舟楫嘆无惜作是詩

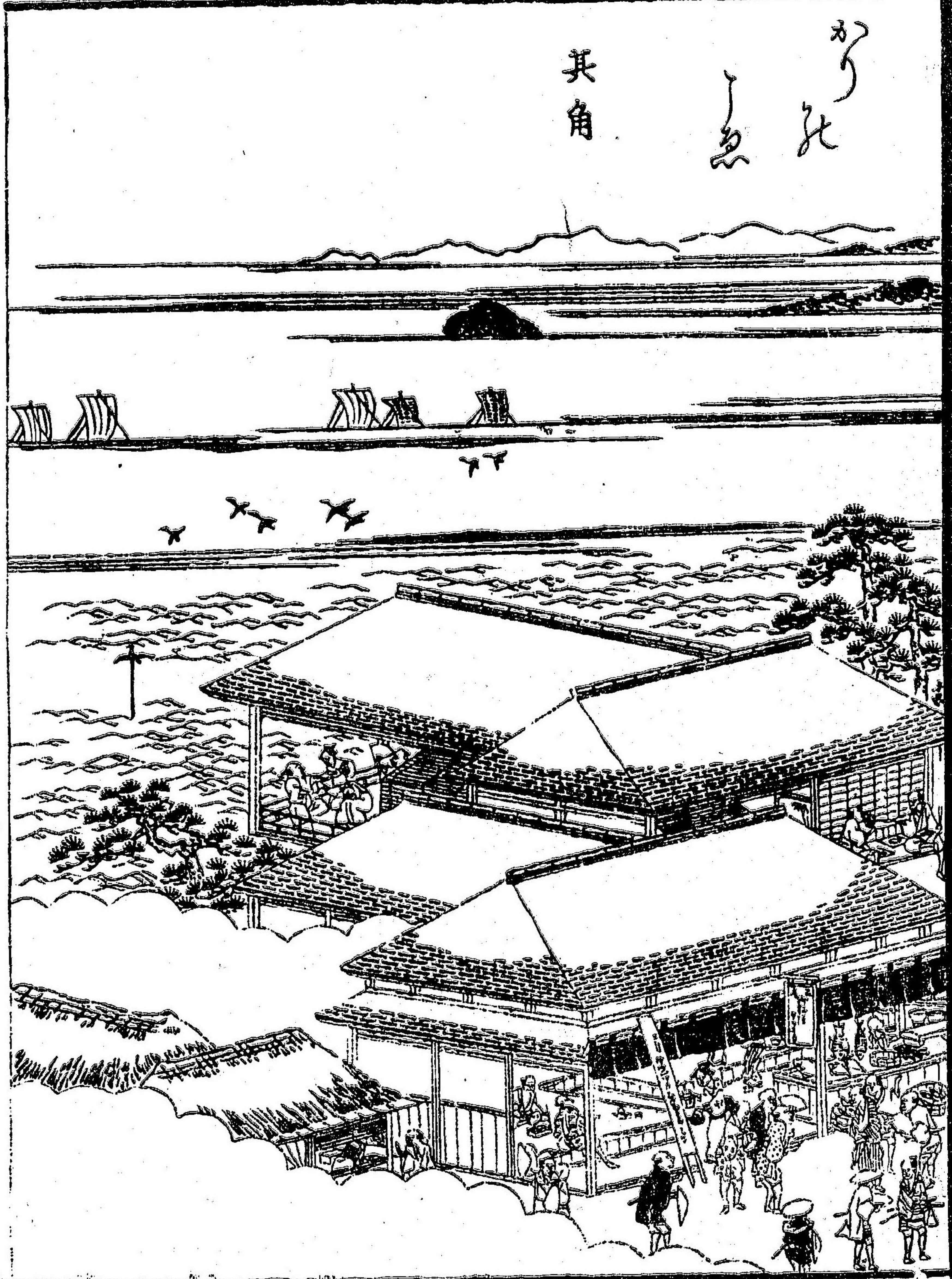
潮氣吞瀆萬頃連 殃及舟楫無地不紛然

重城日く勤塗壁 馬触蚤無地不紛然

心敬僧都記 品川と云ふは伊殿山の麓にありしと云ふは此井清泉や〜早魁も個々なり

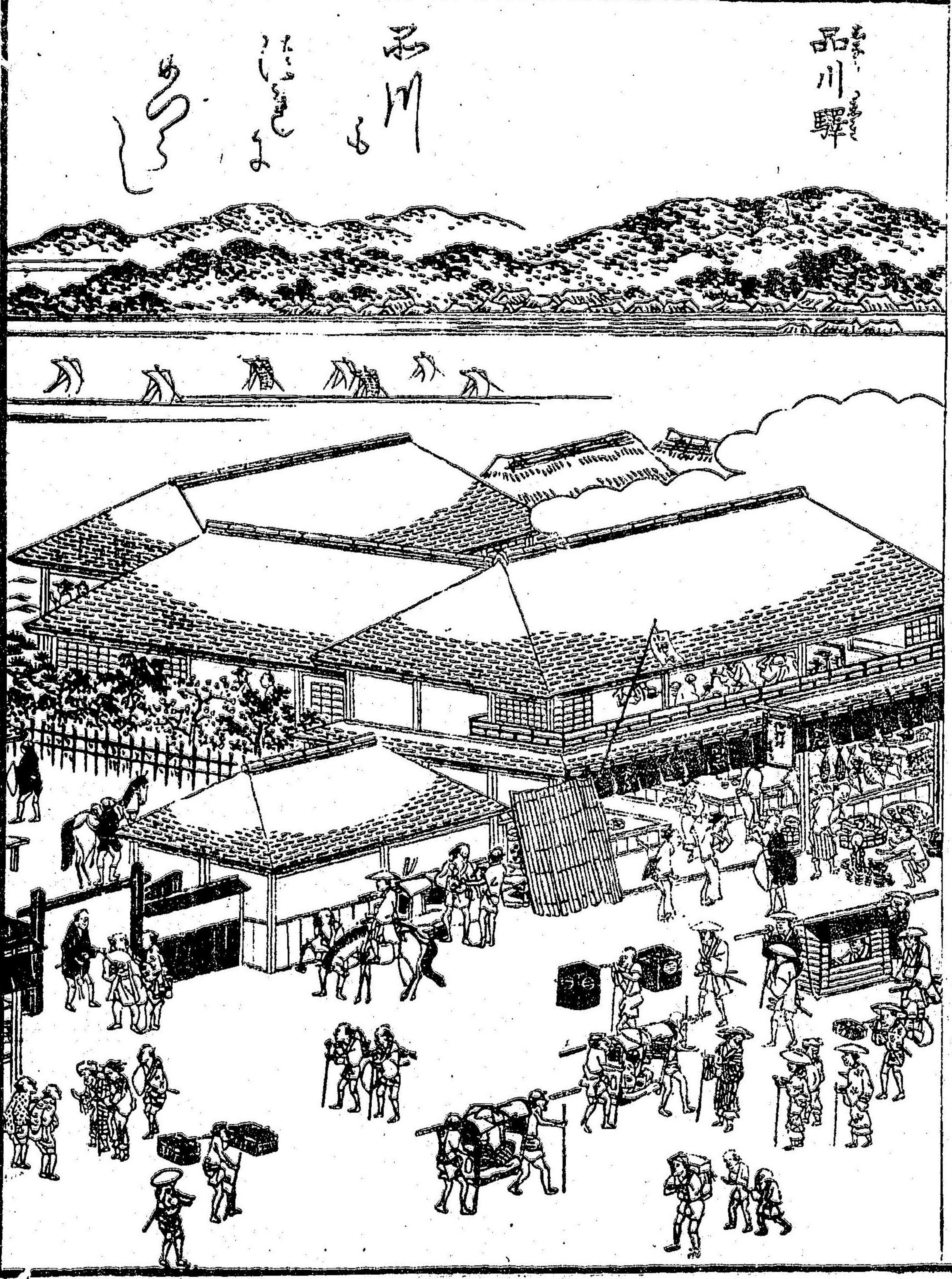


其角  
急  
北



西川  
子  
急

品川驛

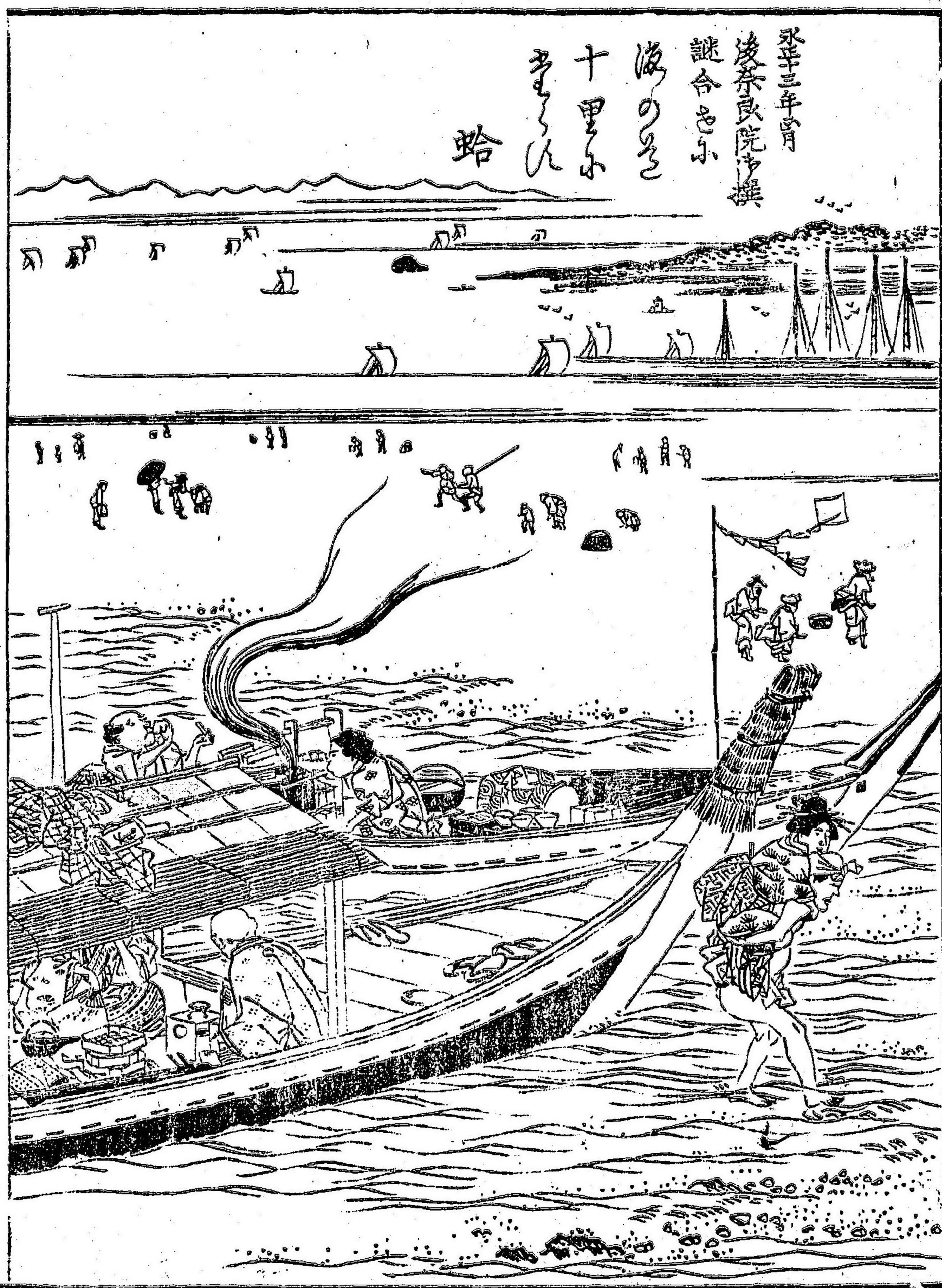




品川  
汐干



永享三年  
後奈良院御  
誕合さふ  
海のそと  
十里ふ  
まじり  
蛤

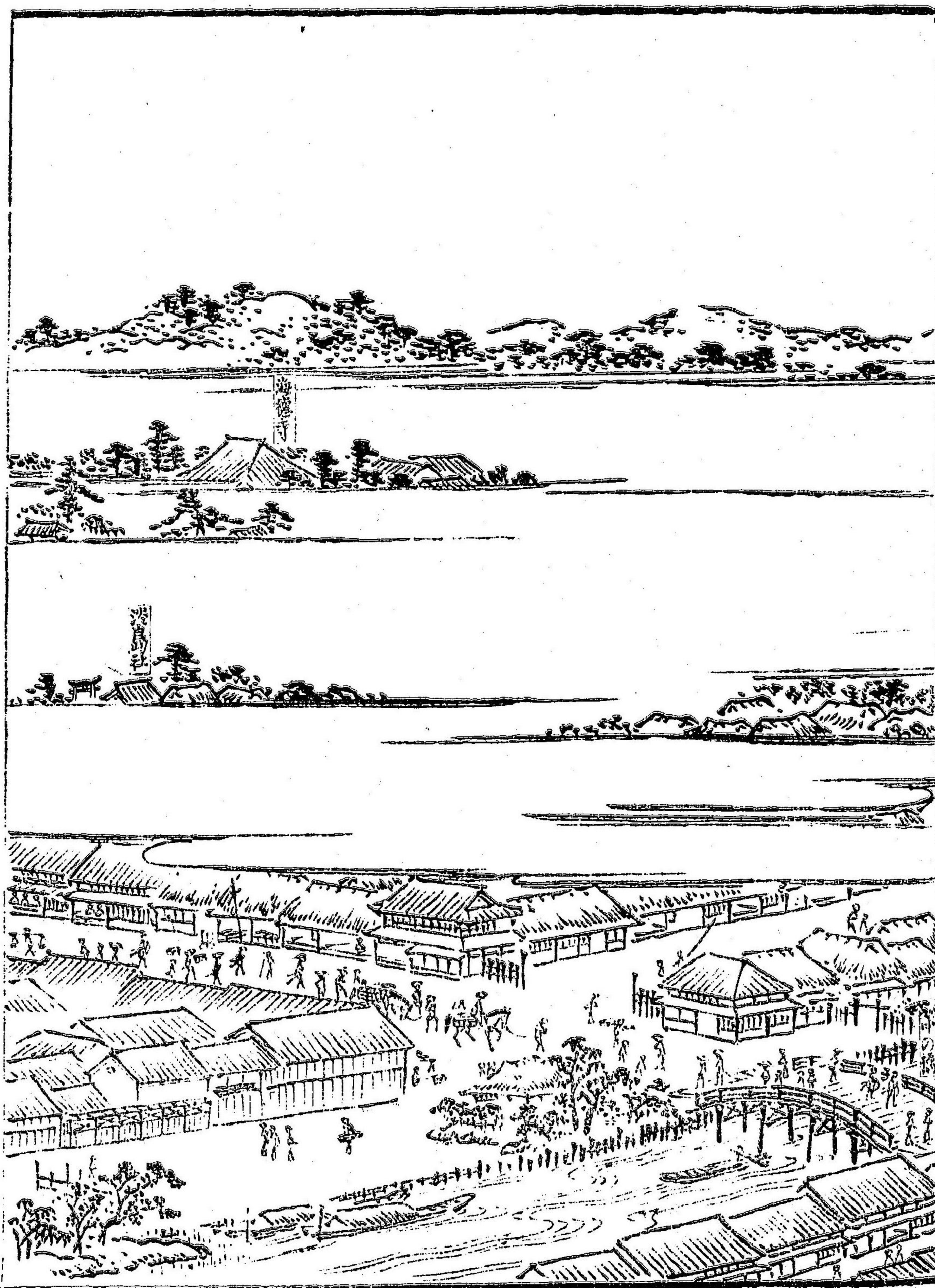


洲崎舟天

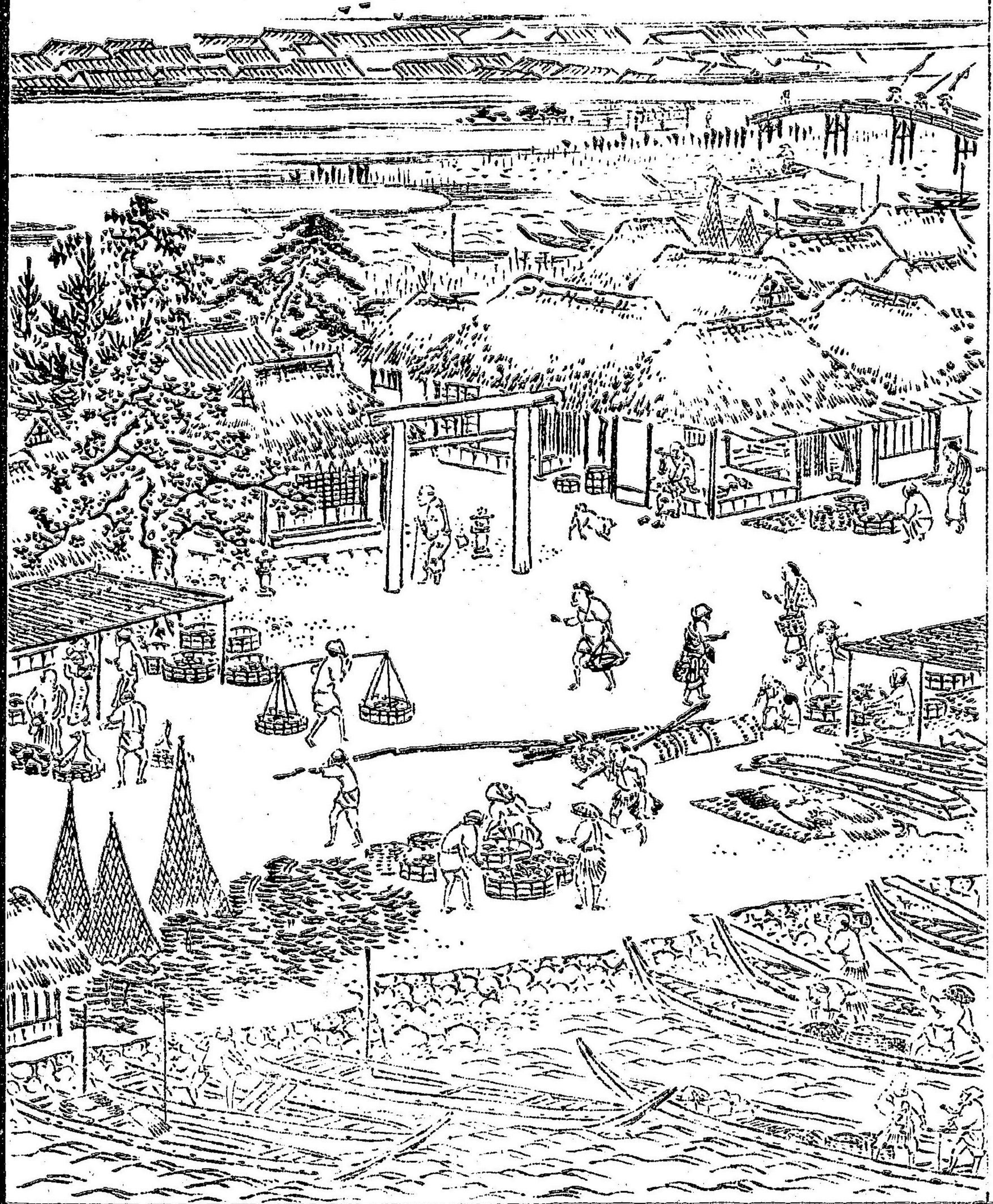


東流もこの則品川を毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭  
 天王此神輿此橋上より移運する依り又里俗移運の橋も唱へり  
 貴船明神社 驛舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右  
 ある相殿は神明と牛頭天王を合祭を南品川の産土神なるを  
 毎歳六月七日ハ天王の祭礼やて其前日神輿を海中より昇入り  
 後驛中へ假屋を假げかきし神幸なりしを貴布祢の祭  
 例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり神主鈴木氏奉祀也  
 寄木明神社 南品川の洲崎はあり相傳ふ神代の昔弟橘媛  
 日本武尊と共に王船に乗し此海上を渡りし頃覆つたりし  
 その船材所々の浦に漂着し此地に流しより一ハ土人  
 一社を奉じし弟橘媛の靈を祭りし寄木明神と号むる也  
 作違の後船魂西宮大神を合殿とて往古源義家朝臣奥州  
 征伐の爲東國發向の時此地に馬を止め漁人ハ當社の来由を

貴船明神社

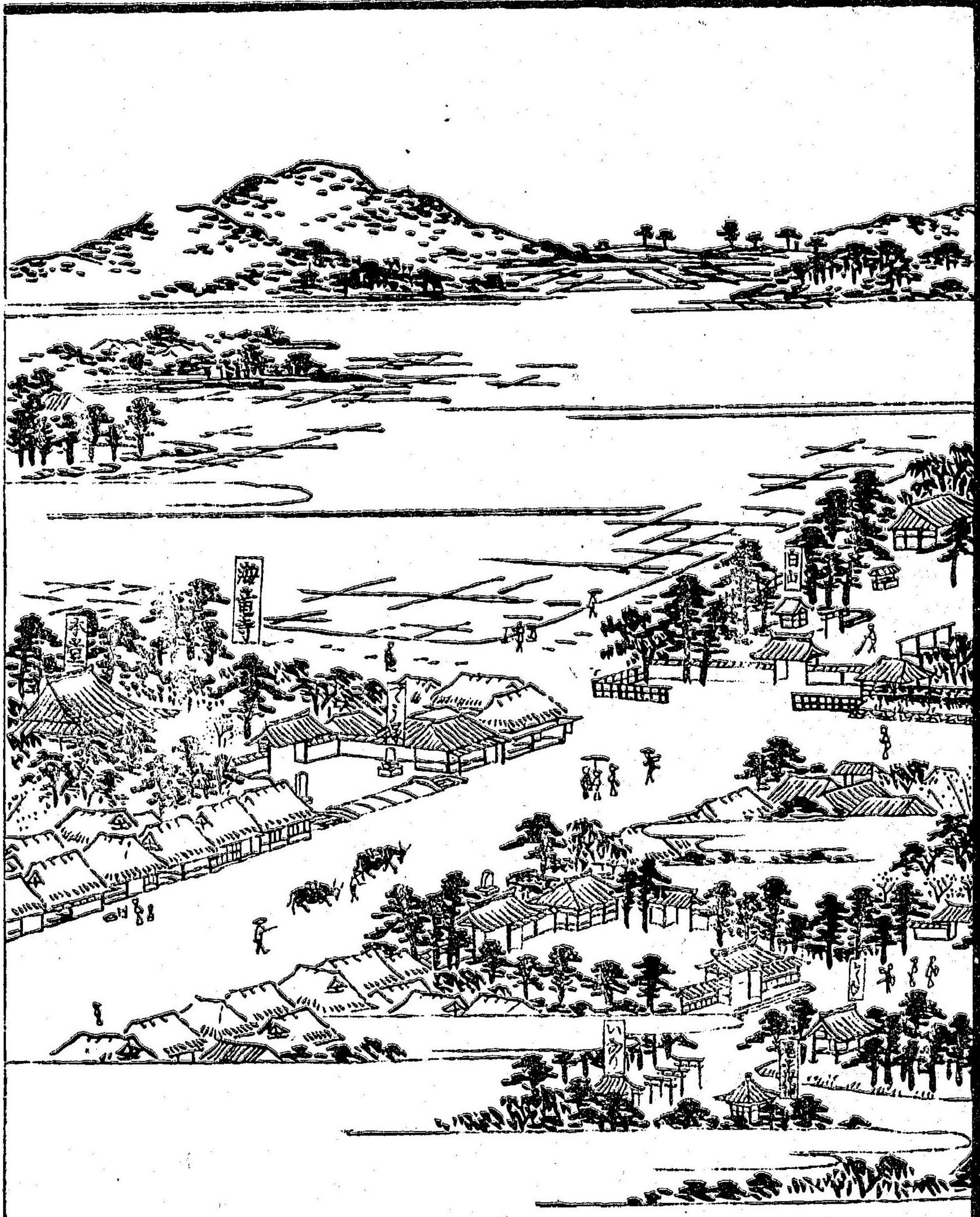


寄木明神社



向ひせも漁人先の神傳を答へまうハ義家朝臣自親奉  
 幣あましく軍の務判あまん事を祈まうハ奥羽の逆乱平治の  
 後歸路の日再び當社よ詣てられ荒れを収め入故よ此地を兜  
 島と号するを  
 社古ハ今の伊殿山の麓あり南北宿の辺ハ一面洲あり  
 川の流ゆる今この洲の北に又捕獲の成衣の流ゆる一社と上社  
 一説を山の林より細く海中へ入る洲崎の形細く似たる也  
 一社ハ洲の崎あり今洲の崎と号す後至るハ洲の明神と唱へ又  
 諏方明神といふ此社ハ今も妙國寺の鎮守とす當社の外に寄木の社と  
 附する此洲崎の地ハ往古より往還の船を改所やく遠見の番所と居置北赤  
 又山内上杉家の家の制札教箇の條目と注せり今も此地何某の家と傳へり  
 經 王山本光寺 南番場あり日蓮の宗流ゆく京師妙満寺派の  
 觸頭江戸三箇寺の一室より永徳二年壬戌二位権僧都日什上人  
 草創の佛刹ゆく則上人を以て開山祖と稱し中興ハ日鏡上人あり  
 本も釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならず又境内鬼子  
 母神の像ハ日蓮大士の作なりといふ

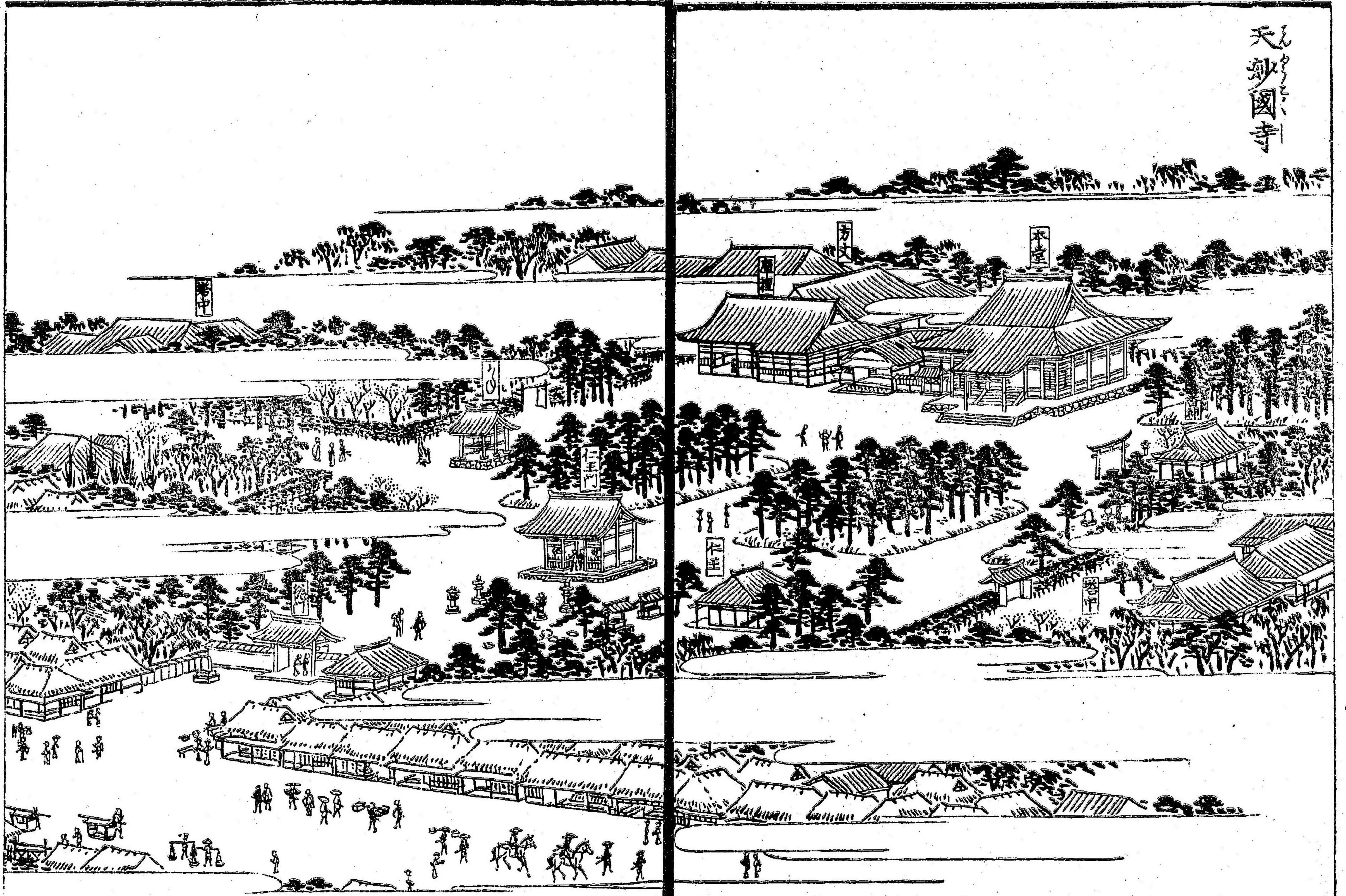
本光寺  
大龍寺  
天龍寺  
源龍寺







天妙國寺



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄  
一口鐘祈三身之果善根廣無功德遍有幾  
大日本國武州荏原郡品川郷妙國寺住持法印日  
文安三年丙寅季冬中旬第三天  
大檀那沙弥道胤  
鑄師和泉權守貞吉

寛永十八年辛巳八月下旬十三祖日延再興之

江 戶 長 谷 川 豊 前 守 藤 原 重 次  
施 主 當 寺 一 結 諸 檀 那  
住 治 工 長 谷 川 豊 前 守 藤 原 重 次

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人中老僧の草創あり佛  
場中至徳二年乙丑寺主日嚴師東國の乱を避んり為且  
弘法化導の志を達せんと寺院と廢し京よ赴くれ頃或夜乃  
夢よ浴中つくとみられと路傍柳の大樹ハ鳳凰の栖ると  
覺る後自思らく此瑞や正よ我道場と開くへき前兆あると  
直よ夜の夢と待と急き浴中を廻り西洞院三条の辺に至るに

果しく大樹の柳の茂るあり則夢兆應なりと其地を闢き  
一宇を營み鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士よ天目上人へ附屬  
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む其旧温ハ花浴而洞院  
名井の中柳の水と  
りハ則其旧端あり嘉慶元年丁卯天下疫疾流行を後小松帝  
詔あり師とて此災を除くむ依奇験の料とて康應元年南北四丁  
東西二丁此地を賜る然とて其寺院ハ徳の大乱ハ廢せし  
故よ寺を妙満寺と攝を彼大曼陀羅并ハ蓮師親筆の  
一部一卷の妙徑ハ妙満寺ハ寺に其後旧里を  
慕ひ又武州に至り天目上人の靈蹟を興起し舊貫よ復さん  
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鑄道胤品川領主鈴木光純  
等嚴師の誦演よ信伏し七堂建立の財をとり嚴師ハ力  
をあらせ文安年間彼旧地を象し則鳳凰山妙國寺と号け  
當寺を開創を此地文安永享の年号前後せり永享六年既ハ妙國寺ハ  
先立り九十有餘永享六年前の將軍義教公の執り上杉憲泰  
執不審とせ

先境の由緒を奉此地の四至を定めらる。其外数通の判形の書あり。其後天正十八年當國所打入の時大神君當寺に入らせり。亦止宿あり。其のち後寺領を賜ふ。朱章を添らる。江戶寺社領を附し。又寛永十一年伊奈半左衛門を奉り。諸堂を營建。かゝるのひ院主日延としく中興山たる旨命せられ。此時より紫衣を免る。以て永規とす。

上杉憲泰

宛乃武州荏原郡南品川之端芝原地とす。

右依佛地。不堂永代八郎三郎。所補任也。仍四至境東南八大道堺。西八田堺。北荒居道。陽堀堺。以之竹木可調植者也。仍宛状如件。

永亨六年甲丑五月十三日

憲泰 判

妙國寺別當沙坊

同 寄進武州荏原郡南品川妙國寺地とす。

右彼地。此間七字不分明。南着四波堀堺。西着大々道堺。北着塔中堺。彼内畠同勢。阿弥作畠一段。并四部。寄進地。寺家之内在之。此外常金可作畠一段。同東着海堺。南着觀音堂垣堺。西着大々道堺。北着大堀堺。為金澤智光院。由沙菩提。并為南小路。雲光沙菩提。永代彼寺。令寄進處之。然間至子孫。於此寄進。不可有異。後仍寄附。状如件。

永亨十年戊午七月十八日

憲泰 判

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺。この内附損布。状如件。

享德二年五月八日

從四位下 判

當寺別當

制札妙國寺

右該寺。為寺軍勢甲乙人等。監妨狼藉之事。俾止。若至于違犯軍者。處罪科。状如件。

大永四年正月十二日

氏綱 判

品川寺



其餘武藏氏昭等の證狀あり前上総守定景中務少輔持助南善左衛門尉  
海照山品川寺 同所南小隣る普門院と号す真言宗中々々京師

三寶院は屬を岡山ハ推大僧都弘法印と号せし

本堂 本尊聖觀世音菩薩 海中より出現あり一圓淨檀金の靈像

世は水月觀音と稱へし此靈像の利益感応の多きを以てかくり

藥師堂 佛の像と安置せし法大師作なり紫銅地藏尊 門を入る左の方

建立せし所中々々江戸大地の一角あり

本尊縁起云く往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川

氏何某は附屬せしと同左京亮迄其家よ傳へし信

せし左京亮の名ハ孫倉 逆の後應永に至る鎌倉の公方足利左兵衛

推督持氏と上杉禪秀合戦及び一頃品川の一族悉く討死す

其時ハ深く草堂の内ハ秘り置しと後太田左金吾道灌

品川の地を領せし頃深く此本尊を崇信し一字を建立し

大圓寺と号し夫より後又孫倉管領上杉の両家不和ゆ

關東大亂る依る諸の寺社破滅せしゆ必かゞ永祿九年

小田原の北条氏政今川家ハ加勢あり信玄と戦ふ時信玄武

藏の北の方より不意に押寄せ江戸場より品川を追捕し民

家を焼拂ふ此時甲州方の中より竹森蔭村とよる二人の侍品

川觀音の御堂を焼く本尊を棄て甲州へ歸る其者大

狂亂し本尊元の地へ逃る旨威靈の示ありと武藏ハ

敵地なりハ其便を好む一人の乞食の聖を頼り元の地へ還

座なりとて御堂も焼亡しうられハ其礎石の跡を

地を求め形をかりの草堂を營と造り安置なり

遙く年月隔り後兼應元年壬辰法印弘孝堂宇を建立

しとて海照山品川寺普門院と号し今來日降普門示現の

千躰荒神堂



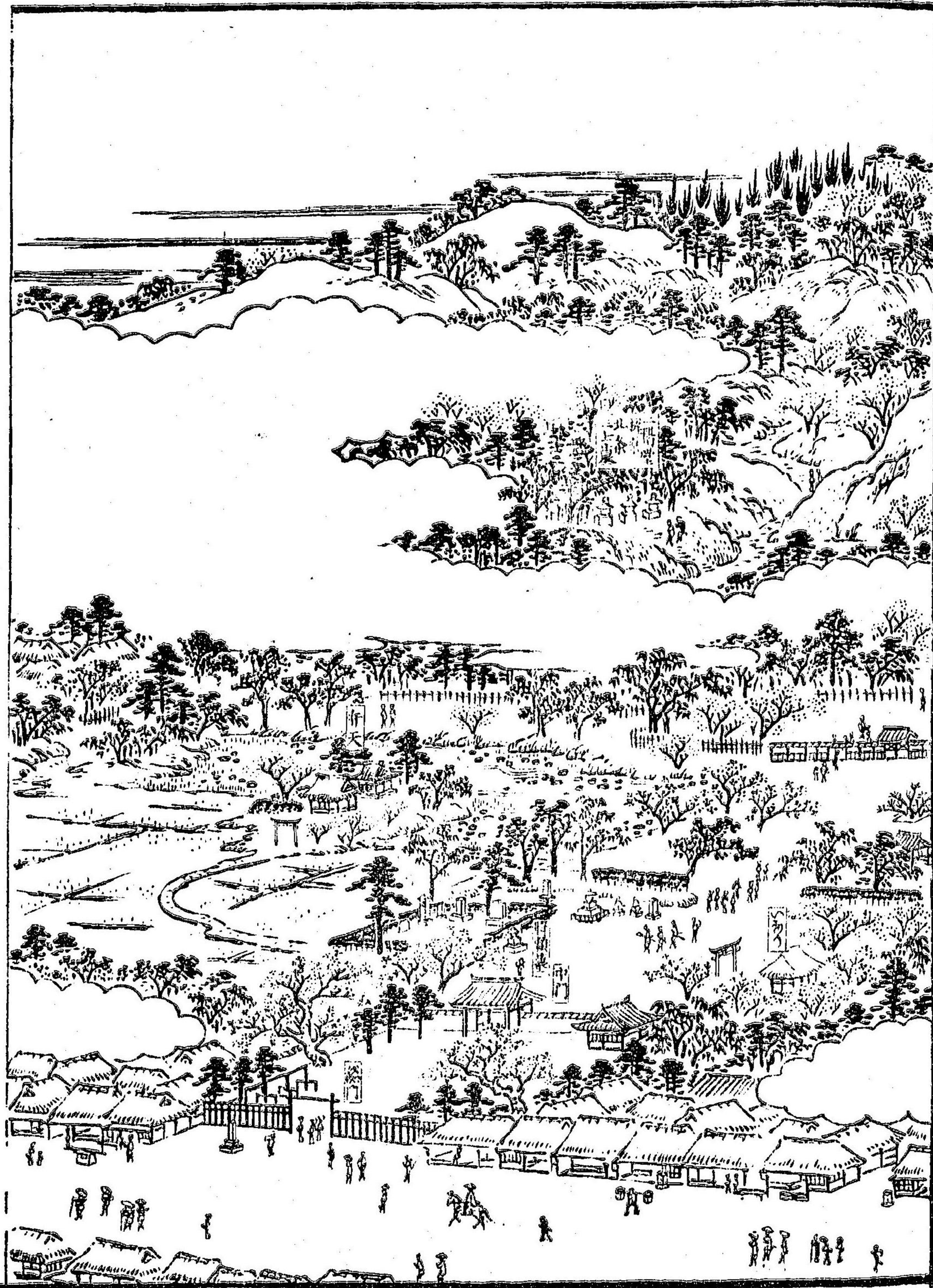
威力著く恵日の光煩悩の闇霧と破る感應の水月ハ長夜を照す

千體荒神堂 同所半町を隔て南同海道の右の方海雲寺也

昔九州肥後國天草荒神の原といふありしを邪宗門一擲の頃邪徒等社と被却を故ありし當寺は勸請せしりて靈驗ありしとく衆人常々奉詣す毎月廿八日を以て縁日とて祭礼ハ

三月十一月共廿八日なり

補陀山海晏寺 同所一町を隔て南海道の右にあり曹洞派の禪宗の三田の功運寺は屬を北條相模守平時頼朝臣の開基とて大覺禪師を開山と稱し古山和尚を第二世とて天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺と再興し中興也



海晏寺

海晏寺  
紅葉見之圖



題海晏寺紅樹  
古刹楓林簇晚霞  
深深庭院駐年華  
那知秋後風霜色  
却勝江南二月花  
春臺





なる 慶長 松平因幡守 藤元の子なり 天正 入國の頃 三州より  
 召し 當寺を賜ふ 曰く 臨濟宗なり 此の時より 今の如く 同家  
 改らる

本堂本尊 鮫頭觀世音

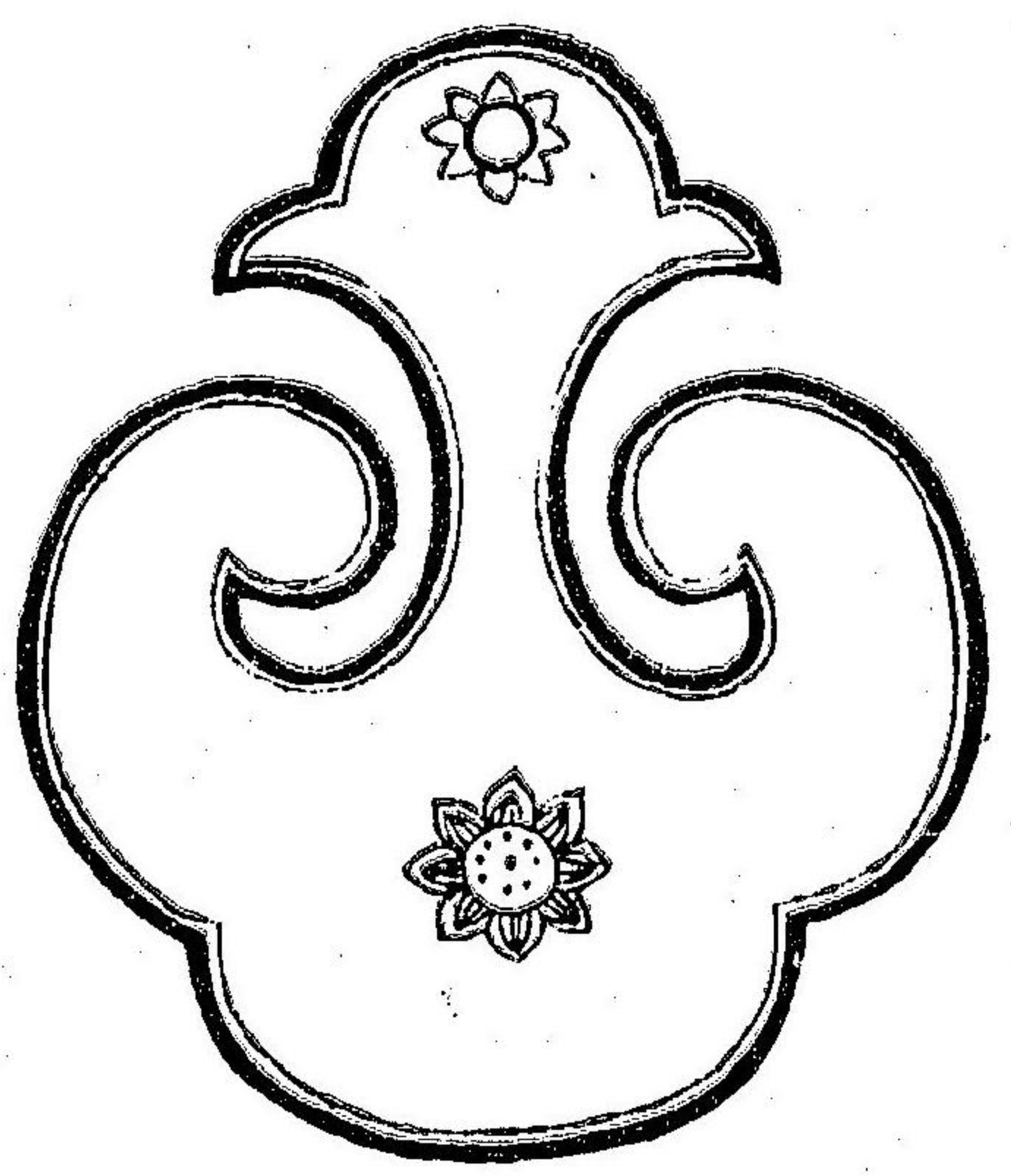
鐘樓 本堂の前左の方より 元禄十五年 當寺田録の災より 罹り 舊鐘  
 燈掛も 依り 宝永七年 改修 柱古の 毀れ 其後より 刻せり

南膳部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷  
 補陀山海晏禪寺 安十方施主 屢捨祥財 聚銅金專  
 命良工 鑄成佛器 高掛層樓 美哉堂々 大眾落々 洪  
 音斯迺 見色明心 聞声悟道 之因是故 鳴鐘相念 傳  
 願此鐘 声超法界 鐵圍幽暗 悉皆開闢 塵清淨證 圓  
 通一切 眾生成正 覺是以 虎溪老拙 厥銘曰  
 鳴氏 妙躋 四海九 振 常陽掛起 法音千鈞  
 色透 碧落 響徹 剎塵 善破 睡夢 忽性 眞  
 弘濟 群類 普結 良臣 法輪 常轉 佛日 尚新  
 寶德 三辛 未仲 夏下 濟 法輸 常轉 佛日 尚新  
 且越 道琳 現住 存紹 代 鑄師 定吉

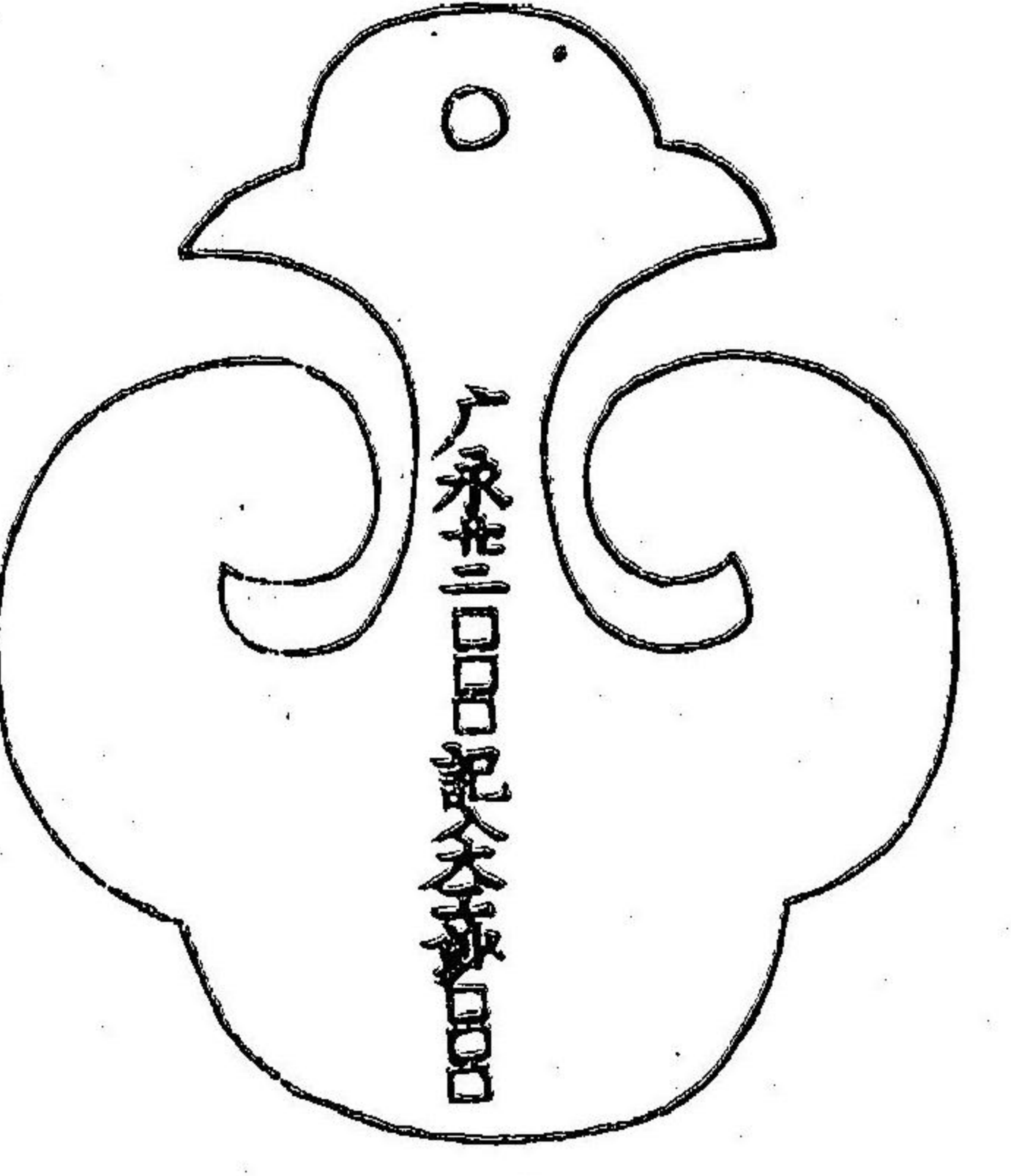
寶永七中夏上旬

雲版一口

高四寸五分  
 横八寸五分  
 蓮花六弁  
 二寸四分



背



北條相模守時頼朝臣石塔

本堂の前右の方より 碑面 最明寺 殿  
 寛政 房道崇 碑陰 弘長 三癸亥十一月

廿二日 正五位下 行相模守 平元帥 時頼 賜付てあり  
 按 東鑑 弘長三年十一月二十二日 松岡過去帳 成刺入道 正五位下 行相模守  
 平朝臣 時頼 三十七歳 明寺の北 塚 中 卒 去 あり 今 鎌倉 山内 あり 所 北  
 禪興寺 といふ 寺院 八 街 古 最明寺の 旧地 なる 由 鎌倉 志 あり 當寺に  
 ある 所の 石塔 八 其 模 一 なる 石 碑の 形 凌 世の ものと 同 一

二階堂出羽守石塔

本堂の後の山腹 あり 往古より 當寺の 門前 八 鎌倉  
 海道 中 あり 關門 あり 地 あり 依り 頼朝 卿より

北条家 返ハ 執權の中より 關門の 守護 といふ 大森の 辺に 屋形を 建てる 官人 とい  
 置れ といふ 故に 此出羽守 其 境 品川の 守護 といふ 此地 あり 一 なる 故  
 當寺に 香花 あり 按 二階堂出羽守 三人 といふ 一 八 方 門 尉 正五位下 出羽守 行義 入道 道盛

行藤 文永五年閏四月二十五日歳六十六中辛巳二月八日同後五位上出家  
七三八同後五位下出家守入道道蓮吉野戒波の大師より以上三階堂出羽守  
三人あり何れも是なりと云ふ然るも惣門の額に海晏寺と書せしむ  
寺僧相傳へく二階堂出羽守行氏の筆なりといはれ行氏八後五位下隱岐  
守に傳へし弘長三年十二月出家し法名道智と号れ文永八年六月七日五十  
一歳に卒す

梶原平三景時石塔 同所並入景時謀叛を討て治二年庚申四月廿日  
甲子人等と一戦し竟に景時討死せり

北条左京權大夫平時宗石塔 同所並入建隆元年より時宗  
宝光寺殿道果大禪定門と号す 持軍執權次弟弘安七年甲申五位下相模守平時宗  
三月廿台所勞四月四日出家法名道果同日酉時死す

楓樹江戸丹楓の名勝ゆく一奇觀とて晩秋の頃ハ満庭錦  
浦と晒をめぐり海越の山ハ紅の葉分ハ見えそと蒼海夕日小  
映しゆく又紅を耀りゆく書院僧房も其色よかりや此地遊賞  
の人酔色なるといふハな

千貫牡丹 佛殿の前はあや四八間ハ榮えり 千貫松 頼朝松とも又ハ龍  
又ハ龍影向の牡丹とも号する

龍淵 庭前の池をいふ 兩溪橋 御手洗池は架と橋下の池をいふ  
龍身は寛政二世古山和尚教化しと蓬萊山 方丈の庭の山を云北の方ハ昔を  
藪野と解脱せしむと云ふ 推原屋敷 推原塚の石地藏の作法  
推現御手洗池 延命水  
明神森 山王社 八幡宮

**海晏寺**

總門額  
二階堂出羽守  
行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地ハ海  
中より數一口漁夫の網よかりて揚れし腹中より正觀音の  
靈像を得し此より鎌倉へ運えりハ時頼朝臣希代は  
みよと是祥瑞なりとて寺邊に佛閣を闡くと觀音の  
淨土なれはとて補陀山と号し四海安平の義よりて海晏  
寺とせしむ瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり同  
六年の春諸堂落成し翌年七年入佛供養を修行し

地を鯨濱といひ又鯨頭嶺といひ海の方百八十間余又時頼朝臣南北十二町東西十町の地を寄捨ありて五箇の僧坊百八十貫文を附せりる八十宇の房舎ハ巍然とて覺をなせり又天竺の靈鷲山ハ準へ南紀の高野山ハ擬しむひハ有信の輩ハ月牌を置石塔を建弘安五年ハ北条時宗願主とて堂塔重修せし月牌料とて二十貫文寄附ありと云殊更重罪の輩たりとも當寺ハ入者ハ其罪を免許せしめ則を定め山庫僧供ハ四方十里の間頭陀の免許ありとかな柱古當寺開創の頃松樹各二千株を植洲崎ハ八幡三社を當て建其松の枝葉ハ路を覆ひて繁茂せし其頃彌童の唄ハ品川浦ハ名所なり海曼寺前のまうらひ松樹代もさうさうとありと云と云

鯨頭明神祠 砂水の海濱ありて祭神詳なく土俗傳へ云往昔此地一丈餘の鯨の揚るありし其頃此地大ハ疫疾流行せり

此地ハ此鯨の祟なると恐怖して漁人其頭を一社の神と祀りて附會按此祭神と鯨の頭と云ふは恐らくハ海曼寺の縁起ハ混りて附會せしむるなり或人云く砂水昔ハ鯨洲を作りたりと云ハ鯨洲の明神と作て佳なるんを或冊子云く此所ハ佐美津川と云ふ流の瀬と交らるる佐美津

上古海道 品川より池上へ行道大井より北の方東海寺南門に向の心往古の品川の驛路なり

矢口と云ふきし船を今ハ八景と云ふ西南池上へ行道ハ背の一里塚の横一株式大井驛傳馬のり證とせり

諸國驛傳馬 中略 武藏國驛馬 店屋 小高

海賞山來福寺 砂水御林町ありて真言宗中々本寺ハ地蔵

菩薩を安置を弘法大師の作師丈九寸ハなり梶原氏の草創也

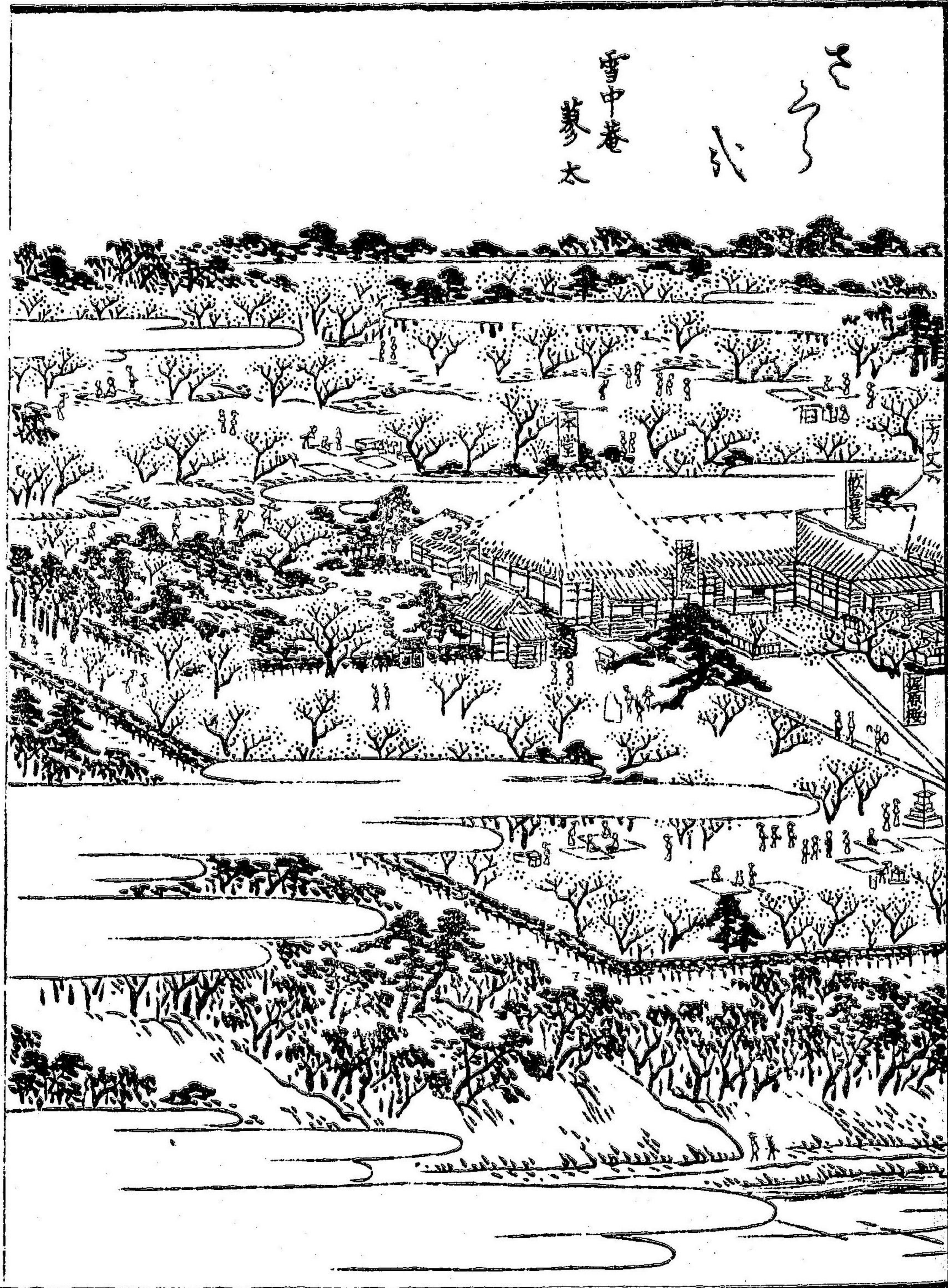
則此地ハ其宅地なりと云ふ縁起云此本寺ハ梶原氏代々其家の相傳へて尤靈威なり然る元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ

此中寺ハ折念とて不日ハ本快を得り其後世の中大ハ乱るハ本尊の所在をれりしハ文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町西の方怪塚といふ地やこれと感得せと云なり

怪塚の由来ハ

雪中巻  
夢太

そ  
の  
こ

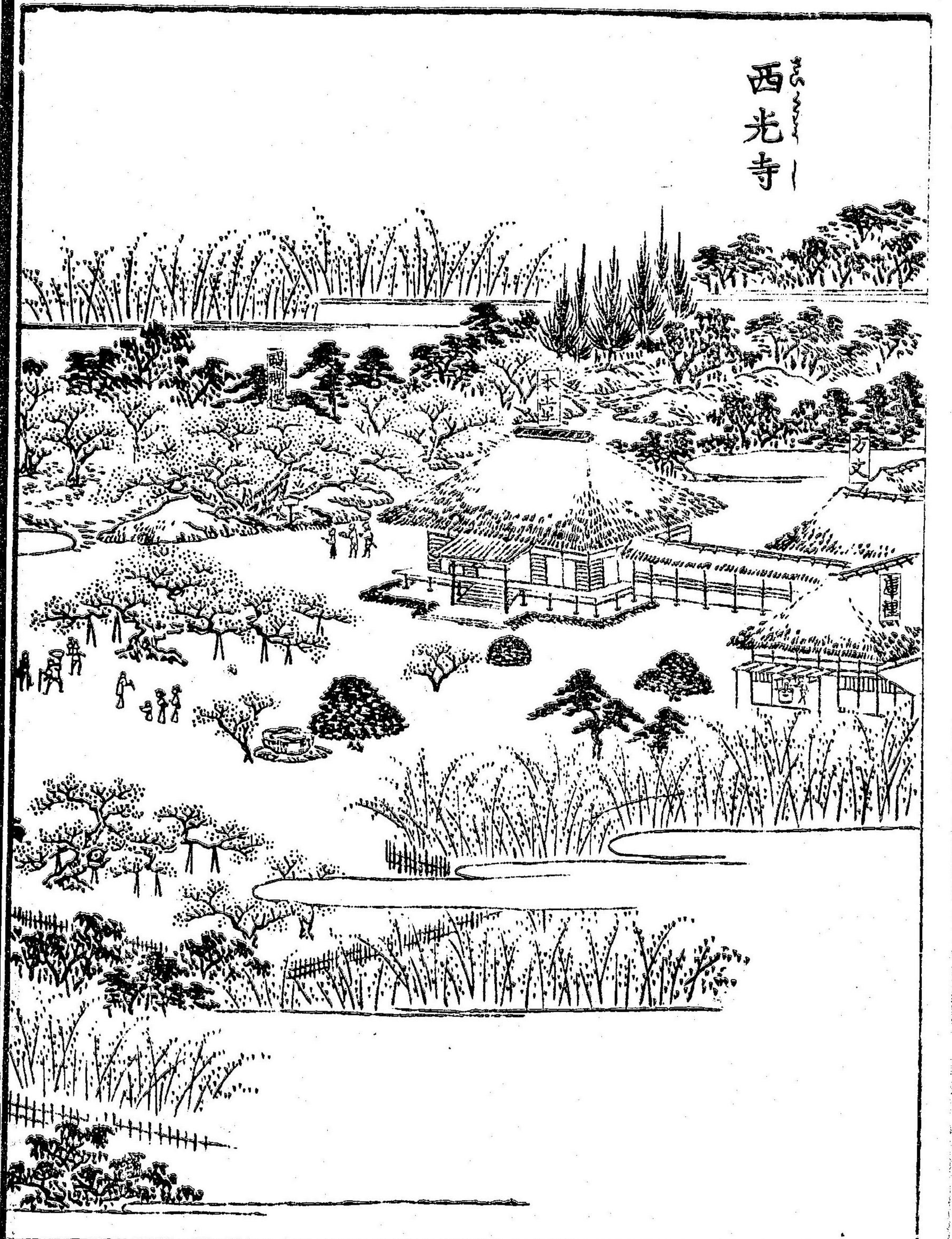
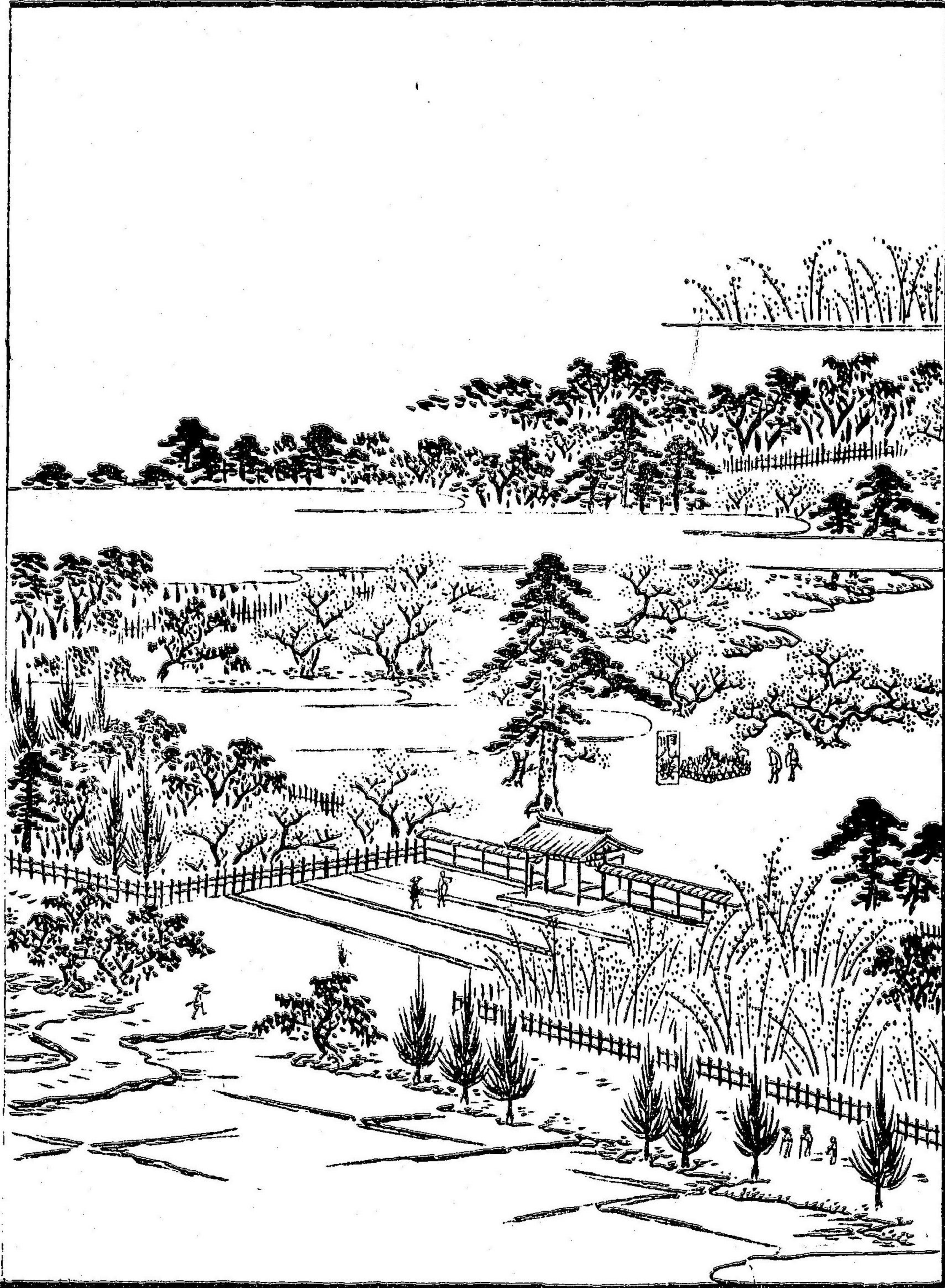


来福寺

世の  
中  
の  
こ  
ろ



西光寺



當寺開基梶原氏と新するもの小田原北条家の幕下たり梶原  
 日向守なる一永祿二年の頃六郷内新井宿の地を領せし北条家所領  
 役帳より見ると是より考ふ此所日向守の采邑の地なり又其宅  
 此所ありと思はれると土民お侍つく其宅の跡ハ來福寺ありハ秘水  
 松平土佐侯の別荘の地なりともなり

延命櫻 本堂の左の方 梶原松 同所よりあり 梶原氏 梶原塚 寺の後  
 梶原塚上は杉を植へり此辺農氏の構の中にも梶原塚と号するものあり是  
 其氏族の墓所なり其餘一旅の石塔當寺よりあり  
 當寺境内櫻樹數株ありて悉く品を領てり弥生の花盛  
 ぬハ遠近蕙を慕ひてあふ遊賞する人少くす

納経塚 來福寺より六町を西よりあり相傳ふ往古右大将  
 頼朝卿佛經を書寫なる一ひ此地より収らんとり來福寺本  
 尊地藏菩薩此所より出現一ひ一頃土中にて夜あり  
 讀經一ひ一とを 故に來福寺にせし  
 松榮山西光寺 同所二町を南よりあり弘安九年の開創なり

とりを往古八天台宗にて榮順律師開山たりとあり其後

弘福寺



親鸞上人弘法の道場と當寺十五世を空善と号し若賀入道  
 禪可より十四世若賀伯耆守後五位上清原真人元則の長子小  
 一と俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯王丸と号へ今當寺を西  
 光寺と号る此西光の名を摘る号けたる寺寶に  
 武田信玄の陣羽織と稱するものと収む庭前醍醐櫻と名  
 する老樹あり花ハ單瓣中より立春より七十日目の頃より開  
 ちむ其餘却への櫻の老樹数株あり満花の節ハ奇觀  
 あり此地第一花の名所なり

大井山弘福寺 西光寺より一丁をかり西南より當寺ハ鸞師の  
 弘法中より中阿彌陀如来の像ハ聖德太子の作なり  
 此地ハ麻布山善福寺の中奥了海上人誕生の旧跡あり  
 弟三卷麻布善福寺の櫻の老樹あり春時奇觀なり  
 了海上人產生湯井 横へ入り深くはる岳の下に横穴あり  
 大井と

大井



鹿島大明神社 同所一丁... 西南あり社記云く當社の安和二年  
己巳九月十九日常陸國鹿島の神を遷一奉ると云く別當也  
山常林寺と号は天台宗中へ東叡山に属せり本尊ハ藥師如来  
慈覺大師作開基ハ尊榮法印なり貞和三年丁亥再興す了覺  
阿闍梨を中興と稱せり境内櫻多く春時一奇觀なり  
本地堂 智燈大師の作ありと云く  
古舞口 別當常林寺ハ松女敬白とある上の文字ハむらさきの舞  
表寄進武州荏原郡大井郡鹿島宮舞口  
寛正二年癸未十一月日掃松女敬白

鈴森八幡宮 同南の方繩を隔て十町あり不入斗村あり  
祭神中殿應神天皇 左殿仲哀天皇 總社盤井  
神社とも稱せり別當ハ真言宗中へハ幡山密嚴院と号は  
神主ハ森田氏なり

按は當社ハ延喜式ハ當國風土記殘編等ハ載る所稱盤井神社是也  
後世に至り祭る所の神も定ありさしハ盤井ニ因り石清水正八幡宮を  
勸清せりかへり

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六東二字

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六東二字  
田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴命也社  
邊有磐井祈事土俗有妾願則祈病者取之服之  
味事正直則如清水近國奇之祈病者取之服之  
其功驗如神土俗曰藥水云云  
代實錄云冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使  
貞觀元年冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使  
於歲以有天神地祇去九月無風雨之災誠有感  
於官社云云

三

鈴石 當社ハあり相傳ハ他の石と云くを擊ハ其音ありと當社  
傳記ハ此靈石ハ此の石と云くを擊ハ其音ありと當社  
云昔の石ハ賊の爲ニ棄つたりと云

烏石 烏の形を頭ハせり石の形ハ南朝先皇の鎧あり烏石葛辰是也  
烏の形を頭ハせり石の形ハ南朝先皇の鎧あり烏石葛辰是也

古舞口 舊記ハ葛辰自ら烏石と号せり此石を愛せり  
舊記ハ葛辰自ら烏石と号せり此石を愛せり





匪田匪皇鳥石八幡宮不黃維鳥魯隸凱死而祠出  
緞城是視胤尾禽龍系鳥石山入

額 鳥石 阿野公繩卿筆 鳥居額 鳥石祠 吉田二位兼隆卿筆

聯 左の 新秋の珠は島雨 梅小路三位參議定福卿

搦す

傳降蒼海於森風

中の一節なり

石華表 六七十町東の方今ハ海面と成り中昔の頃迄ハ石の鳥居の柱の礎ハ

水取ノ頭レ成クあり一室永の大地震ハ折りて今ハ見え上吉ハ

社記曰往古神功皇后三韓征伐の時長門國豊浦の津より

伊船よもれんと其海邊中て合珠の神石を得も則石青く

雞卵の如し石中鈴の音ありと鑄きたを故も鈴石と稱を異賊征

伐の後香推の宮小藏多ひり欽明天皇御宇八幡大神始て筑

前宇佐宮は鎮座の日靈示ありふり此寶石と宇佐宮の遷

させ其後聖武天皇御宇文章博士沙史大夫正二位文部

神祇伯敷十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たり

時ハ幡大神再ハ靈告あり依之此靈石と年足の家ハ移

崇信ハ嫡孫中宮大夫從四位中納言豊人卿桓武天皇の

延曆年中武藏守ハ任せり當國ハ下向一荏原郡ハ在せ

頃終ハ此地と封一當社と徑營一神石と鎮座なり

當社是ハ故ハ宮地と鈴石森と云其後清和天皇御宇貞觀

年間ハ幡宮宇佐宮より山城國石清水ハ鎮座在り六

餘州國毎ハ總社ハ幡宮と擇定賜ハ依り武藏國ハ於

當社を以て總社とせり

笠島 鈴森の地とせりハ幡宮の境内左の方ハ笠島神社と

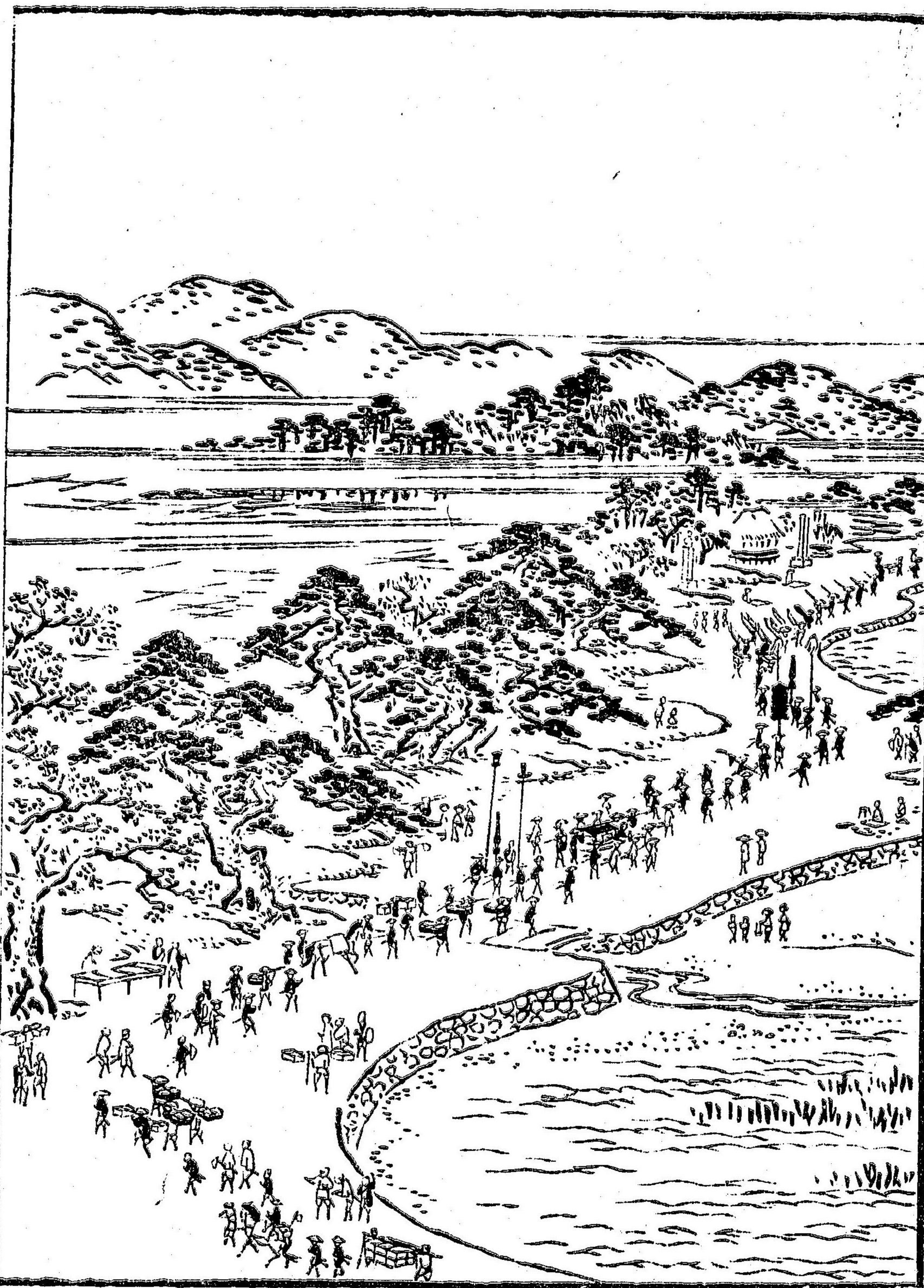
稱すものあれと定あり祭る神六前豊宇賀姫稗田彦

菊理姬天満宮淡島鹿島等なり與州笠島の神と等き秋

未これと考へ

草陰之荒蘭之埼乃笠島乎見乍可君之山道將越

鈴  
の  
森



秋の萩あゝの萩のまきとていふ月ひまのけしき 為家

磯馴松 鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前にあや

當社の神木と稱せ

荒蘭崎 同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも 藻汐草に

荒蘭磯とあり 北条家の所領役帳ハ梶原日向守六郷内新井宿を領

此地も古の 海道なり 北条家の所領役帳ハ梶原日向守六郷内新井宿を領

續後撰 白波のあゝの萩は後列松かきぬきのこそつれぬ 家長

天永

仲津浪あゝの萩は後列松かきぬきのこそつれぬ

今出川院 近衛

四國雜記

若しとてまゝあゝの萩は後列松かきぬきのこそつれぬ 岸の松尾

道與 惟石

千五百番

仲津浪あゝの萩は後列松かきぬきのこそつれぬ

仲津浪あゝの萩は後列松かきぬきのこそつれぬ 信實

鏡懸松 ハ景坂より往古ハ幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松ハ鏡を懸らせりと云傳ハ高と六七丈をいふと大と牛とがた

枝葉柳條のめく垂下とて地を離るる其間ハ四五尺ハ過せ

尤比類なき古松あり一ハ荒磯松磯馴松ともいひ或ハ震松とも

号く 枝葉共ハ動かし難し 此地より望めハ海上眼下よりありて美

景の地なり 土俗ハ景を誤りて やえん坂と唱へり

八幡山行慶寺 大崎より東海寺裏の方戸越村より文祿元年起

立淨土宗中へく岡山念譽上人戸越八幡兼帯なる願成院と号し

梶原氏什室

戸越八幡 戸越村鎮守なり天文年間鎮座ありとのみ御正躰を

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社

八景坂  
鏗掛松



境内のこいし小石とたが范瘡のまもり守とをいけん靈験ありとくどじん土人は是を拾ひ取ら  
うへ歸る九月廿八日相撲あり  
ぶん分限た太田しん新六郎しん所領の中  
ろく六郷内戸越ハたげん梶原けん就云

木原山 同後のうしろ丘山ととり木原氏の領地なり  
い一せん族と伊豫の河野の

木原氏の系圖をしん鑑かんを云く木原氏姓ハたけ穗積祖光をか鈴木掃部か介吉行とりの  
よ四代の後同苗平兵衛吉頼 御當家ト任へり遠州山名郡木原か五貫文の  
ち地を賜ふるしん吉子と七郎兵衛吉次と号は其米邑木原ト住ししし普請方を勤む  
し然し天正三年二月十八日し台命ありし在名とものし鈴木氏と改め木原と号しを  
し桐十八年し江戶し徳川し初人の時武州し荏原郡 此山頂ハ上古の相模街道しより  
し新井宿村しよりし四百四十石とたしましふと云

荒蘭宿としいし地なりとし古奇しありしぬのし崎しはしましちしをしえしつしや  
し君しうしりし越しらし策しトありしをし則し此所しのしりしなるし一し熊野社  
し又池の中島しト辨財天のし叢祠しなりとありし此宮を土民し小野し河野  
し所しと

醫福山桃雲寺 同所山際しありし徳門しハ東向し中し々し海しト相對す

眺望八景坂し下同し此寺し龍巖下しのし耕田し昔しハ海しトし此崖下し連浪しと打寄  
し當寺ハ曹洞派しのし禪林しなりし中古し此地しのし須主し木原氏しのし祖し木原十郎  
し左し木原吉次

戸越八幡  
 行慶寺



慶長十五年庚戌 極月十一日卒 桃雲淨見居士中興せしむ境内は墳墓あり

福田山蓮花寺 蓮沼村あり 此地ハ六郷ノ属ニ永禄二年ノ頃堆田真言

宗ノ古刹申す荏原郡ノ地頭荏原兵部有治ト云一人出家ト 蓮沼坊ト號し當寺ヲ創立モ本寺十一面觀世音菩薩ノ

像ハ行基大士ノ作ナリ往古ハ巍々たり一巨藍ありしが地頭 行方彈正忠日蓮ノ弘法ヲ崇信一他宗ノ寺院ヲ滅却ス

行方彈正ノ宅地ハ六郷 其頃當寺も焼亡ス堂塔悉く灰燼トナリ 八幡塚ノ地ナリ同卷ノ末ニ

一とつと今ハ猶も其形をのぞき存せり 此争亂の時ハ當寺 二王ノ像ハ池上本門寺ニ

遷せしむり今本門寺ニ 存せしむり 東鑑義久三年六月十四日宇治川戦死ノ人ノ中ニ荏原弥三郎同六郎 六郎又嘉禎四年二月十七日將軍入浴供奉ノ人ノ中ニ荏原七郎三郎 貞政ト云名ヲ註せり同卷次ノ中延八幡宮ノ条下ニ荏原左衛門尉義宗 其子有成ナリト云人ノ名あり何處モ此地ヨリ出スル人ナリト云一族ノ

藍

女塚 女塚村農民太左衛門ノ地ニあり相傳往昔竹澤右京亮新田

義興と害せん為都より宮方ノ御所ノ少將殿と申上臈ノ女房 年十六七計ナル美女ヲ呼下し義興ニ召ス又其後九月十三夜

義興を己ノ宅ニ迎へんと謀し小彼女凶兆ありとて是をとりむ 因り竹澤其事此なるを怒り良等ノ命一件ノ女を此所迄

透し生し殺害せし故に土民あはれとてに骸を隠し一堆の塚と 築りしとてこれとも其名のあはれとて女塚とのと唱へ來侍

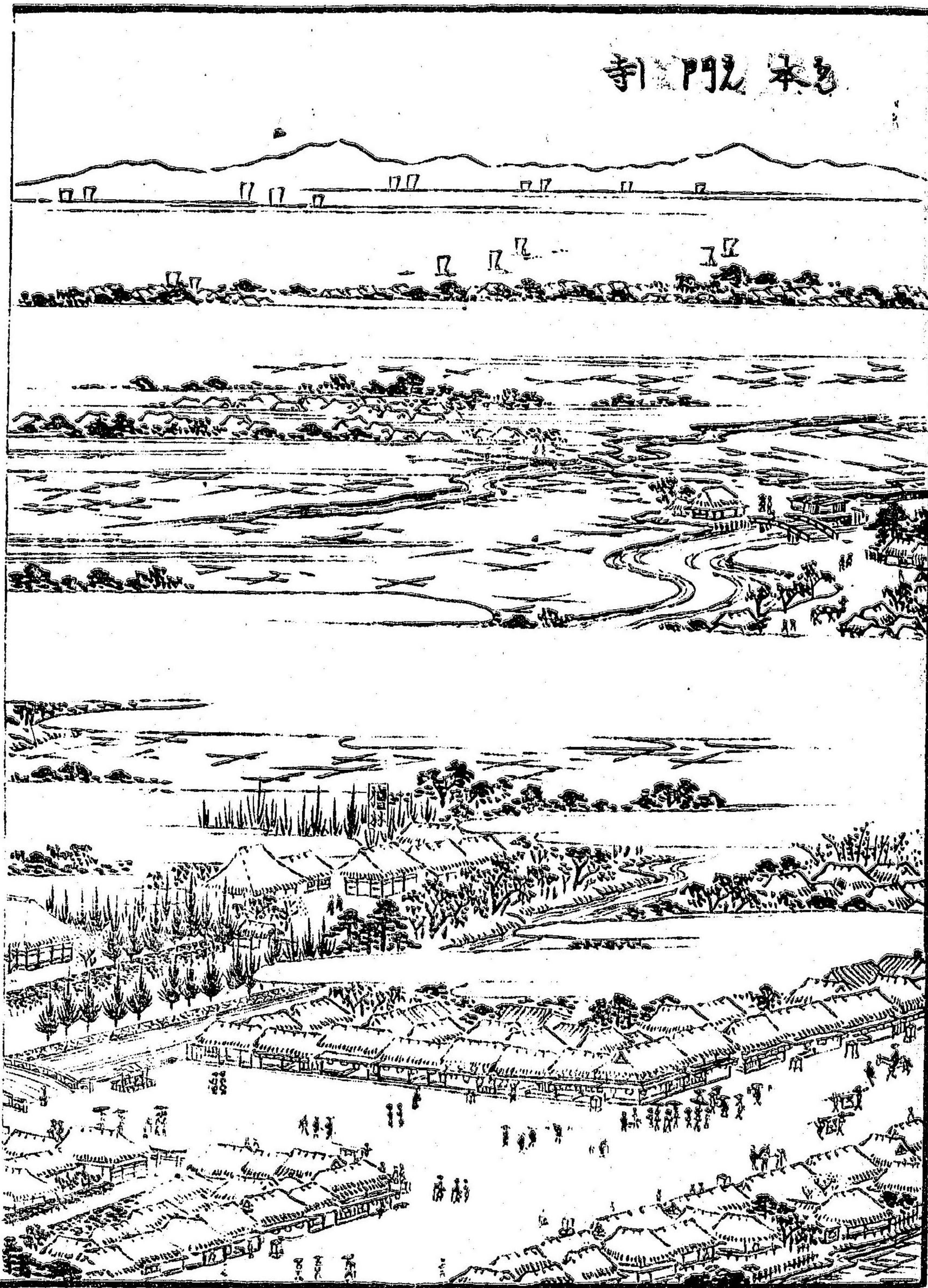
とつと

長榮山本門寺 大國院と号し池上邑ニあり日蓮大士弘法ノ

一本寺申す三頭と稱せし一員あり 甲州身延山總州正中山 當寺日蓮大士終焉ノ古跡申す弘安年間ノ開創なり 佛西疏云

小湊なり得道ハ備澄あり持法輪ハ身延入り聖觀ハ他日ナリ云 則宗祖

寺門之本



大士を以て開山祖とて支保元年丁巳六老僧第二位日朗上人  
 當寺を修造して天利とてある於て諸門徒推して開基と稱せ  
 日朗上人は筑後公正法院大國阿闍梨と云姓八源父ハ新羅三郎義光の子南  
 平賀の住人次郎也我四世の孫平賀有國の子なり十歳中より出家文永八年大士  
 二年北條時宗の命を受時印と共花開園漫録と云文永八年大士  
 二月廿日池上は戒せ世壽七十八卯花開園漫録と云文永八年大士  
 權宗ゆゑに京都中へ皆あつたりと古老の人の物語なり今池上本門寺まかくの  
 ぐの古風のとらふなり  
 祖師堂 惣鹿子野永七年寅十月十三日炎上せと云く西暦三年渡辺幸庵老人對話  
 右馬頭頭李一授を起せの時此本門寺諸堂 日蓮大士像 弘安五年十月十三日  
 西暦及ふりとも日洞上人再建す 弘安五年十月十三日  
 又同日同年十一月廿九日法上人影新築りたり又和蘭三郎圓會は當寺  
 宗祖大士の木像ハ大士秘藏の日時法上人其則ありと云く  
 額 祖師堂 太虚庵 光悦筆 釋迦堂 當山第二十五世日朗上人の  
 本釋迦如来おひ四菩薩の 額 釋王殿 伏見親王真跡 轉輪藏  
 像ハ共は遺慶の作なりと云く 額 題目堂 題目堂 同樓門の法ありと云く  
 祖師堂の後よりあり 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同樓門の法ありと云く  
 鬼子母神 妙見堂 樓門 石階の上より下の左右は金剛密迹の二像を置  
 行基菩薩の作なりと云く

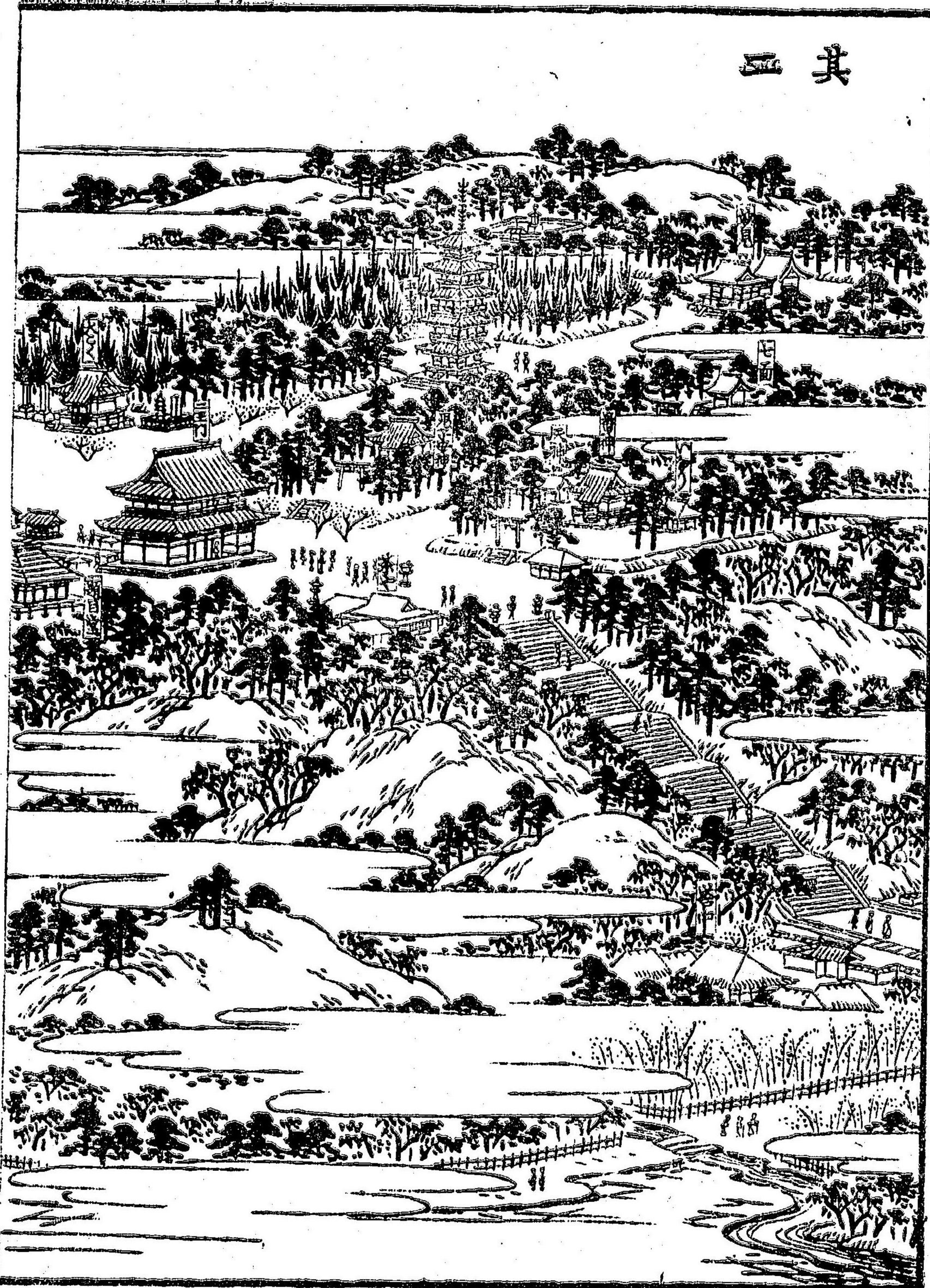


身延記行  
万治二年

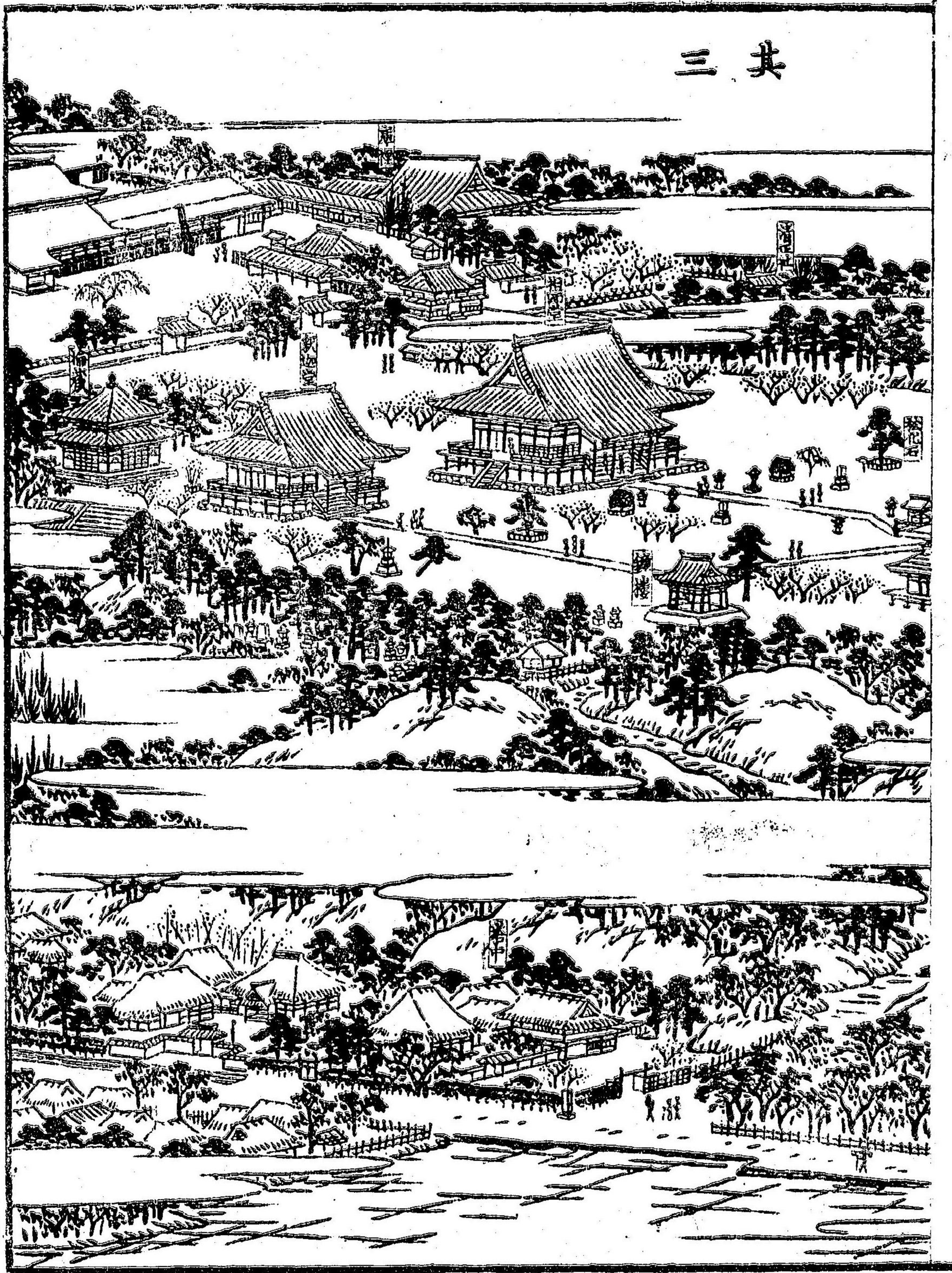
深草陽士  
元政法師

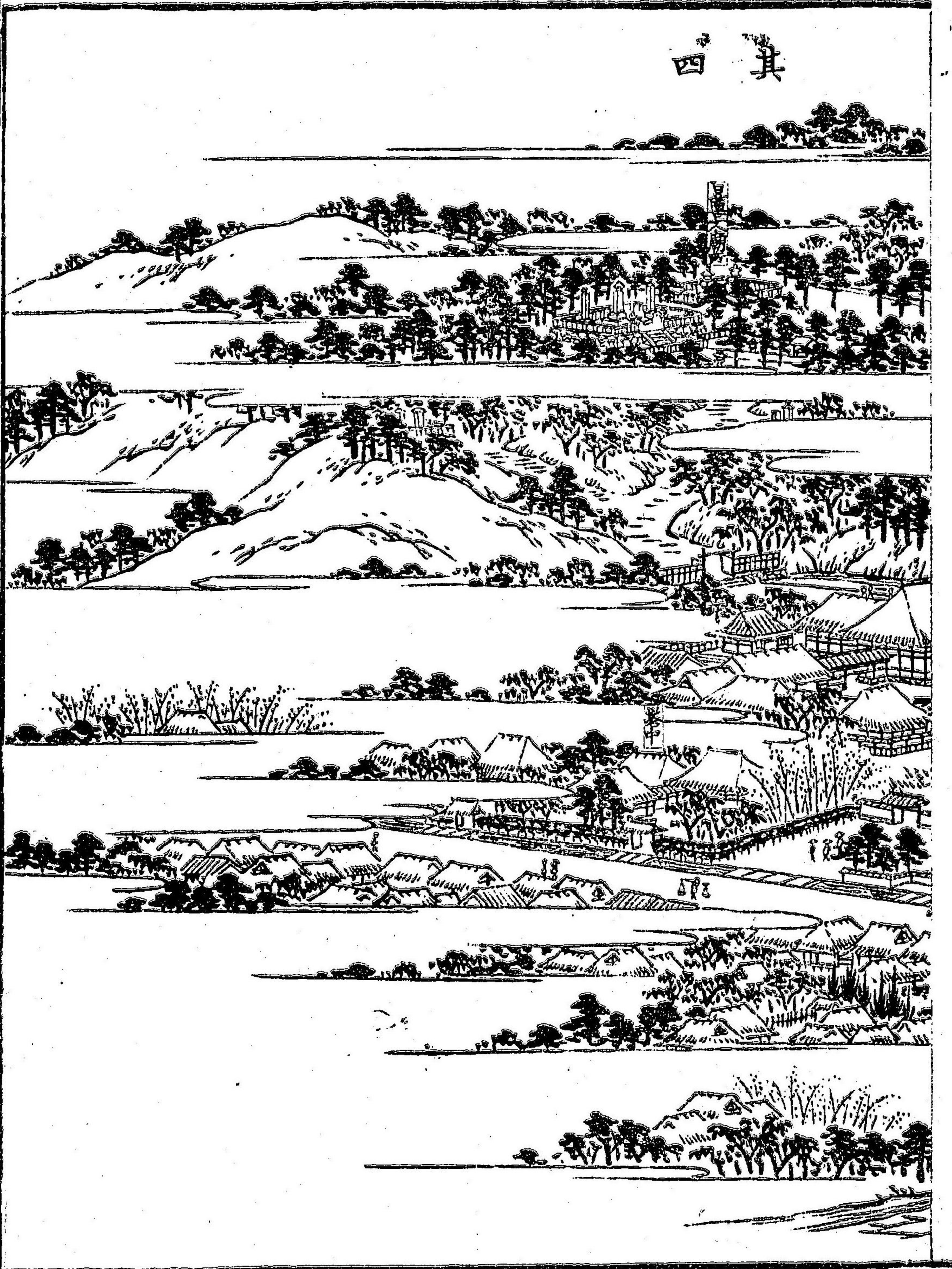
そのれは二見  
とて上へ  
たてら、修  
の川が水は又  
のりて書院  
のふふ外  
ぬれぬふふ  
とてまき  
ゆれぬに抱  
てて  
人世以智音道師断丹寺  
今宵池上月依舊照天心  
平たると観く遠不  
所居堂とて好くじ  
肉つもの山雲も  
山國ありは雲の  
あ、ん不、れ生  
別ありありと  
之とあんのまんと  
とてわると

其二



三其





額 長榮山 光悦筆 五層塔 七面堂 宝蔵 客殿の棧

檀所 南谷あり此の南谷檀林と云ひて 日蓮大士茶毗所 同所の山際あり

草堂を 狩野探幽法印の墓碑 同所あり 狩野家歴世の墓碑

日蓮大士終焉日跡 本堂より西のありあり 日蓮大士鏡浄影堂

九老僧日澄上人の附屬 本堂より西のありあり 日蓮大士鏡浄影堂

と号今故あり大坊と改む本朝三大坊の一員あり 日蓮大士鏡浄影堂

弘安五年九月宗祖大士宗仲宅に在り 寂し庵多項如是未嘗有の大導師

我一家に入りし悲歎のあまり影を遺さむを求む上人夫婦の深信黙止と

終に託し自姿を鏡し彫刻あり宗仲と号し世人鏡の影を

稱し同臨滅度時 葬柱あり影堂の舞殿あり大士宗仲宅に在り

硯井 洞庭前絶壁の下あり 冷泉中々甘美あり 柱あり

講へ此井の水を汲く期既三七日の中あり 佛像を造りて

祖一代之の秘記を考む 旅立浄影 同所あり 弘安五年九月十三日

六老僧等は後へあり 旅立浄影 同所あり 弘安五年九月十三日

期日法師上人其項宗仲の像を造りて 宗祖日蓮大士石塔

頂山の池上右坊門大夫志宗仲墳墓ら 同所あり 朗賢院日宗聖

六年癸未九月十三日とあり同一傍は妻女の墳も並ひ立と法号八日明上人總之  
池上右衛門大尉宗仲一は宗長は作の姓ハ藤原氏禁闕四部官の一ハ  
我前宗親親王は後ひ來りて宗長は兼倉の任へ邑を武州池上の地は食ひ嘗て壽元  
元年丙辰八月鎌倉の宗仲大土の宗仲と相謀りて父を謀りて遂に父共大土の  
宗仲は壽元宗仲毎歳時と相謀りて父を謀りて遂に父共大土の宗仲と相謀りて  
連宗とく宗仲ハ世の工匠と業と  
鎌倉の宗仲ハ世の工匠と業と

坊舎三十六字 大坊ハ九老僧日澄上人ハ附屬あり南坊ハ六老僧日昭上人  
僧日像上人在せり是をあらせり 惣門石階の下額 本門寺 光悦筆

寺寶註法華經四卷 宗祖日蓮大士遺物目錄簿一冊 弘安五年十月  
淺日無へ賜ふ由傳記の四卷の遺物を傳へて宗祖日蓮大士遺物目錄簿一冊  
宗祖日蓮大士遺物目錄簿一冊 弘安五年十月

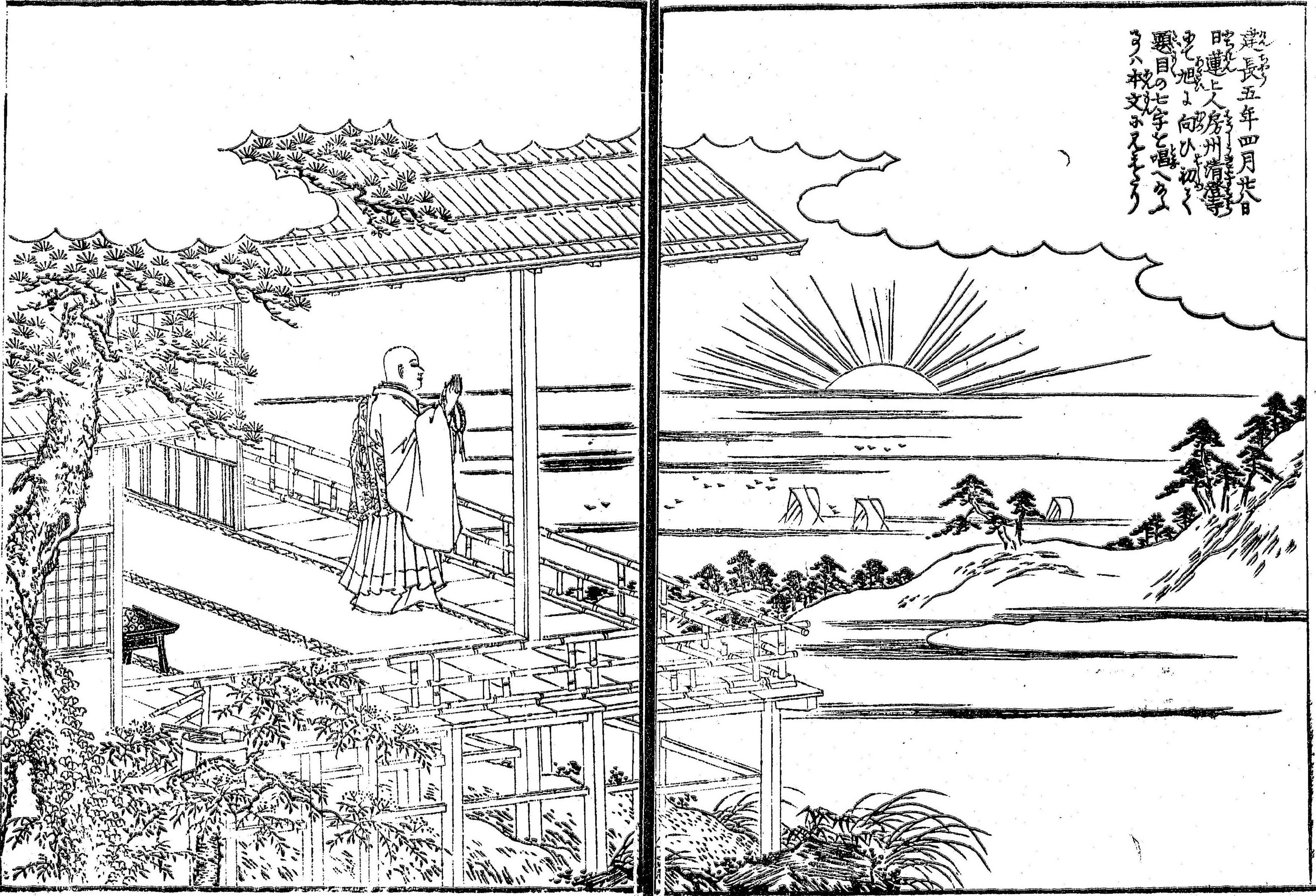
齒骨一枚 宗祖大士親筆消息 數通同大士所持念珠一連肉付  
遺物の目錄簿一冊 宗祖大士親筆消息 數通同大士所持念珠一連肉付  
宗祖大士親筆消息 數通同大士所持念珠一連肉付

對面を思へと云ふの云々 紫石 靈鷲山より

眞宗太刀一振 勸化簿一冊 池上本門寺 草山數元政法師是を撰ふ

蓋聞時俗及顯佛之法藉世興成矣荒涼僧藍共斯以  
眞宗大士親筆消息 數通同大士所持念珠一連肉付  
池上本門寺 草山數元政法師是を撰ふ  
勸化簿一冊 池上本門寺 草山數元政法師是を撰ふ  
眞宗太刀一振 勸化簿一冊 池上本門寺 草山數元政法師是を撰ふ  
對面を思へと云ふの云々 紫石 靈鷲山より

建長五年四月廿日  
暁上人房州清浄寺  
少之旭よ向ひ初  
要目の七字と唱へ  
るハ杖文ふんま



民況是長久之世昇平之時乎因茲乃今普叩檀門  
廣募樂施正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠  
萬方致志一振鶴樹寥落重興祇林衰微人々入此  
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清涼  
之日者也

宗祖日蓮大士姓ハ藤原父ハ貫名次郎重忠  
母ハ清原氏あり一ハ島山の氏族也貞應元年壬午二月十六日  
房州長狹郡小湊左近越五郎兼良の嫡子生る

大士降誕の地ハ一字と胎ハ詔書と夢とを以て後發心故善日對と名づく  
十二歳清澄寺入て真言の業を道善小  
學び名を樂王曆と云宗要抄天福元年癸巳五月十二日初て寺入とあり清

嘉禎三年丁酉六落飾深衣受戒蓮長と号し是生と唱ふ命道善  
所の名なり宗要抄十月後自日蓮と改む又靈夢の應或時虚空蔵此

求聞持の法を修し靈應と感をもて於て一聞千悟一普く諸宗の  
濟と大に經書を通す竟不諸經中王最為第一金言に至る大道

利生の志を發建長五年癸丑十歳三四月清澄の室中て七日三昧の

入同廿八日旭日日對ハ掌を合せ始く法華題目の七字を唱ふ佛  
化迹日弘法のの故に道善念て清澄を逐ふ同五月或ハ四月相州松葉谷

後に住と同七年己卯十四歳註法華經を著す一ハ實相寺小入て大藏  
大意を著す又文應元年庚申十九歳立正安國論を編む後に山安國論

時賴に捧く然といへとも其書諸宗を誇り倚慢の文あるとりて  
是を却つて大士をて豆州伊東に謫せむ時に弘長元年

辛酉五月十二日なり此先文應年中總州に遊ひたる富木氏一堂をいつて  
中山法華經同二年壬戌四十歳時賴悵然とて感を所あるを以て翌年

癸亥五月廿二日傑を下して大士を救を依て復鎌倉に歸る文永元年  
十三八月大士房州に下向母公妙蓮尼同十月三日死師弟新誓あり蘇海あり

同十一月十日同國小松原に移る東條左衛門平景信大士の他を思ひて  
小松原を去りて大士に依りて一本を寫すの半服を理む今後の經といふ事あり  
鎌倉に歸る時に至りて一本を寫すの半服を理む今後の經といふ事あり  
經文を寫すの半服を理む今後の經といふ事あり

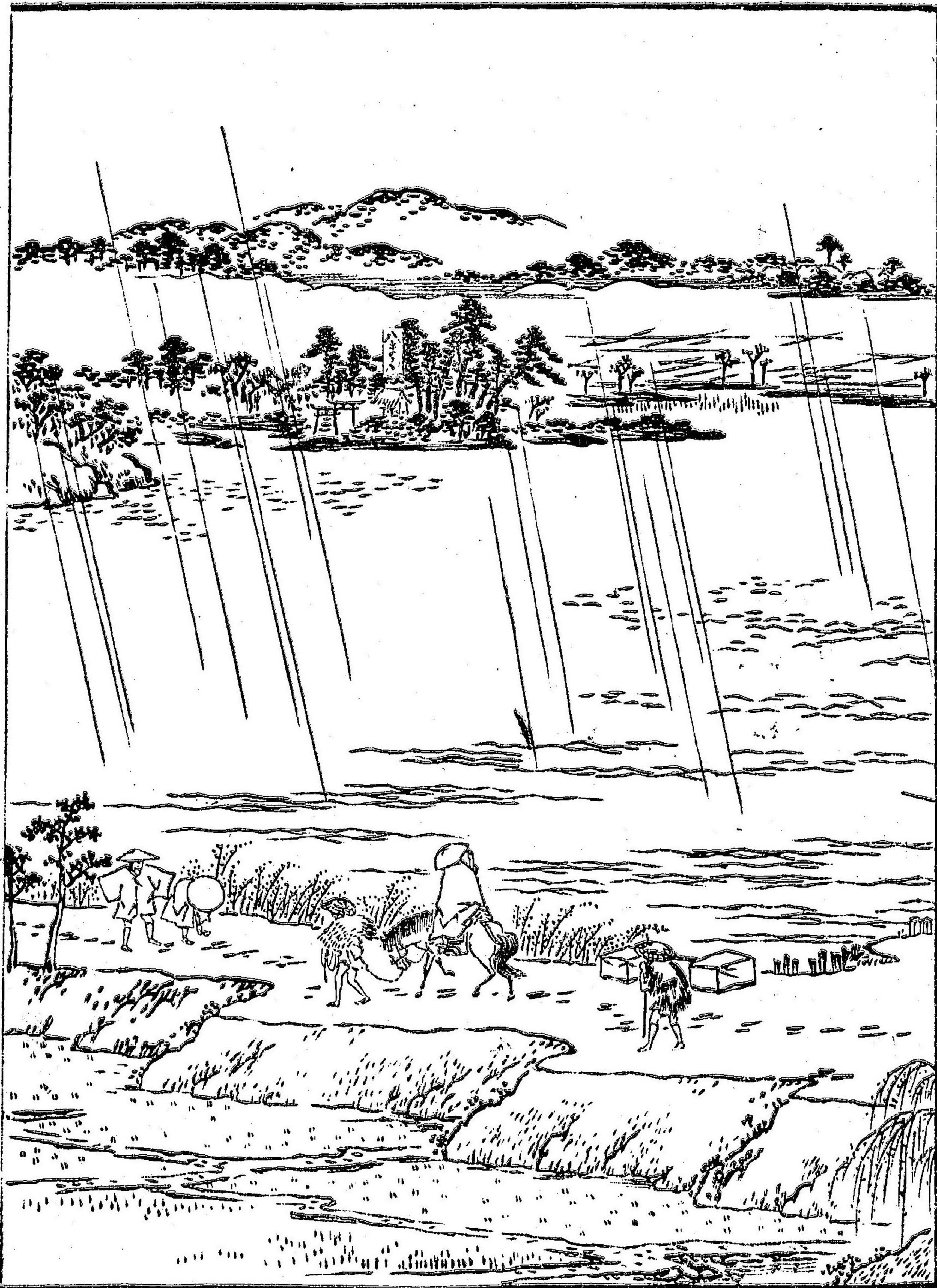
法は托して國家を乱さんと罪をなす死に中まりと依り同年  
九月十二日執權時宗頼綱は數百の兵士を添へ松葉谷を發向せしめ  
大士をかり捕り又日朗等も六人の輩を地牢に入其夜龍口に於て  
大士の頸を刎んとせしむ  
同前村寂光山境口寺其地此時一老嫗あり其  
靈威ありと云く執權時宗大は驚死を宥め  
世俗の口碑に傳へるの如し  
此老嫗は指荷の神化せり云く  
佐州は請を鎌倉より高祖を免むの使者と龍の口より怪異を告んとする使者  
又同十三日本間重連は依智の家は到りし其夜辰星庭前の梅樹の枝は擡りて  
放つ其靈と云く星嶽山妙典寺と云同十月二十八日佐州に於て時宗あり其海上  
角田の水面上に高祖掉をせしと怪異を畫しめし又文字の象波間は散りて自ら龍  
蛇を動せし勢ありと云く又呼んで成の題目といふ又同年十一月朔日大士佐州大野の  
聚原の川堂に入て龍を祀りて申す云月 同十一年甲戌 歲五再ハ靈威は  
十六日僧越あり興邦の僧等と大に問答す  
すありあり 遂に執權時宗大士を赦を依三月二十六日鎌倉に入  
同五月十二日甲州身延山に隱栖せんと鎌倉を發し同十七日かゝる  
移り草庵に入らる其先同年五月二日王府より護法の牒を下りしなり又其頃  
大士石和原より石を水底に投し鶴鶴の鬼を化せ  
其地幽邃なりと云くも四方觀ひ慕ひく衆を集る者雲の如し

故に其室狹く衆を容るるありあつて依り一室を建て身延  
山久遠寺と云誦經觀念十年一日のゆ其頃七面の神一女と化し來り  
妙道を傳へんを誓ふ  
弘安五年壬午宗祖齡六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありと云く  
同九月八日身延澤を去り同十八日此池上の地に移り右衛門大夫  
宗仲の宅に入宗仲は家持の  
寺と云く今の大坊也 同廿五日より安國論を講しめ  
講畢の後衆は告て云く吾三七日の中は化せんを悉達太子を  
提提河の辺ゆく八十歳の時涅槃に入め我も又當國田波河の辺  
ゆく滅せし若地震せは是其期ありと云く又日朗は語て曰く  
吾入滅の後墓所ハ必身延山に築へしと云く嘗て十月三日親ら  
本迹大要を書し立像佛弘長元年大士豆州論居の頃  
田房室より  
附屬する所の立像の釋地なり世に隨身佛と稱し此を  
海中より出現の附屬書注釋し今浴の本國精舎あり 安國論官牒二本を  
併しり日朗は授あり官牒二通の考へを按じ文永十二年二月十四日  
藏經の牒と同年五月二日護法の牒とをいふあり人欲  
同八日上行附屬の法門を弘めん為し六萬恒沙の眷屬を像り正しく

上足六人を定めて所傳時日向日興且衆の命と云く吾没  
後六子を見らる猶吾と見る如くせよと行きて同十二日諸子問訊を  
遺訓傳と然り既やと侍者も自ら筆を所の大曼荼  
羅を懸し焚香散花持誦愈つとむ十二日黎明地震小諸  
弟子皆来り集ふ大士衆と供よ方便品を誦を入佛知見道故の  
句に至り睡りゆく寂を示し或人云く壽量品の伴に至るとも本門寺  
其田地や社古の宗神の宅地なり  
世壽六十一法臘四十六華儀禮は遵ひ山中は閑雅を林樹變衰  
しく人を鶴林の想わしむ同十六日又十二月遺骨を収め身延  
世目云  
山は送ると云以上宗祖傳の要を採り記す  
の太士梅城の書凡平有余部  
千束池 本門寺の西一里余を隔てあり長東西へ三丁を中  
北へ五十歩あり土人云往古此池は毒蛇住り後七面を祭る  
といふ又池の側は日蓮上人の腰を懸ひいと称する古松一株  
あり

中延八幡宮 中延邑に在る故号と別當八日蓮宗にて八幡山  
法蓮寺と云開山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相傳ふ當社の  
神像ハ源頼信朝臣寛仁年間靈夢よみ感得ありといふ  
長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義  
朝臣陣中より移り敵を亡し其後永兼六年奥州安部頼良  
乱を發し又清原武衡家衡を逆の時も共頼義朝臣義家朝臣  
鎮守府將軍とて奥州へ發向し亡り此御神の衛護よ  
ある所なり崇信浅く累世源家は相傳ふに在る郡の領  
主荏原左衛門尉義宗と云入り姓ハ源朝臣則播太郎  
義家朝臣の孫也代に此地を  
祿を依て中延を氏とす又此所は館せり康元元年丙辰鎌倉於  
日蓮大士の宗化を聽直は擅越とある其家は此神像を蔵む嘗  
靈夢を感するの俊文永年間日蓮大士を請し法華經に  
法味を以て一社を勸請し自ら日記を作し其子左衛門尉



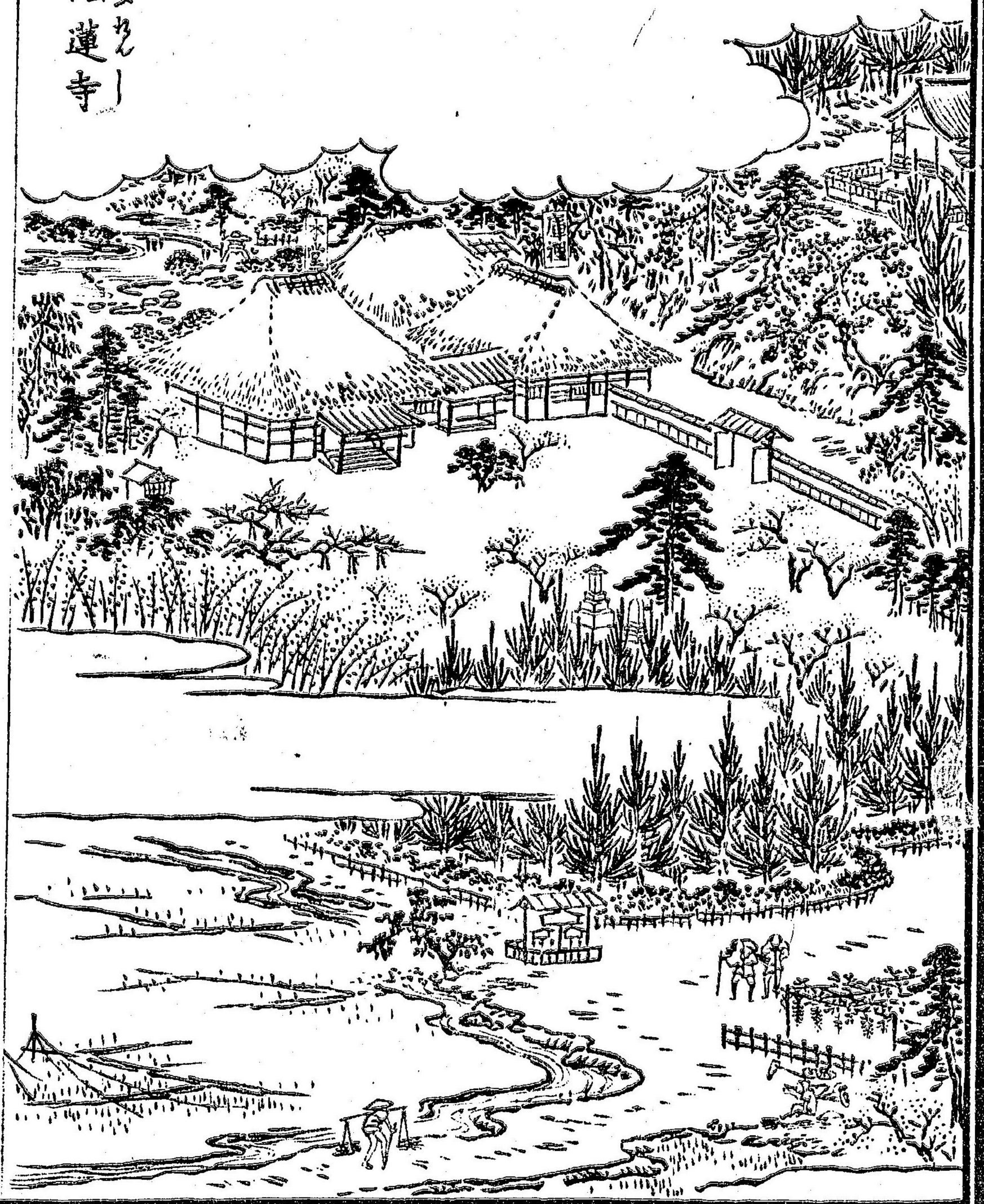


千束池  
架袋掛松

中延八幡宮

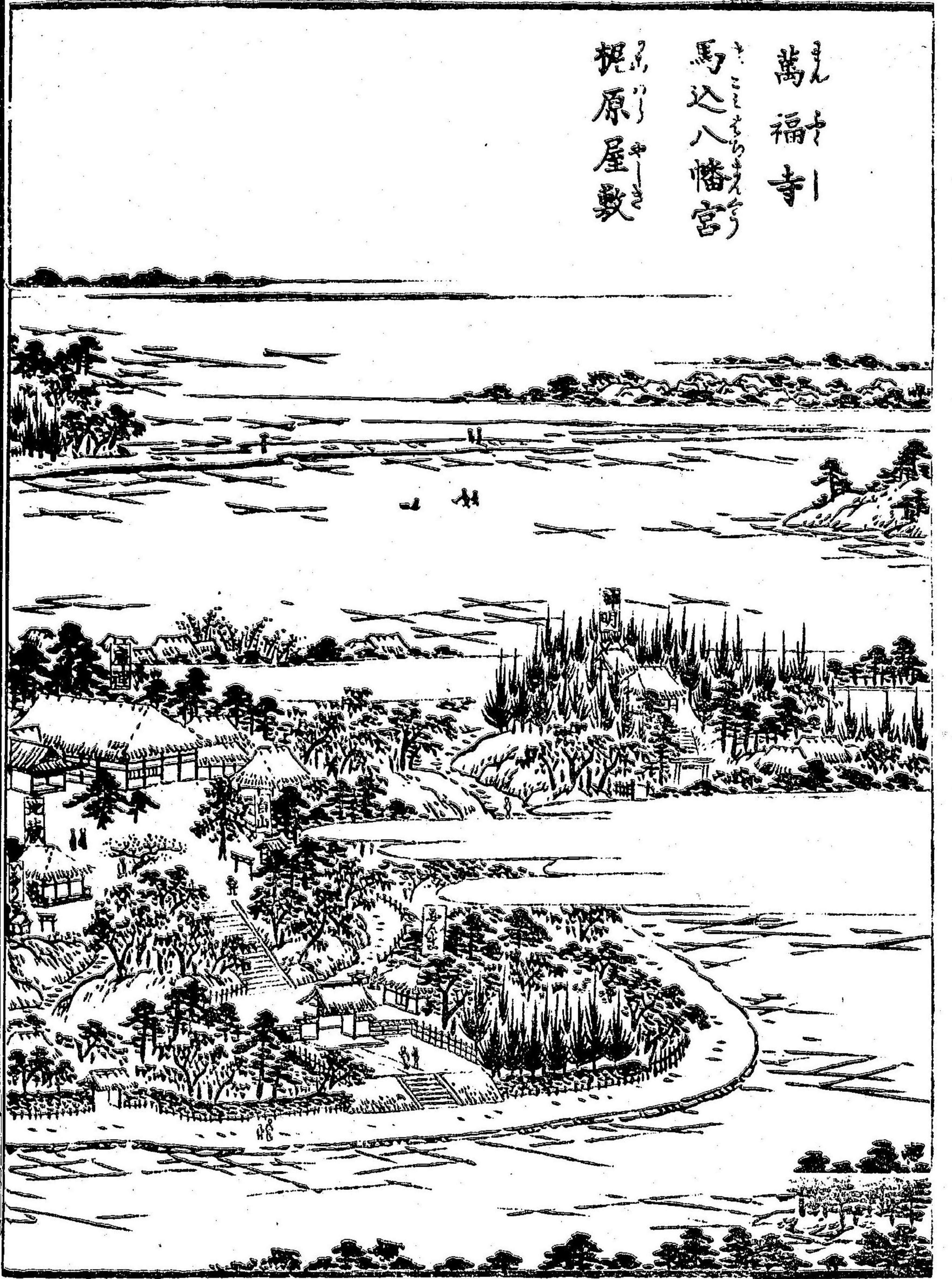


法蓮寺





萬福寺  
馬込八幡宮  
梶原屋敷



最初の道場

本堂本尊阿弥陀如来 立像 三尺 山城國八幡村に住する康尚と

の人の作なり 康尚ハ美濃守康信と云ひ人の一子なりハ幡大菩薩の亦現あり

願 大宝王 弘法大師 真跡なり

本尊縁起云開山上人五十三歳此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ

一七日の間恭養あり然同十五日の夜社壇に僧形の弥陀如来出

現一の以上人へ十念を相兼し一の以上人歡喜ありて翌朝下向の

時社外に至られ異僧傍よりありて上人は弥陀の像を附与

あり依て武州鶴木村へ迂一系をも 此時光明を放ちし人故に 光明寺と号けし人云

願 光明寶林 縁山大僧正 滿空筆

功德水 同本堂の前左の方の井の邊に八幡鎮座の靈地ハ必名水あり當寺の鎮守

靈像を當寺の杖と仰さる然ハ本堂一致 聖蹟を功徳池 弥陀の心水なり

荒塚 本堂の前左の方あり相傳江守雷火は撃れて死せしを築き築き

觀音堂

同境内堂の右あり縁起云善惠上人津國四天王寺の聖靈院より

善惠上人宇都宮實信坊を創りて此靈像を感得あり又靈尔は任せ

堂を攝堂一は安置を北朝の延建四年新田左兵衛義興竹澤右京亮より

遷江守の講計は入る夫の邊の水中に一族を悉く撃殺せしは

かゝる義興怒て火雷神となり作澤江守一族を悉く撃殺せしは

の事なりハ雷火墮るる屋敷に寺民屋も悉く焼せしハ

異を免さんると此本堂は祈念一雷火の難を遣ふの奇蹟を數し

故に土俗雷留觀音と稱す

當麻曼茶羅 本堂の縁の壁に上り廻りて西山上人像は數數の曼茶羅を圖繪し

寺に有と稱し二とまて西譽上人曼茶羅也此曼茶羅の圖中中品下生の蓮華青

蓮華の損るる形ありと記す

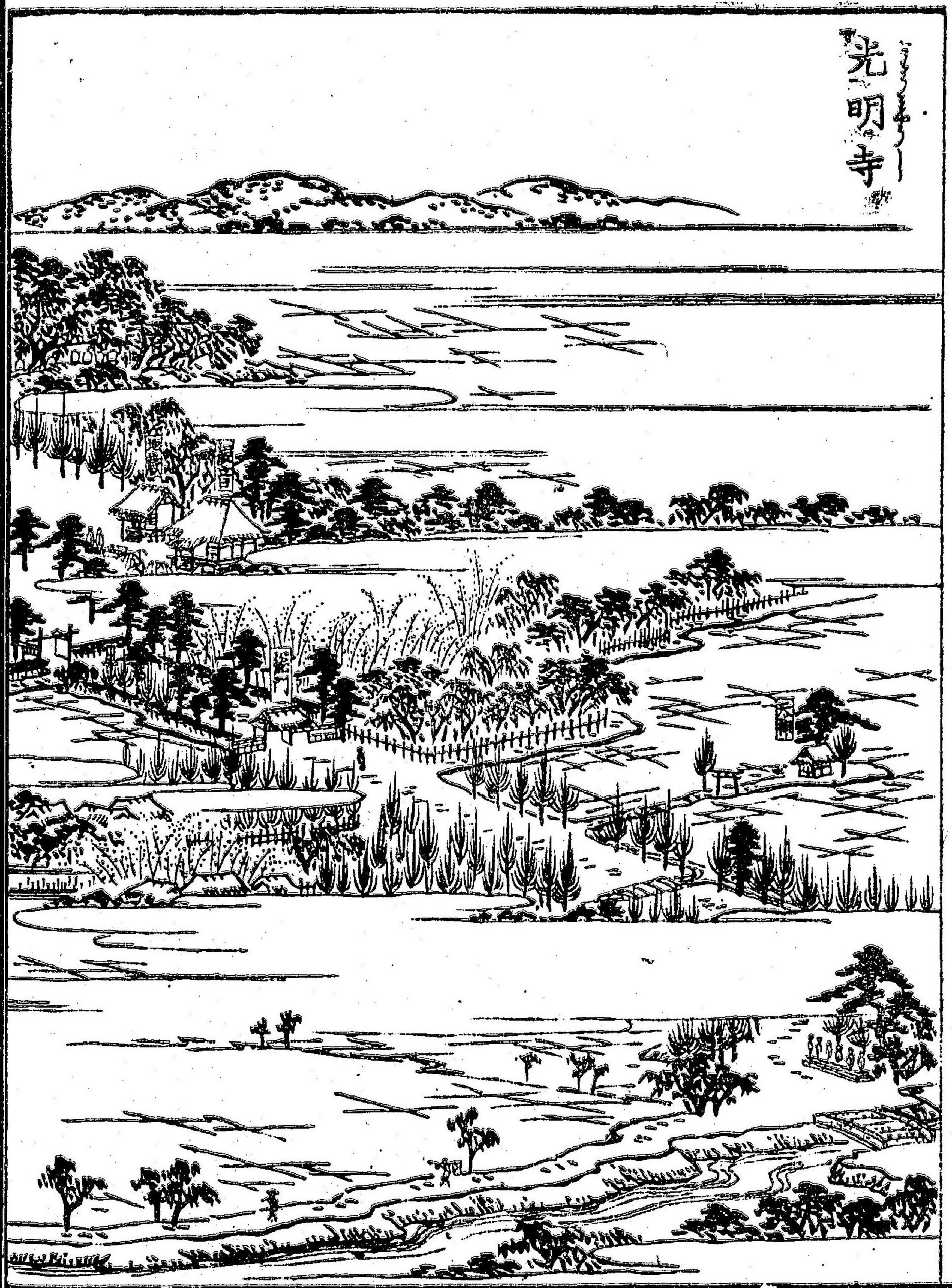
善導大師 影像 善導大師自木像三軀を假し海に投して云く有縁の地は

置を今猶存せり 扇一柄 善惠上人より宇都宮實信坊より入られ扇なり天福元年善惠上人歡平

下りて然上人實信の遺るる東國は越きたまふ其時業内のより實信坊を伴ひて

魁の心を謀一首の和歌を持し入山の窟に書解多ひ實信坊はありて

光明寺  
こうめいじ



此の詳解... 古く云々の... 任せし... 此の詳解... 古く云々の... 任せし...

開山善慧上人 初解庵 諱ハ證空俗姓ハ源氏天曆聖主の皇胤

加州刺史親季の子なり 證空と云ハ父親季の法名證空と 治承元年丁

酉十一月九日誕生久我内大臣通親公養て子とて幼齡より菩提

心に住し故に吉水上人 源空の許に投じ十四歳雜髮しく善恵と

号と性俊逸中と一を聞く千悟に建久九年の春月輪殿下の請よ

より源空上人選擇集と著し多し時善恵と借し文義を考定

を或時殿下云く師の滅後此書不審わらふ誰よりて是を决

せん師云く淨土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附属し我は異

なりすと云ふかいつ殿下善恵を崇信し多し甚厚し上人都

鄙共は伽藍と建立し多し一十二區又淨土の曼陀羅を圖し

所は収め佛經の印板を削き未來の學者に益ありしむ終に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院に於て化寂を歳七十一

西山善峯寺に居し盛に宗教を弘通あり故に世に西山上人

と稱し 淨宗西山派の大祖と稱せし 當寺往古ハ大伽藍中

に關東の高野山と稱し衆人先亡業に逆

修等の石塔婆と建參詣の人も多かりし故に今も古き

石碑石佛の類ハ此所彼所ハ存在せり 寺の大門より六七丁東の方より

光明寺池 不浄多し時ハ崇ありしと田畠耕作 光明寺の南に添み

往古の矢口は川筋ありしと云ふ今ハ

水流替りて南の方へ寄て流る池の長と東西貳百余間幅ハ南北へ

五十間ありしと云ふ 里老傳云記主禪師當寺に任職たりし時

新田大明神社 光明寺より五丁南の方矢口邑ありしを別當ハ古義の

真言宗小く真福寺と号し高畑宝幢院に屬し祭る所の神ハ

新田左兵衛佐義與朝臣の靈あり十日を縁日と云ふ拜殿の邊に怪管也

新田明神社  
真福寺





本社の地ハ古廟なり則其田ヲ瑞籬を造り設く中ハ一堆の塚

ハ蒼樹繁茂也此地ハ昔の奥州海道中江ノ流ハ此處に流れて土俗の

沿と稱せ長凡三百間斗横四十間或ハ三十間程ありといふ

古廟碑 社前左の方ハ建ちて久しき古廟あり

夫元弘新田神君廟碑 社前左の方ハ建ちて久しき古廟あり

昔分朝諸國各提其源公戰年而新帝于京於南

王南朝宗人左中將源義隆卒其族衰神君助為南

帝密御東國勢將張先世足利氏中其子衛助為南

山以幕中關東勢將張先世足利氏中其子衛助為南

國清若得再事舊君願有所效神君曰臣無罪見疑於

進之有寵既而請君願有所效神君曰臣無罪見疑於

止神君不出竹澤不克而神君亦不猜近之乃又

密請島山使江戶氏比助亦從之且人曰有竹

澤難使分士卒先神君至夫口津勤之倉且人曰有竹

與其人乘馬中流舟人伴失墜船具於水沒而求

陰去其塞泳而逃水不可為乃怒呼曰吾為屬雷電自

噪而神君而沒十人從焉後害者至津雷電自

屠其脇腹而見皆死人見猶懼使立碑自書篆額乃

冥神君介而今四百年人猶懼使立碑自書篆額乃

祀其神至今四百年人猶懼使立碑自書篆額乃

又使元喬撰舊史叙其略勒石係以迎送辭其辭曰

霹靂激兮電揚光龍車驚兮玄雲翔神之至兮歎亡

常儼如在兮水中中央被犀甲兮張彫弓既一怒兮奮

鬼雄仇且殪兮懟未弱將以儆兮茲壽宮燕有禮兮

米蘭蕙潔余祀兮神無儻固往來兮勇以屬掃妖氣

和兮天門霽顧余降兮雲之際又來兮卷可瀟良辰

延享三年春三月守山源賴寬蒙平安服元喬撰

新田左兵衛佐義興書簡一通

先度以內書事何出也丁寧中通涉筆色異

于他如の然の仍為内感内使一文治了少補

於後亦下初の内面同く九州の後亦下初の内面同く九州の

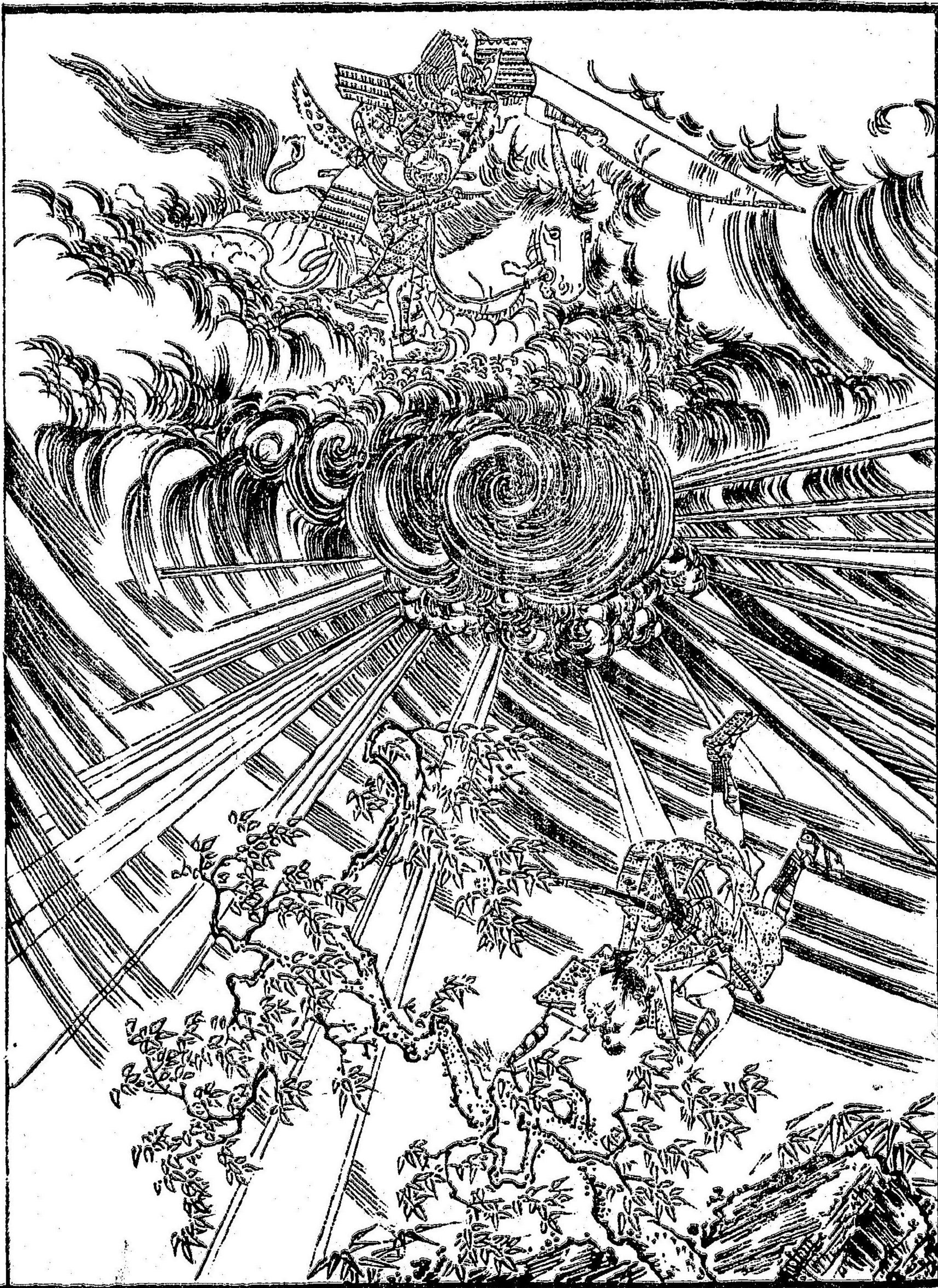
修後お後、るる要の程、あ細るる、之、意、寺、亦、  
災、可、令、侍、連、給、ふ、事、洋、々、

十月十一日

波多尾若くは

義興判

其、余、兵、器、古、陶、器、の、類、ハ、寺、宮、に、お、り、く、是、を、略、せ、  
太平記云、新田左兵衛佐義興ハ、義貞の妾服の子、上野國に居りし、  
家、は、志、あ、る、に、上、野、の、兵、と、も、此、義、興、と、六、将、に、取、立、三、万、余、騎、を、共、に、鎌、倉、を、責、港、に、  
討、野、へ、参、り、し、る、に、先、帝、感、應、あり、義、貞、の、家、を、興、せ、し、器、を、り、し、く、子、孫、を、  
名、を、德、業、と、申、せ、し、元、服、せ、し、義、興、ハ、野、田、左、兵、衛、佐、義、興、と、呼、ば、れ、し、段、量、は、勝、を、  
増、謀、衆、は、秀、々、れ、し、平、七、年、に、野、田、合、戦、お、こ、し、鎌、倉、の、軍、中、大、敵、を、破、り、平、を、  
當、り、し、古、今、父、左、中、將、戰、死、の、後、越、後、國、に、あり、し、武、藏、下、野、の、國、  
中、ゆ、く、新、田、家、の、志、を、寄、り、輩、竊、し、音、信、を、通、し、り、し、兩、國、の、間、に、  
其、勢、漸、く、萌、せ、り、然、し、此、の、鎌、倉、へ、聞、え、り、し、管、領、足、利、左、馬、頭、基、氏、  
富、山、太、夫、入、道、道、誓、大、に、驚、き、義、興、の、所、在、を、尋、く、度、々、勢、を、向、し、と、  
し、この、義、興、事、を、し、し、く、打、破、し、千、變、万、化、を、く、く、人、の、態、を、あ、ら、わ、り、  
故、は、是、を、と、り、て、道、誓、潜、し、竹、澤、右、京、亮、と、謀、り、竹、澤、を、義、興、  
の、下、り、め、夫、より、後、種、々の、毒、計、を、用、ひ、義、興、を、討、ん、と、し、れ、し、未、時、  
至、り、し、竹、澤、右、京、亮、は、回、義、興、と、し、野、合、戦、の、頃、其、は、屬、し、く、忠、あり、し、れ、し、と、  
後、鎌、倉、方、と、あり、し、り、回、好、を、忘、れ、ぬ、無、道、の、翔、を、い、か、せ、し、あり、  
竟、は、美、女、を、と、り、く、心、を、か、し、無、二、の、味、方、と、思、は、り、し、追、ふ、あり、し、り、  
竹、澤、偽、り、鎌、倉、を、亡、し、謀、を、運、り、大、に、義、興、を、ま、り、し、り、義、興、  
其、意、に、隨、ひ、延、文、三、年、十、月、十、日、の、曉、に、後、僅、に、十、三、人、忍、ん、て、こ、を、り、  
發、向、を、既、は、矢、口、の、渡、り、し、至、り、船、を、乘、り、竹、澤、先、小、謀、を、ま、り、し、故、は、  
渡、守、諤、て、櫓、楫、を、取、落、し、是、を、採、ん、と、し、偽、り、水、中、へ、入、兼、り、鑿、  
置、り、し、船、底、なる、二、川、の、穴、を、塞、し、木、を、抜、り、れ、り、河、水、注、き、入、り、其、  
船、沈、む、と、し、時、向、の、岸、なる、江、戸、遠、江、守、り、伏、兵、河、辺、に、起、り、関、を、ひ、く、  
る、不、放、く、義、興、初、其、謀、を、察、し、大、に、忿、て、自、ら、腹、撥、切、て、も、失、ぬ、か、井、  
渾、む、も、續、ひ、く、自、殺、し、其、余、世、良、田、右、馬、助、大、島、周、防、守、り、由、良、  
共、庫、助、同、新、左、衛、門、尉、等、ハ、引、組、て、差、違、ひ、又、互、に、首、を、撥、落、し、

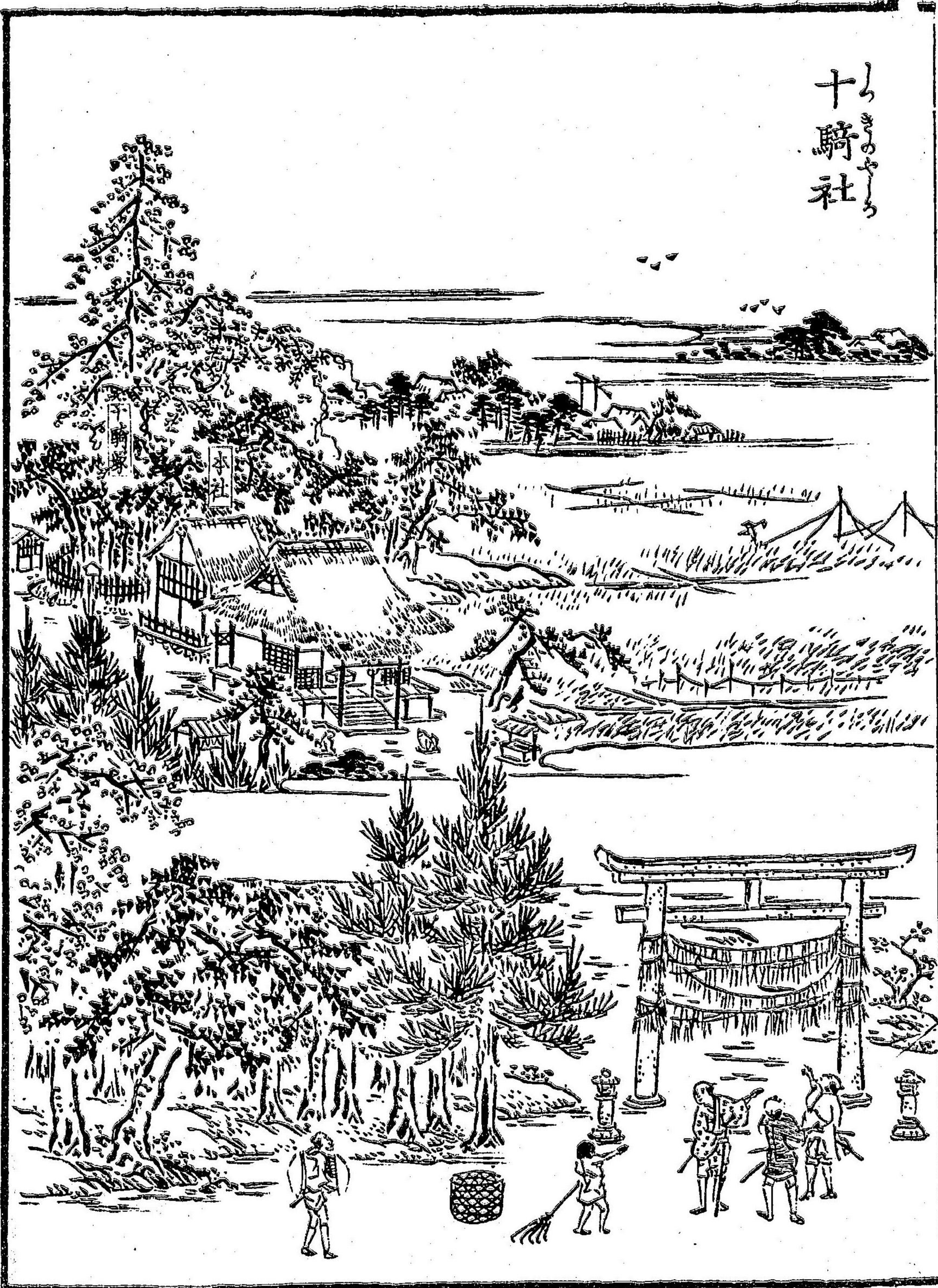


やまのこ  
矢口古事

てせ死する土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ  
水底を潜り向ふの岸に又上り敵三百騎よりあり終に  
主後十三人太平記の書に討死の人数主後十三人とあり義興と共討死を  
始と九人の名を注し其後四人の名あり其後竹澤及ひ江戸の両士等より其首級を尋出し入間河  
なる基氏の陣へ馳参し實驗に入ると其後同十月廿三日遠江守ハ  
今度賜り恩賞の地へ下らむと日暮及ひ矢口の渡に雷  
雷頻り鳴響きこれハ懼き馬を走せしむる辻堂に入らん  
此堂と云ハ鶴木光明寺觀音堂のよりあり折る黒雲一むら江戸頭の上は落下す雷  
電耳の邊は鳴りこれハ餘り怖く後を吃と顧み義興  
火絨の鎧は龍頭の五枚甲の緒を痛く白栗毛なる馬の額に角比  
生たる乘鞭を打ち遠江守を弓手の物は好し燈の鼻は落  
下り七寸計なる馬俣を乳の下へかけぬ  
と射通しと思ひく馬より倒れ落し岡絶しを後者共興

求せく家よ歸り七日の間水は溺る真似とて死する  
又翌の夜畠山入道の夢は新田義興長二丈をり鬼とあり牛頭  
馬頭阿防羅刹共十餘人を前後に随へ火車を引く左馬頭の  
陣中へ入ると其日雷火は入間河の在家三百餘軒  
堂舎佛閣數十箇所一時は灰燼となり是の事す矢口の  
渡は夜く光物出く往来の人を惱し種々の祟ありこれハ土氏を  
怖れあひて義興の靈を二社奉祀し新田大明神と崇ると云  
十騎社同所道を隔て向ふあり新田左兵衛佐義興の家臣十人の  
靈を祀る此所も拜殿の事也本社ハ一堆の荒塚の事なり土氏  
登与瀬明神と稱し事實ハ先  
十騎とハ所謂 井彈正忠 大島周防守 南瀬口六郎  
由良兵庫助 同新左衛門 世良田右馬助 市川五郎  
土肥三郎左衛門 以上八人の名が平記にあり其餘の人名は  
然ハ異本に松田市河道 藤七 壺政 推守 進藤 孫六 左衛門 等の名あり  
日本武尊祠 傍にあり 攝社とて相傳ふ此御神をみる鎮座なり

十騎社



奉るの久くを此地上古ハ奥州への街道や日本武蔵東

夷征伐の時爰やく矢合せしむり曰此なりとの

六郷の川を隔て縮毛の地は夫向と云邑名あり

題も其時の矢の向ひたる地故よりなり

古川薬師如来堂 古川村よあり新田明神より東南の方二十丁を

と隔つ醫王山世尊院 誠作東 安養寺と号し新義の真言宗や

高畑村の宝幢院は属と上古ハ東光坊と号せとなり本堂の額醫

王山の三大字ハ黄檗高泉の筆なり

本堂 本尊薬師如来 五尺 左右弥陀釋迦二尊ハ各五尺三寸脇檀十

二神将及び四天王の像も共々行基菩薩の作なり

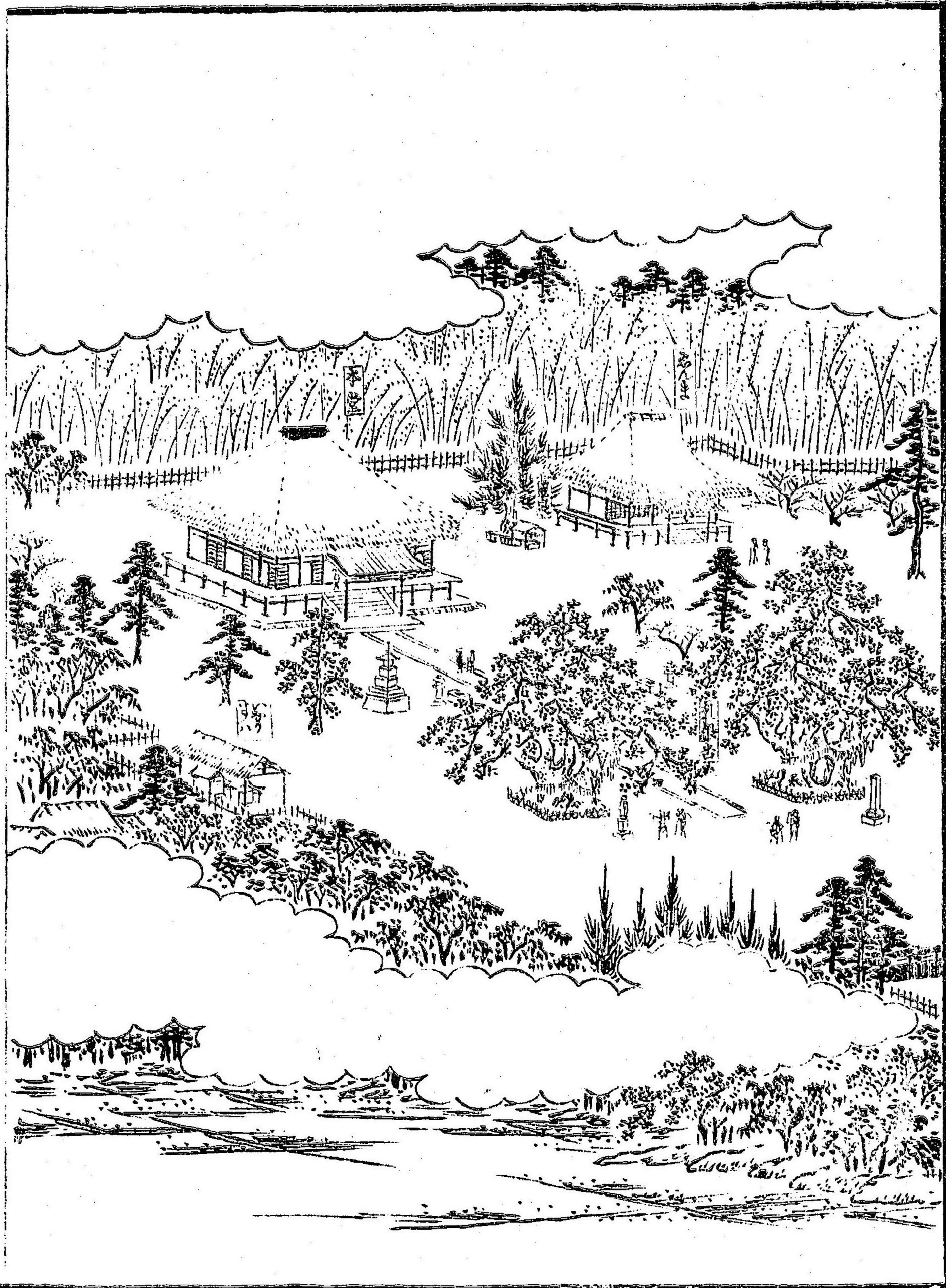
瑞光を現を依く被本と

以て像林とせしむり

银杏樹 本堂の前左右ハ二樹並立し諸人乳のあきもの祈るも験ありとて此靈

杉本靈泉 本堂の前右の方の杉の下はあり眼疾と患ゆる者此靈水と以て

五智堂 十王愛染の像もあり本堂の右に並ぶ



古川薬師



寺記云行基菩薩関東遊化の頃和銅三年庚戌此地に至るゆひ  
 今安置しむる處の本名藥師佛并脇士弥陀釋迦の両如来及び十  
 二神將四天王二王の像共々自造立せられし安置ありし是の  
 天平五年癸酉春三月 聖武帝の后王子沙誕生の頃乳味盡とせ  
 るゆ故に行基菩薩の奏より當寺の藥師佛を祈誓せり  
 其驗を得ゆひ一頃銀杏樹二株を奉納しむるゆり又同年の  
 秋御堂造立なりぬ七堂伽藍の靈地となれり  
 婦人乳の必きその至心祈請然る後此地の領主某諸宗貴伏の宗  
 派ゆり當寺の繁榮を深く如堂塔破却し其銀杏樹の根  
 下を捨て風雨に浸しむ其罪業はかくて其後永祿の頃住持采傳十  
 方は勸進して一字を嘗と本寺を移しぬ  
 按武藏國風土記殘篇に在る郡滿田郷滿田寺は清宗法師藥師佛を安置  
 せりとありぬ當寺といふは又同書に滿田郷より梅を貢とせしむる  
 記ありぬ古川村大森浦田等の地其地は同應せしむる梅樹多し其葉を採りて  
 齋くるとも云ふれは是より考ゆれば此の滿田郷は梅の葉を採りて齋くるとも云ふる

な〜ん地

大綱山光明寺 高畑村あり宝幢院と号し新義の真言宗ゆり

本寺は六日如来惠心僧都の作なり當寺は保元年間の創立ゆり

岡山を行觀上人と号せり

大森 鈴の森北南不入計村に隣り小田原北条家の所領役帳に

渋谷又三郎及び六郷殿 此人所領とある中六郷内大森とあるハ則

此地のゆりなり

太田持資平安記行

大森といふ森のゆりなり

大森のあはれゆりのゆりなり

貴船明神社 大森村海道より右あり此地の産土神ゆり別

當は真言宗大森寺と号し来由詳なり

蒲田梅 蒲田邑あり 蒲田は和名類聚抄に武藏國在る郡の中あり

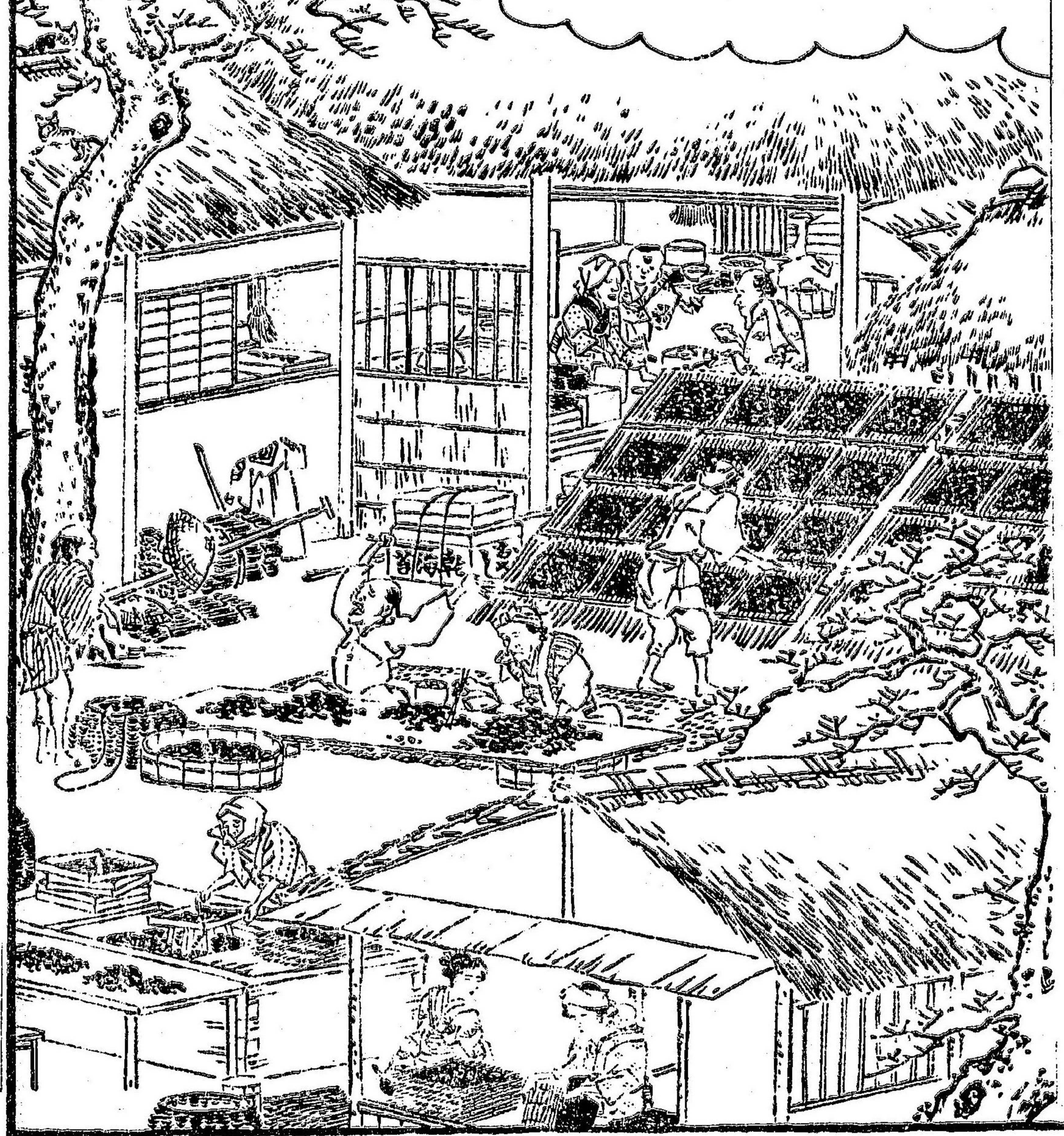
助五郎六郷堤方及び稲毛在る月郷今井屋を説く所の地を領するなり

此地の人もゆり又同書に圓城寺所領の中六郷内兼田とあり此所のゆりなり

一年の間  
 田置と  
 合風味  
 要  
 高貴の  
 家  
 賞  
 諸國共  
 送  
 業  
 者  
 く  
 江  
 産



浅草海苔  
 大森 品川 等の海  
 産  
 浅草海苔と称せ  
 ると 往古やこの  
 海産せし  
 其旧称を失つと  
 呼来  
 秋の時  
 産  
 建春の時  
 正  
 定規  
 寒中  
 絶品



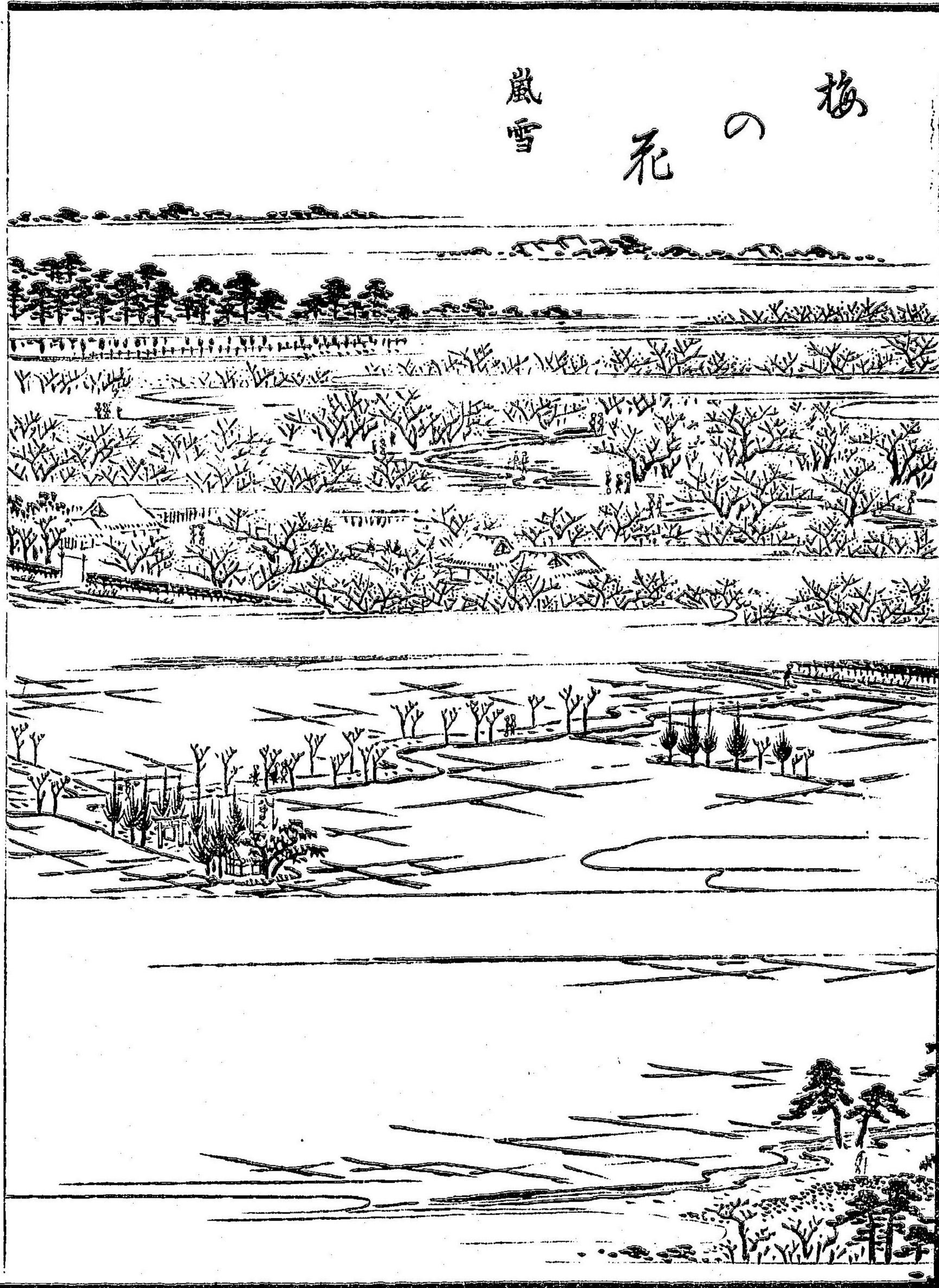


大森村の  
名産  
として  
多く  
の器  
物  
を  
製  
す  
他  
邦  
の  
人  
求  
め  
る  
家  
産  
物  
に  
加  
え  
て  
製  
成  
さ  
る



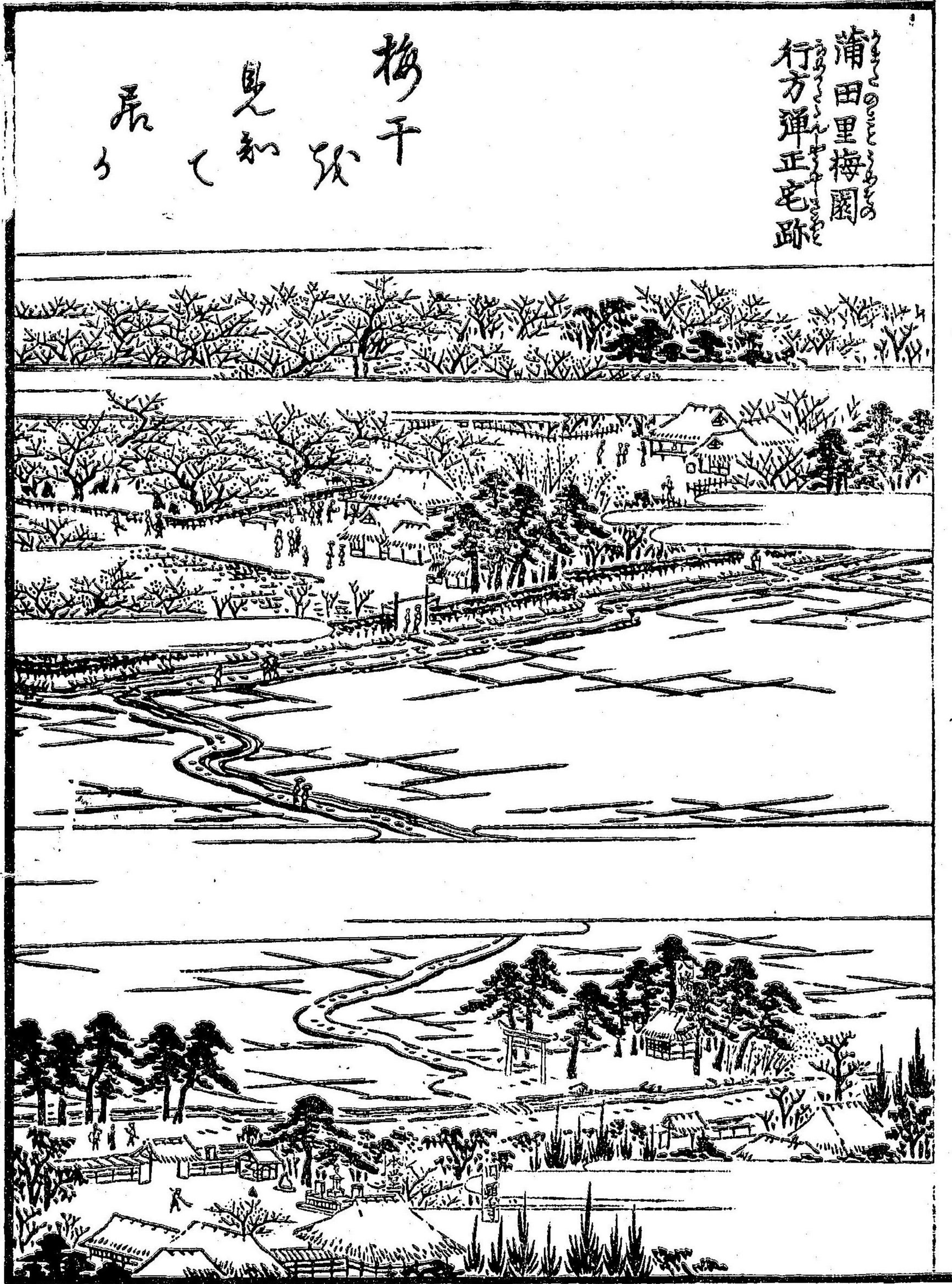


嵐雪 梅の花



梅干 見知 辰

浦田里梅園  
行方彈正宅跡



此地の民家ハ前庭後園共ニ悉ク梅樹を栽テ五月の頃其實を採ク都下ニ鬻クされハ二月の花盛中ニ幽香を採リ遊人少ク

行方彈正忠明連宅地 六郷八幡塚の辺を云々人此地ニ邸園村と

性光山圓頓寺 蒲田村ニあり日蓮宗池上本門寺ニ屬ス本寺ハ

釋迦多寶等の木像を安置シ開山ハ九老僧日證上人池上大坊の

中興ハ日藝上人ナリ 寛永二十年癸未二月朔日當寺ハ小田原北条家の臣六郷の

領主小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を

行方彈正忠直清々宅地の旧跡ニ當寺開創の檀那ナリ

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と

稱ス父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月其墓碑ハ堂前左の方小

存セリ寺前ニ存ス所の溝堀ハ當時直清此地ニあり頃構の

外堀を其儘ニ用ゆると云小田原記ニ永祿九年武田信玄小田原の  
人數少キ隙を窺ヒ思ひよる方より小田原へ押寄るとある茶  
下ニ六郷ニ行方彈正居り一川己らり此の辺所なる八幡を要

害ニ構へ稻毛の田島田島共部九郎 横田横田武部 駒林駒林圖書 等

と引卒一橋を焼落し甲州勢を通ス信玄ハ品川の宇多河石見守

鈴木等を追散し六郷の橋落れ池上へかゝり池上寺を追捕し池

寺ハ本門寺 此寺の僧と案内者として矢口の渡を舟中渡り稻毛の

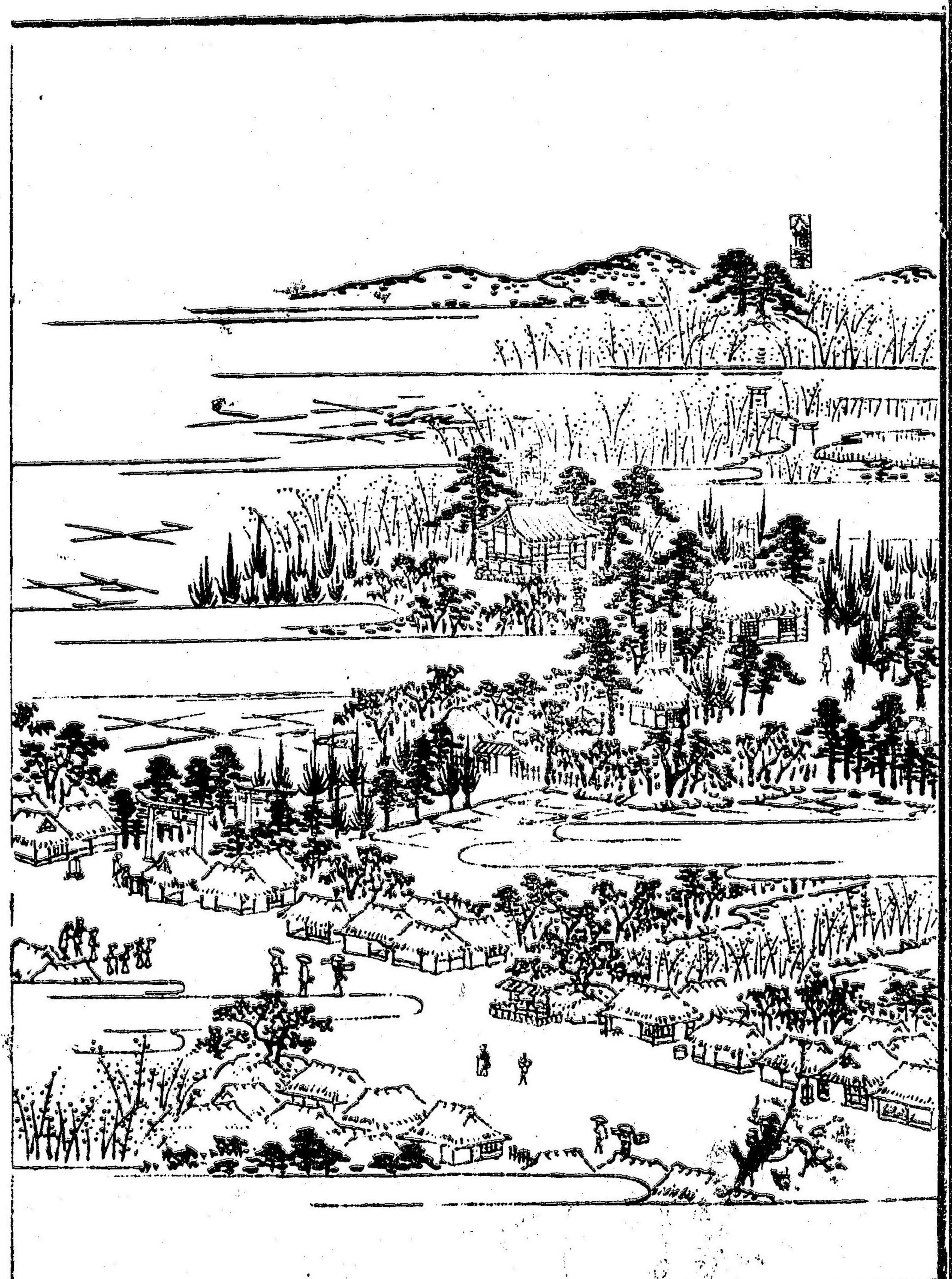
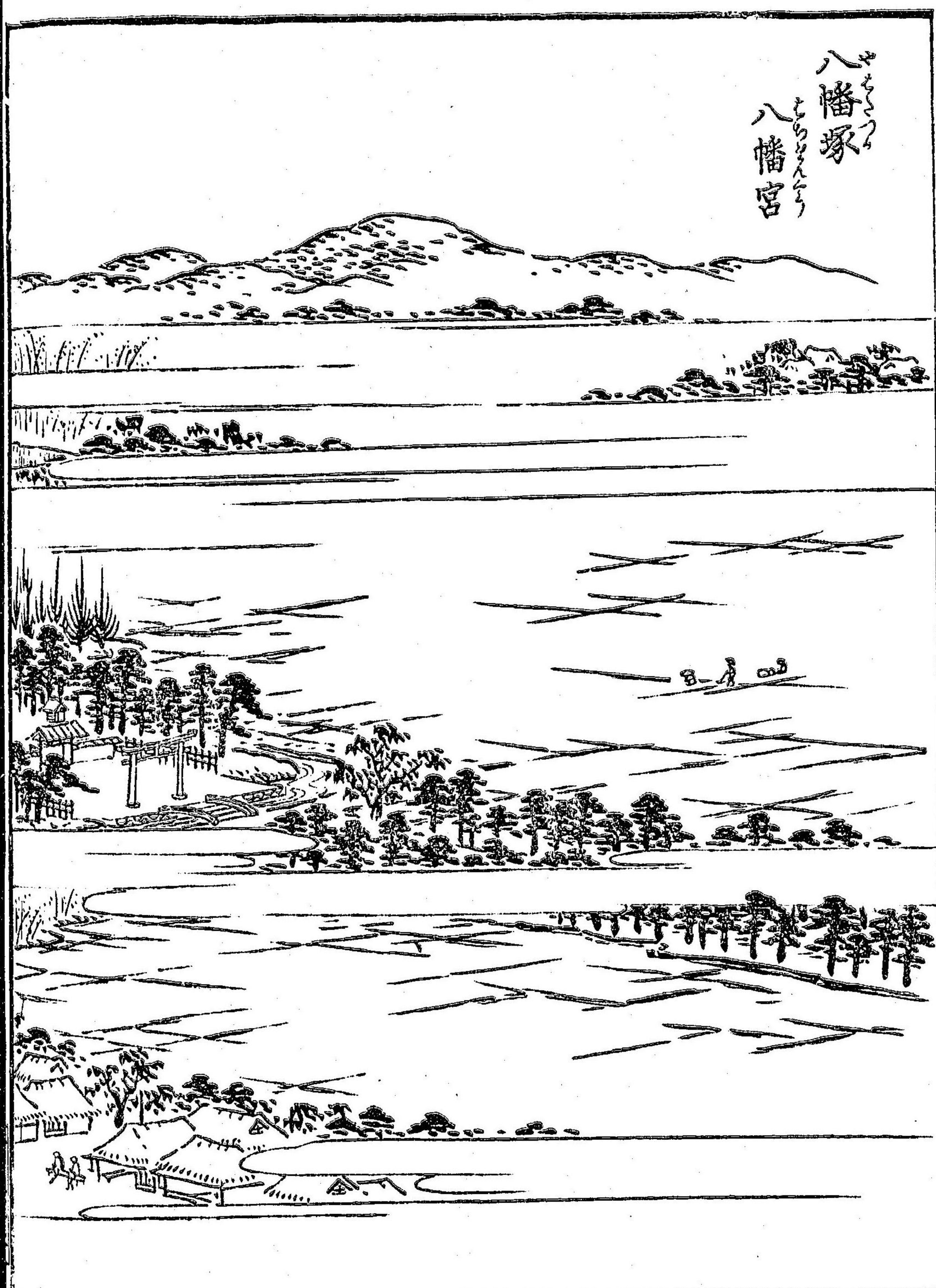
蒲田八幡宮 同所道の傍ニあり前ニ記セ小田原記の文ニ行方

彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構ふとあるハ當社のよりあり

按ニ三代實録貞觀六年八月十四日戊辰詔して武藏國  
後五松下蒲田神を以テ官社と列せり當社のよりあり

行方山妙安寺 海道の内新宿ニあり日蓮宗也本門寺ニ屬ス  
本尊ハ三寶也開山ハ日現聖人なり行方氏室圓光院妙安日行

八幡塚  
八幡宮



大塚の菩提所と云天正十七年丑十月晦日あり

明羽山長照寺 獵師町あり日蓮宗なり當寺は豊太岡秀吉公此

寺佛なりと稱し北辰奴見大菩薩を安也

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守中へ八幡塚村あり別當八真言宗小

安房國より大軍を率い鎌倉へ入る頃此所を旗を建軍勢の

著到を記しゆい旧跡ありと云を勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮を

勸請しゆいとを祭禮ハ六月十五日中て神輿羽田より大師河原へ

移りたまひ當社に頼朝卿建立の時梶原奉行せりと記せし

梁牌ありと云を梶原景時なる馬込村石福寺の茶下は奉る所の小

八幡塚本社より右の方の樹木繁茂せり 旗立杉社地

古家敷大門の前の畑とあり古の海道と稱せり又竹林あり昔頼朝卿

旗竹を用ひられぬと云は又觀と地

六郷渡、八幡塚の南より此川ハ多摩川の下流中て八幡塚より

河崎の驛への渡りなり昔ハ橋を架せり享保年間田中丘隅と

りる人の工夫あり洪水の災を除んるは橋を止め舟渡ませしと云

田中丘隅ハ俗稱休愚右傳嘉古と稱し冠帯老人と号しよく水理は建を相州酒匂川

水と治りし此人の工夫中て今其河原ハ其事を記せり研あり又民間有要しこの

書を著し今上平間村の田中山妙光寺と東海道名所記ハ此橋の長と百二

十間ありと云を東路の四大橋といふ江州瀬田參州伏洲同吉田及此六郷の橋あり由

未記行 六郷橋吟 嘗居于此雖不考于旧記然重

注云俗 島山重忠 嘗居于此雖不考于旧記然重

忠者武 州甲族 而屢往來鎌倉則不可無其理故首

河崎及 此云六 郷里俗 稱重忠 居此村 重忠武 州七黨

長攻野 戰報君 恩稱重 忠居此 村重忠 武州七 黨

會同去 江城五 里許出 者入者 日頻繁 闔國列 侯

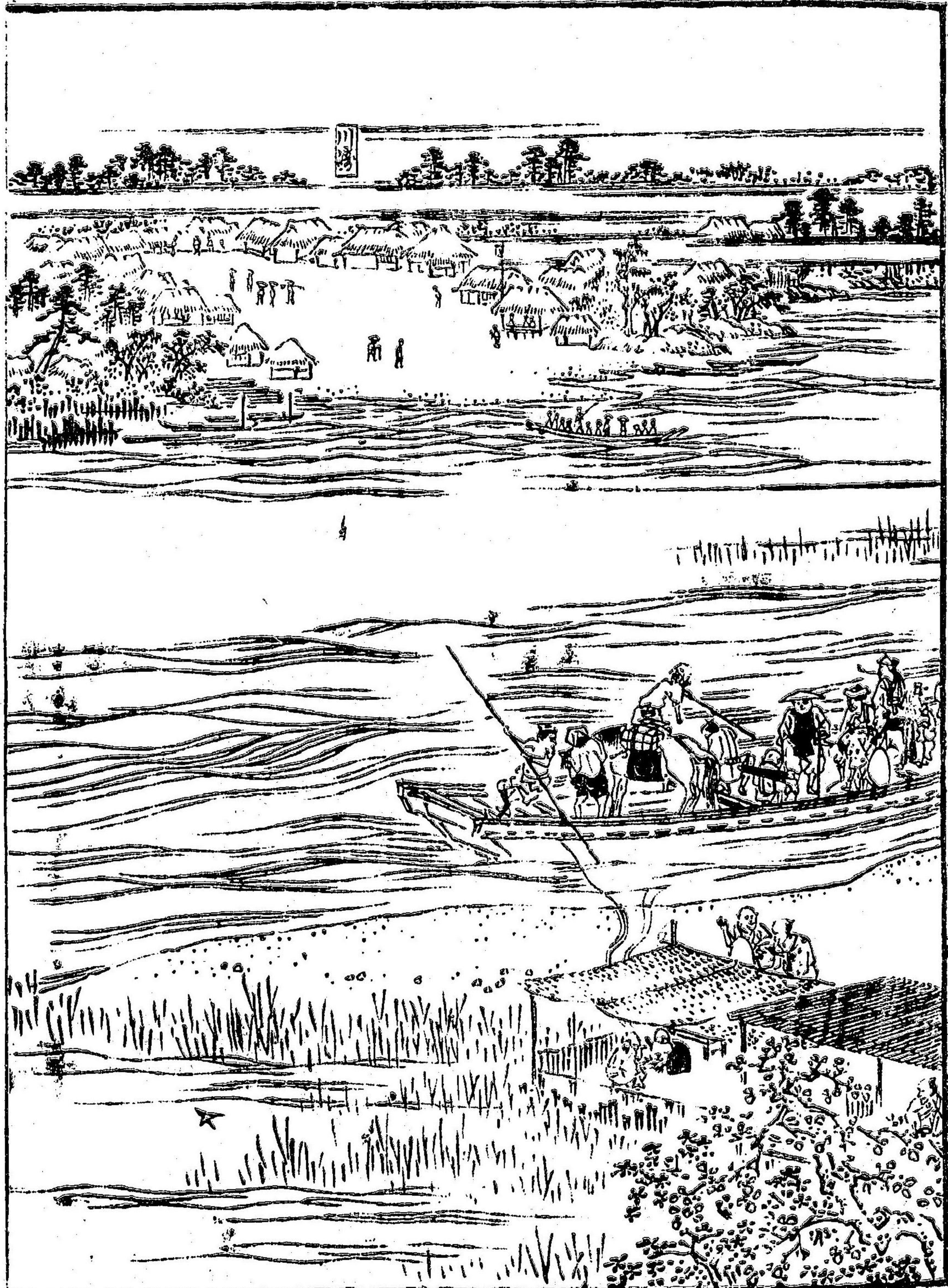
呼可處 興馬劍 才僕從 喧異域 來朝走 與利奔 可歲高

尾生約 女士農 工商幾 經過皆 是名朝 走與利 奔可歲 高

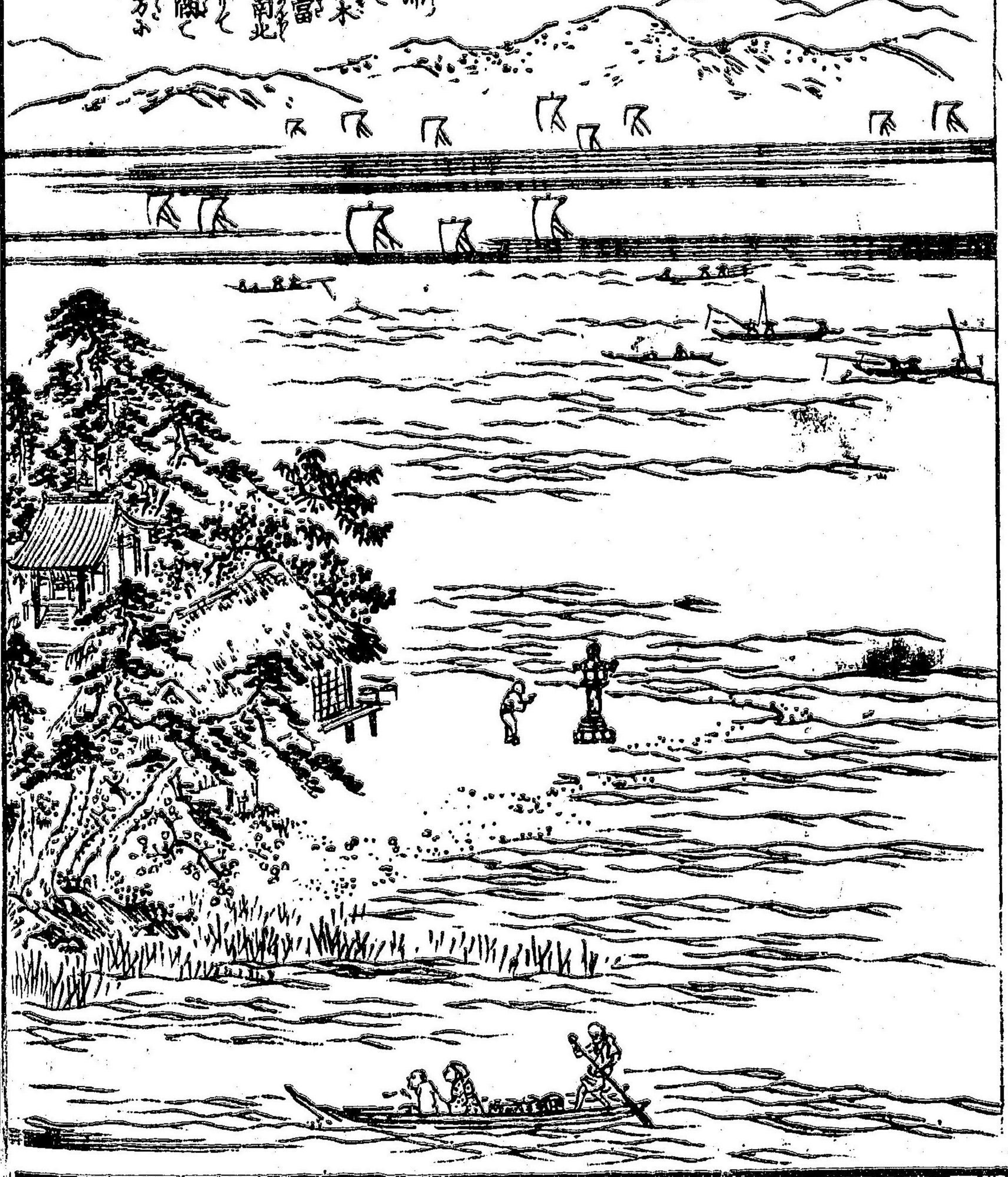
早吟成 女許何 用禪徒 弄胡蘇 玄霜搗 盡朝裴 氏可笑 丁

府今開 歡不自 斯入言 及江城 望衡門 三月遠 征幸歸

六郷渡場



此地の眺望最秀美なり東海海濱の  
 一帯に旭日の芳樹の  
 山が掛る南に清  
 玉川流るる清  
 流の富津の昔の  
 映るる西の海老  
 取川と隔て東海  
 の舞路ありて樹  
 東格静なり北に  
 荒波出城とてく  
 是前行家の氣象  
 万々あり



羽田  
 辨財天の社





櫻北条家の所領帳に六郷殿六郷大森分同花和の地を領し六郷の内  
 大森を共谷又三郎領し又六郷内鎌田と圓城寺同領分六郷の内  
 原分ハ鳴津弥七郎六郷内不計花井分共六郷内新六郎助五郎六郷  
 高ハ龍原日向守同入不計龍谷同入不計花井分共六郷内新六郎助五郎六郷  
 同戸越木村提原分ハ大田新六郎所領分六郷内根岸提原分六郷内  
 樂寺分六郷大田河原行方与次郎所領同川崎内万透院分六郷内運沼提  
 新三郎領せり如く昔ハ六郷と稱せし地の廣クも一里多し一里  
 寛永二十年癸未記行ハ島山重忠嘗て居住せりといふも日記を考へて然  
 重忠ハ武州甲族ヤリて鎌倉へ往來せり其理カキテ居住せりといふも  
 江戸名勝志ハ波谷金丸の一族ハ波谷庄司次郎重國といふ者あり遠  
 重忠ハ島山庄司次郎といひハ波人川崎庄司次郎と混し誤りて重忠  
 中より關戸へ移りて居住せりといふも鎌倉へ移りて居住せりといふも  
 鳴財天社羽田村の南の洲崎はあを故ハ羽田辨財天とも稱せり  
 此羽田の浦と扇と別當ハ真言宗中ノ金生山龍王密院と号ハ中  
 辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰ヤリ弘法大師の  
 作なりといふ此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家ニ傳へて尊  
 信ありし當社海誓法印の時靈夢ニ感ずる所ありて以て宝永八年  
 辛卯四月此社を遷此地ニ建しなり

田川大竜寺開山香國禪師正徳  
 三年ハ龜野所の社記と有馬侯の

江戸名所圖會天璇之卷

續起異同 又當社ハ如意寶珠一顆と安置せり天鏡の如く其  
 とい相傳ふ武州日原山ハ弘法大師開創の地なり山中ハ大日  
 靈水と稱するあり水中一顆の宝珠と存せ然ハ柱古此宝珠玉  
 川の流ハあつひ羽田の辺ニ止る水中昼夜靈光を現ハ依入  
 ちあつんと桐を下し是を得て後社を建て崇敬を當社是ありと  
 云云 累縁起ハ康治二年の春當社の南の大河ハ桐引と一顆の  
 宝珠とぬきり故ハ玉川と名つけ玉川村ハ天姥と稱しまた  
 社殿を経営するといふも屢風波の災ハからず久く保るあり  
 ハより一別當海誓阿闍梨法華經全部の文字と一字一石ハ  
 書寫し此海底ニ沈りて島を築き宝殿を建立せりとの感應ハ  
 あつらん夫より已降青松鬱蒼とて繁茂し庭上苔む竟ハ  
 風波の難を免るを得るなり

